高知県香南市発掘調査報告書　第９集

東野土居遺跡

ひがしのどい

―立山神社南北線農道整備工事に伴う発掘調査報告書―

2013.3

香南市教育委員会

高知県香南市発掘調査報告書　第９集

東野土居遺跡

ひがしのどい

―立山神社南北線農道整備工事に伴う発掘調査報告書―

2013.3

香南市教育委員会

序

平成18年3月、香美郡南部5ヶ町村の合併で誕生したのが香南市です。高知平野の東端に位置し、人口3万2千人ほど、温暖で太平洋から四国山地まで、東西15ｋｍ南北20ｋｍの広がりを持つ豊かな水と緑に包まれた地域です。

今回報告いたします東野土居遺跡は、香南市野市町東野地区から土居地区にかけて東西約1.5㎞の範囲に広がる弥生時代から江戸時代にかけての集落遺跡です。周辺はのどかな田園地帯で、調査地点の南側にある立山神社には、江戸時代の初めにさかのぼる市指定無形民俗文化財「立山神社の棒術獅子舞」が伝わっています。

調査は市道建設工事に伴うものです。溝や柱穴など、遺構は鎌倉時代が中心で、江戸時代のものも確認されています。立山神社の北側にも、中世から近世にかけての集落が広がっていました。

本調査以降、平成21～23年度にかけて南国安芸道路建設に伴う大規模な調査が高知県埋蔵文化財センターによって行われました。集落の様相や遺跡の性格など、歴史を塗り替える新たな事実が明らかになっています。一つ一つの発掘調査の積み重ねにより、地域の歴史は解明されていきます。調査規模は小さいですが、今回の調査は、東野土居遺跡の先人の足跡を明らかにする第一歩となる調査だといえます。

本書は、香南市の歴史を広く知っていただくとともに、埋蔵文化財に対する一層のご理解をいただきますことを願って刊行するものです。文化財保護の資料として広く活用されれば幸いです。

最後になりましたが、高知県教育委員会、高知県埋蔵文化財センターはじめ多数の方々のご協力をいただいたことに心から御礼申し上げます。

平成25年3月

高知県香南市教育委員会
教育長　安岡　多實男

例 言

1．本書は、香南市教育委員会が平成19年度に実施した立山神社南北線農道整備工事事業に伴う東野土居遺跡の緊急発掘調査報告書である。

2．東野土居遺跡は、高知県香南市野市町東野字宮ノ後1348番地他に所在する。

3．試掘調査は平成18年10月24～26日に実施し、本発掘調査は平成19年1月15日～2月23日にかけて実施した。

4．調査対象面積　約500㎡
　試掘調査面積　約 22㎡
　本発掘調査面積　約400㎡

5．試掘調査・本発掘調査時(平成18年度)の調査体制は以下の通りである。

事務担当	神明 裕一	香南市教育委員会	生涯学習課	文化振興保護係	参事兼課長補佐
調査担当	更谷 大介	〃	〃	〃	埋蔵文化財調査員

6．東野土居遺跡の整理作業及び報告書作成作業は平成20年度まで更谷大介(同上)及び溝渕真紀(同)が担当し、平成23年度に宮地啓介(香南市文化財センター)が平成20年度までの成果を引き継ぎ、報告書作成作業を行った。

7．報告書刊行時(平成24年度)の香南市教育委員会生涯学習課文化振興保護係の体制は以下の通りである。

課　長	岡本 光広	臨時職員	藤方 正治
係　長	小松　誠	〃	宮本 幸子
主監調査員	松村 信博	〃	齋藤 美幸
(主　任	田中 一也)	〃	澤田 佐世
調 査 員	宮地 啓介	〃	松岡 知佐

8．本書の編集・執筆は宮地が行った。遺物の写真撮影は宮地(宮本・澤田)、画像補正は齋藤が行った。

9．本報告書中で使用する方位は真北を基準とし、公共座標は世界測地形第Ⅳ系に拠った。掲載した地形図等は、特に表示のない場合は上方が北である。

10．発掘現場作業に際しては下記の方々の協力を得た。記して謝意を表したい。(敬称略)
　[発掘調査]　佐野宣重　橿尾俊喜　永野宏幸　浜口 巌　高橋芳和　宗圓良一
　[機械器具]　㈲水田建設

11．遺物整理・報告書作成等に際しては下記の方々の協力を得た。記して謝意を表したい。(敬称略)
　藤方正治　宮本幸子　齋藤美幸　澤田佐世　小松経子　水田紀子
　高橋加奈(高知県文化財団埋蔵文化財センター)

12．遺構の略号は、SD(溝状遺構)・SK(土坑状遺構)・SX(性格不明遺構)・P(ピット状遺構)等と表記した。

13．出土遺物は「07－KNH」と注記し、関連図面・写真と共に香南市文化財センター(高知県香南市香我美町山北1553－1)において善良な管理の下に保管している。

14．本報告書作成に際して、池澤俊幸氏、吉成承三氏、筒井三菜氏、菊池直樹氏(高知県文化財団埋蔵文化財センター)、浜田恵子氏(高知市教育委員会)、乗岡 実氏(岡山市教育委員会)、藤方正治氏(香南市文化財センター)ら諸氏に貴重な御教示・御助言を頂いた。記して謝意を表する次第である。

本文目次

第Ⅰ章　調査の経緯

第1節　調査の経緯 …… 1

第2節　調査対象地の概要 …… 2

第3節　試掘調査 …… 3

第Ⅱ章　東野土居遺跡周辺(香南市域)の地理・歴史的環境

第1節　地理的環境 …… 7

第2節　歴史的環境 …… 8

第Ⅲ章　調査の成果

第1節　調査の方法 …… 13

第2節　調査対象地周辺の層序　―黒ボク土壌― …… 14

第3節　南区の調査

1. 基本層序 …… 14

2. 中世の遺構と遺物 …… 16

3. 近世の遺構と遺物 …… 24

4. 包含層出土遺物 …… 29

第4節　北区の調査

1. 基本層序 …… 35

2. 北区の遺構と遺物 …… 36

3. 包含層出土遺物 …… 38

第5節　調査日誌抄 …… 40

第Ⅳ章　総括

第1節　東野土居遺跡出土の中世土器様相 …… 45

第2節　東野土居遺跡における中世村落の景観的様相 …… 47

第3節　東野土居遺跡周辺(香南市域)の中世集落関連遺跡 …… 50

挿図目次

第１図　香南市及び東野土居遺跡位置図 …… 1
第２図　東野土居遺跡包蔵地及び調査対象地位置図(S=1/10,000) …… 2
第３図　試掘坑位置図(S=1/1,000) …… 3
第４図　TR1 西壁セクション図(S=1/40) …… 3
第５図　TR2 出土遺物実測図(S=1/3) …… 4
第６図　TR4 東壁セクション図(S=1/40)　出土遺物実測図(S=1/3) …… 4
第７図　TR4 出土遺物実測図(S=1/4) …… 5
第８図　東野土居遺跡周辺の主な遺跡及び地形分類図(S=1/40,000) …… 9
第９図　調査区位置及び公共座標(S=1/1,000) …… 13
第10図　野市統柱状図(S=1/40) …… 14
第11図　南区 西壁セクション図(S=1/60) …… 15
第12図　南区 遺構配置図(S=1/250)/SK1 平面･エレベーション図(S=1/40) …… 16
第13図　南区 溝状遺構偏傾角 /SD1･2 平面･エレベーション図(S=1/60) …… 17
第14図　SD4･5　平面･エレベーション図(S=1/60)　出土遺物実測図(S=1/3) …… 18
第15図　SD8･9･10 平面･エレベーション図(S=1/60)　出土遺物実測図(S=1/3) …… 19
第16図　SD11･12　平面･エレベーション図(S=1/60)　出土遺物実測図(S=1/3) …… 20
第17図　SD13･15　平面･エレベーション図(S=1/60)　出土遺物実測図(S=1/3) …… 21
第18図　SD16　平面･エレベーション図(S=1/60)　出土遺物実測図(S=1/3･1/4) …… 22
第19図　P3･6　平面･エレベーション図(S=1/40)　出土遺物実測図(S=1/3) …… 23
第20図　SK2　平面･エレベーション図(S=1/40)　出土遺物実測図(S=1/3) …… 24
第21図　SD3　平面･エレベーション図(S=1/60)　出土遺物実測図(S=1/4) …… 25
第22図　SD6　平面･エレベーション図(S=1/60) …… 26
第23図　SD7　平面･エレベーション図(S=1/60)　出土遺物実測図(S=1/3･1/4) …… 27
第24図　SD7･14　平面･エレベーション図(S=1/60)　出土遺物実測図(S=1/3･1/4) …… 28
第25図　南区 包含層出土遺物実測図１(S=1/3) …… 29
第26図　南区 包含層出土遺物実測図２(S=1/3) …… 29
第27図　南区 包含層出土遺物実測図３(S=1/3) …… 30
第28図　南区 包含層出土遺物実測図４(S=1/3) …… 30
第29図　南区 包含層出土遺物実測図５(S=1/3) …… 31
第30図　南区 攪乱１出土遺物実測図１(S=1/3) …… 31
第31図　南区 攪乱１出土遺物実測図２(S=1/3) …… 32

第32図　南区 攪乱1出土遺物実測図3・包含層出土遺物実測図6(S=1/3) …… 33
第33図　南区 包含層出土遺物実測図7・攪乱1出土遺物実測図4(S=1/3) …… 34
第34図　北区(南側)東・北壁セクション図(S=1/60) …… 35
第35図　北区(北側)西壁セクション図(S=1/60) …… 36
第36図　北区 遺構配置図(S=1/250) …… 37
第37図　SD17・18・19 平面・エレベーション図(S=1/60)/北区 包含層出土遺物実測図1(S=1/3)・ 39
第38図　北区 包含層出土遺物実測図2(S=1/3) …… 40
第39図　南区 中世土器編年表(S=1/5) …… 44
第40図　表採遺物実測図(S=1/4) …… 46
第41図　南区 溝状遺構変遷図(S=1/350) …… 47
第42図　東野土居遺跡周辺の小字図(S=1/10,000) …… 49

表目次

第1表　南区 ピット状遺構計測表 …… 23
第2表　北区 ピット状遺構計測表 …… 38
第3表　遺物観察表(土師質土器・瓦質土器・須恵器・他) …… 41
第4表　遺物観察表(近世陶磁器・近世陶器・備前焼・他) …… 43
第5表　遺物観察表(土製品・石製品・他) …… 43

写真図版目次

図版1　三宝山より香宗我部郷を臨む/南区 調査前風景
南区 遺構検出状態(南端)/南区 完掘状態(南端)/南区 完掘状態(北端)
図版2　調査対象地(南区)と立山神社/SD5 遺構完掘状態
北区(南側) 遺構検出状態/北区(南側)完掘状態/北区(北側) 検出状態
図版3　土師質土器・須恵器・土錘
図版4　土師質土器
図版5　土師質土器
図版6　土師質土器
図版7　近世陶器・陶磁器・備前焼
図版8　近世陶磁器・土師質土製品
図版9　石製品

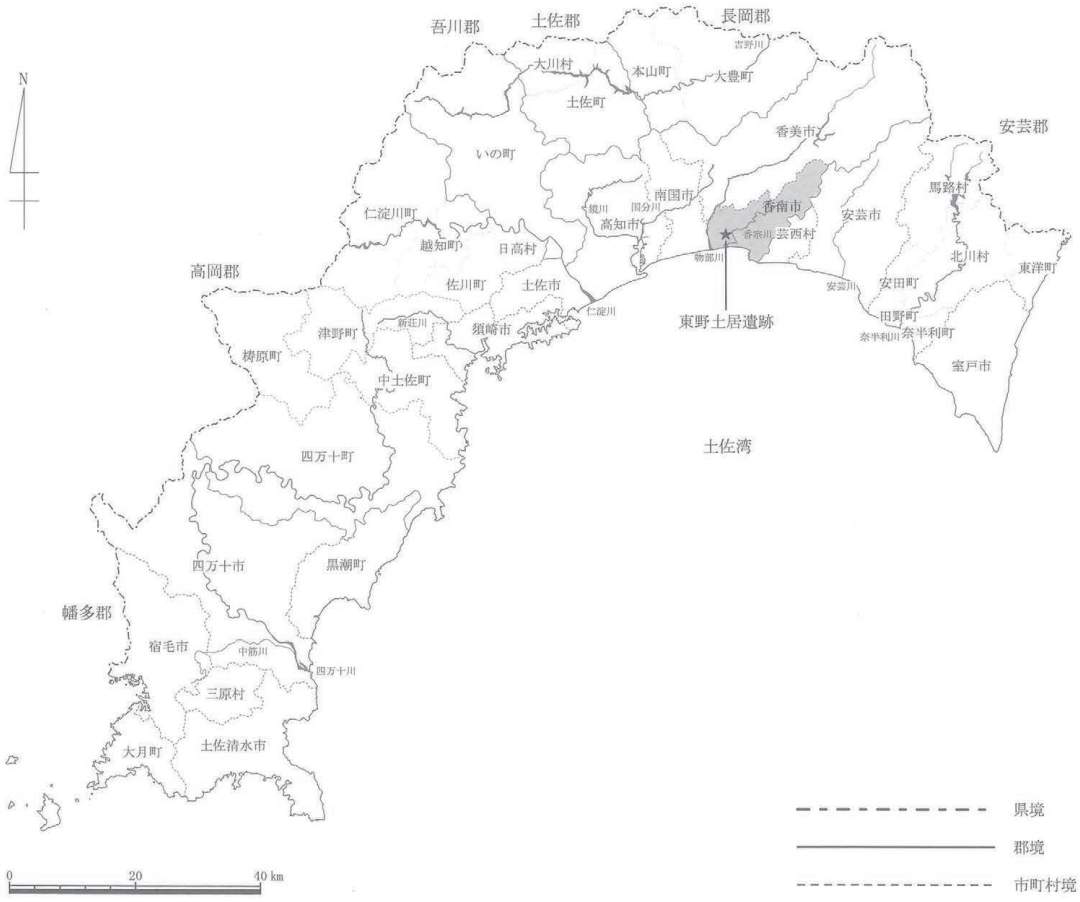
第Ⅰ章　調査の経緯

第１節　調査の経緯

本調査は高知県香南市野市町東野の立山神社南北線農道整備工事事業に伴う、記録保存のための緊急発掘調査である。

本事業は立山神社北用排水路改修工事事業に伴う周辺整備の一環として、農業経営環境の合理化を図り、地域の発展に資するものとする地元の要望に応えた農道整備事業である。事業対象地は、高知県教育委員会により行われた遺跡分布調査で確認された、周知の埋蔵文化財包蔵地である「東野土居遺跡」の範囲内に位置している。これに伴い、事前に事業区内の埋蔵文化財の有無を確認し、埋蔵文化財の保護と事業の円滑な調整を図ることを目的として、香南市教育委員会が主体となって試掘調査を実施した。

試掘調査の結果により、比較的良好な遺物包含層及び遺構が遺存することが判明し、本発掘調査に向けての基礎資料を得ることができた。当事業の施行により対象地の埋蔵文化財が影響を受けることが考えられ、関係機関と協議の結果、その範囲について文化財保護法第99条の規定に基づき、香南市教育委員会が主体となり、高知県教育委員会文化財課及び高知県文化財団埋蔵文化財センターの協力を得て、調査対象面積約500㎡の内約400㎡について、平成19年1月15日から2月23日にかけて遺跡の調査と記録保存を目的とした緊急発掘調査を実施した。

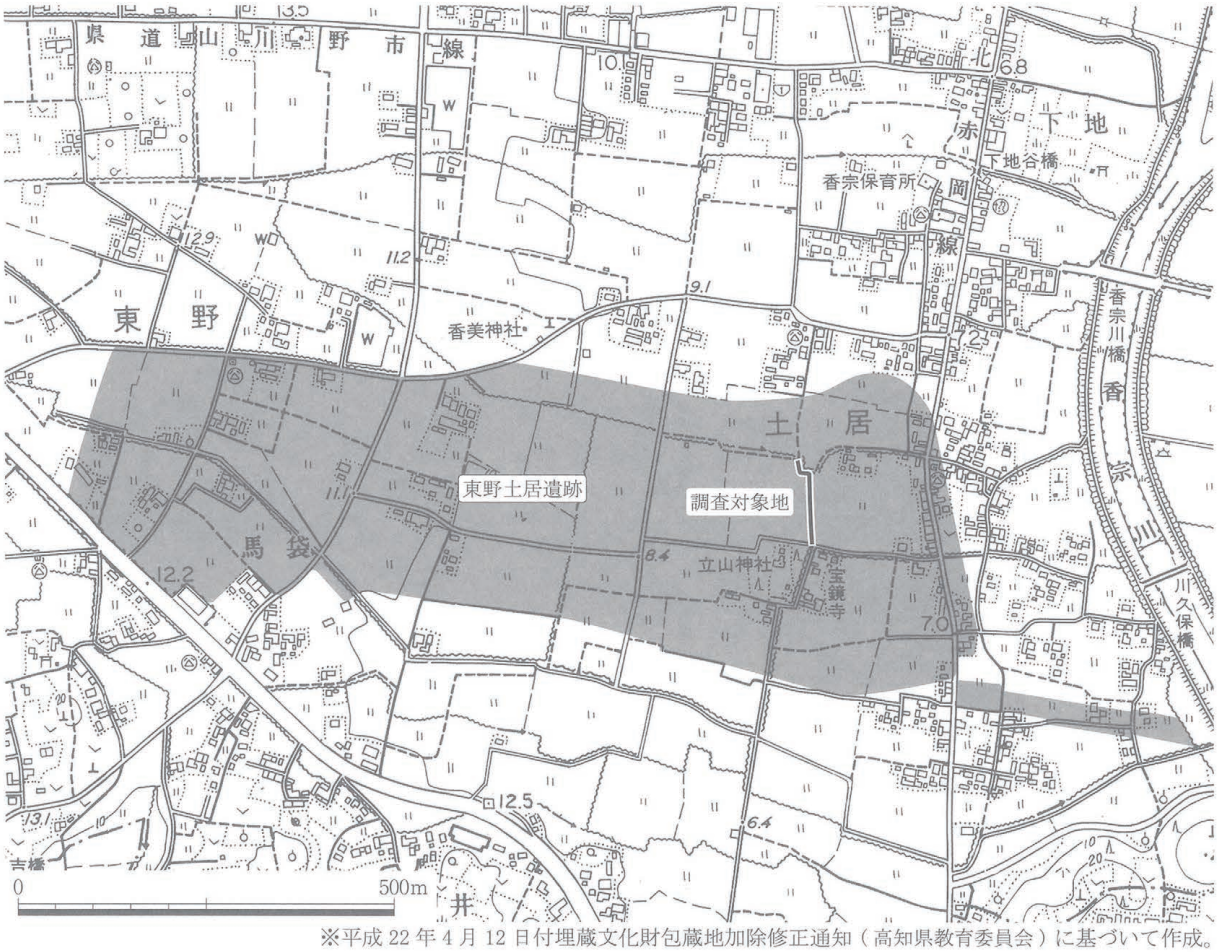


第１図　香南市及び東野土居遺跡位置図

第２節　調査対象地の概要

調査対象地の所在する東野土居遺跡は、香南市野市町東野・土居地区に跨って遺物散布が確認されており、東西約 1.5 ㎞に及ぶ比較的広範囲な包蔵地を有する遺跡である。当遺跡は物部川旧河道による河成堆積扇状地に位置し、調査対象地は扇端付近の標高約８ｍ前後を測る段丘中位面に立地している。一帯は農業が盛行し、対象地周辺の地目は水田及びビニールハウスである。遺跡の東側は香宗(大忍)川の堆積作用による帯状の微高地(自然堤防)が形成されており、県道(旧香宗往還)沿いに集落が発展している。

調査対象地は旧野市村(東野)との境目付近に位置する狭長な畦道(余剰帯)であり、周辺に遺された小字から、当該地は近世以前には土居村(立山ノ村)に属していたことが『長宗我部地検帳』(「香我美郡香宗分御地検帳」)の記載から看取できる。土居村は「御土居」(東キト村)を中核として香宗我部氏が居館(香宗城)を構え、周辺に給人(被官)の屋敷群が展開する豪族屋敷村観を呈している。村西には『日本三大実録』貞観 12(870)年３月５日条の「立山神」に比定される立山神社が鎮座しており、中ノ村(曽我遺跡(1))と共に香美郡宗我(そがべ)郷(『和名抄』)の中心と考えられるなど、古代(律令期)から興隆していた地域とされる(2)。立山神社(創建不詳)は、中世には香宗我部郷(香宗郷)の総鎮守として香宗我部氏が社殿を営繕し、社領２町４反３畝余を有したとされるが、天正年間には兎田八幡宮(野市町兎田)が同郷総鎮守となるなど、周辺状況に変化がみられる。近世土居村は総地高約 840 石余の農村として記録(『元禄地払帳』)が遺されている。



※平成 22 年４月 12 日付埋蔵文化財包蔵地加除修正通知（高知県教育委員会）に基づいて作成。

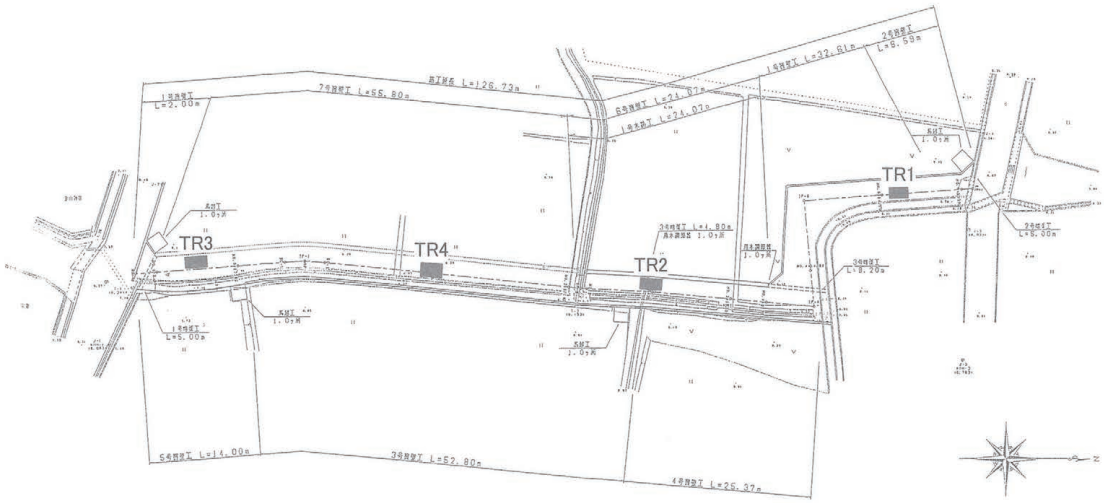
第２図　東野土居遺跡包蔵地及び調査対象地位置図 (S=1/10,000)

第3節　試掘調査

今回試掘確認調査を行った場所は、周知の埋蔵文化財包蔵地である「東野土居遺跡」の散布地に位置している。過去において、付近の水路改修工事の際、多数の土師器・須恵器等の遺物を出土しており、対象地周辺に古代～中世の集落遺跡が遺存している可能性が予察された。

これに伴い、事前に事業区内の埋蔵文化財の遺存状況を確認し、埋蔵文化財の保護と事業の円滑な調整を図ることを目的として、香南市教育委員会が主体となって試掘調査を実施した。

試掘調査は平成18年10月24日から26日に行った。調査対象地内に4箇所のトレンチ(試掘坑(テストピット))を任意に設定し、確認調査を実施した。調査面積は約22㎡である。調査方法は、重機を用いて表土掘削を行い、手作業で土層の堆積状況や遺物・遺構の有無について確認した。土層断面及び遺構の検出状況については、図面作成(S=1/20)・写真撮影等により調査結果を記録した。



※「立山神社南北線農道整備工事 計画平面図」(野市町建設課)に加除修正。

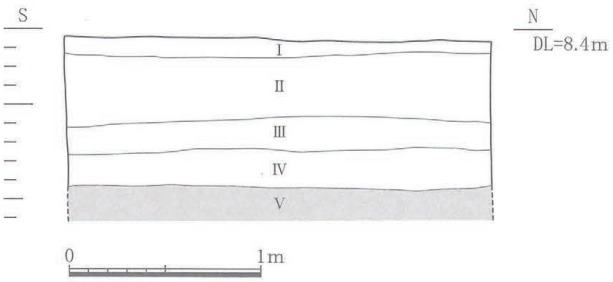
第3図　試掘坑位置図(S=1/1,000)

試掘トレンチの概要

ＴＲ１

調査区(北区)北側に設定した約2.0×4.0ｍの試掘坑である。表土(Ⅰ層)下より約50㎝は造成に伴う客土(Ⅱ・Ⅲ層)と考えられる。下層に旧表土(Ⅳ層)が残存しており、直下より遺物包含層及び遺構面(Ⅴ層)を確認できた。

遺物は土師質土器片6点と須恵器片3点を出土した。



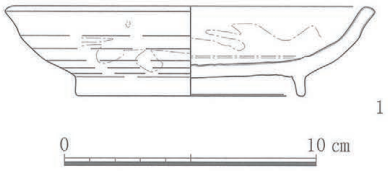
Ⅰ：灰色シルト
Ⅱ：黒灰色シルト　灰色シルト・黒色シルトが混じる。
Ⅲ：褐灰色シルト　明橙色礫(山土)が混じる。
Ⅳ：灰黒色粘土質シルト
Ⅴ：黒色シルト　褐色シルトがブロック状に混じる。

第4図　TR1西壁セクション図(S=1/40)

ＴＲ２

調査区(北区)南側に設定した約1.7×3.0ｍの試掘坑である。溝状及び切り合い関係にある多数のピット状遺構を検出した。

遺物は土師質土器片６点と近世陶器(1)を出土した。



第５図　TR2 出土遺物実測図 (S=1/3)

ＴＲ３

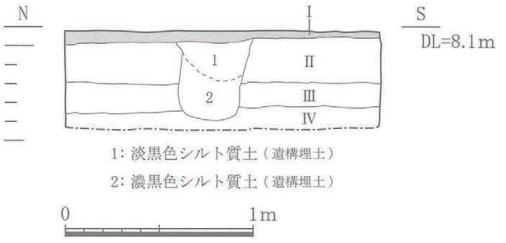
調査区(南区)南側に設定した約1.5×3.0ｍの試掘坑である。切り合い関係にある多数のピット状遺構を検出した。

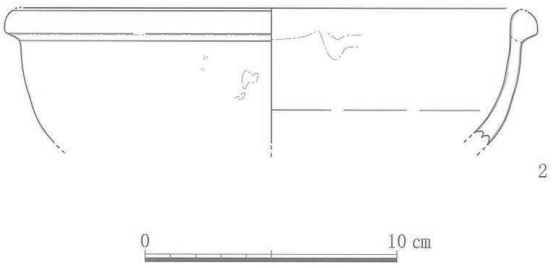
遺物の出土は確認できなかった。

ＴＲ４

調査区(南区)北側に設定した約1.8×2.5ｍの試掘坑である。周辺は表土が削平されており、遺物包含層(Ⅰ層)が露出している。約10㎝下からは遺構検出面が確認でき、溝状及びピット状遺構を検出した。

遺物は土師質土器片７点、須恵器片２点、近世陶器片２点、石製品(石臼)１点を出土した。図示したのは近世陶器(2)と石臼(3)であり、３は溝状遺構から出土している。





Ⅰ：黒色シルト（遺物包含層）

Ⅱ：明橙色シルト

Ⅲ：褐灰色シルト　１～３㎝大の小礫が混じる。

Ⅳ：明黄色シルト（地山）

第６図　TR4 東壁セクション図 (S=1/40) 出土遺物実測図 (S=1/3)

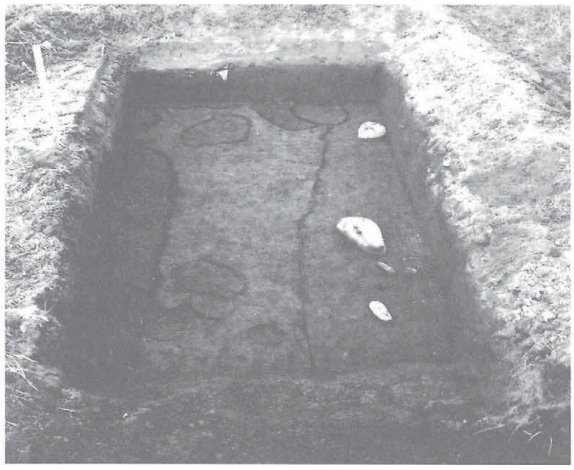
まとめ

今回の試掘調査の結果、表土直下に遺物包含層及び遺構の存在を確認できた。遺構の検出高は、調査区北側のＴＲ１で標高約7.6ｍ、南側のＴＲ３で約7.8ｍを測り、当該期は北側の一部が若干低位であった可能性が考えられる。遺構埋土から黒色シルト／灰黒色シルト／灰色シルトの切り合い関係が看取でき、出土遺物などから古代を含む中世～近世にかけての複合遺跡と考えられる成果を得た。

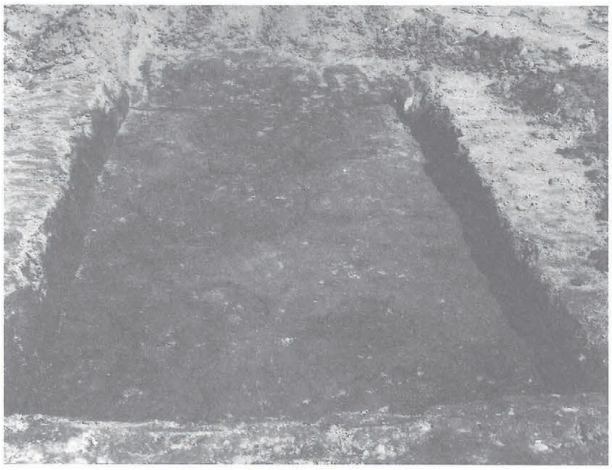
【註】

(1)高橋啓明・吉原達生　『曽我遺跡発掘調査報告書』　野市町教育委員会　1989年

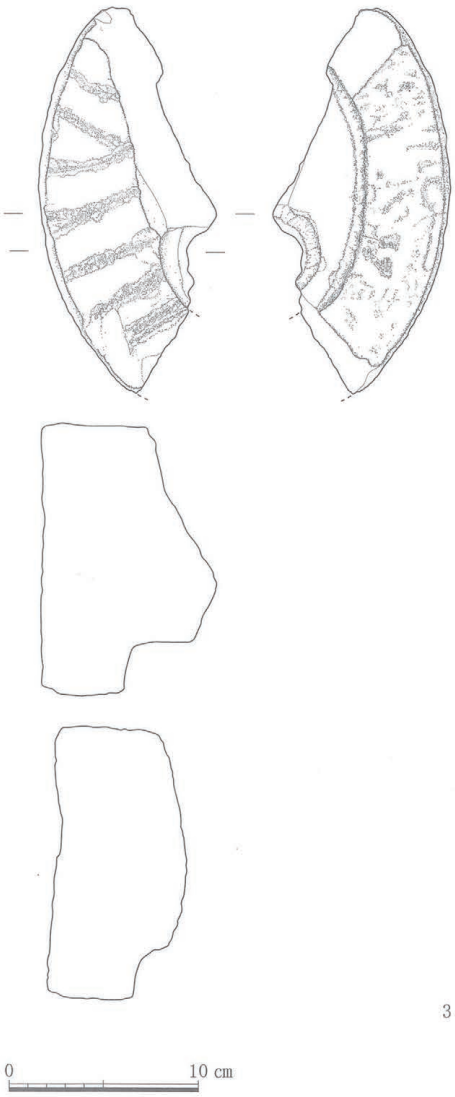
(2)山本　大(監修)　『高知県の地名　日本歴史地名体系40』　平凡社　1983年



TR2 遺構検出状態

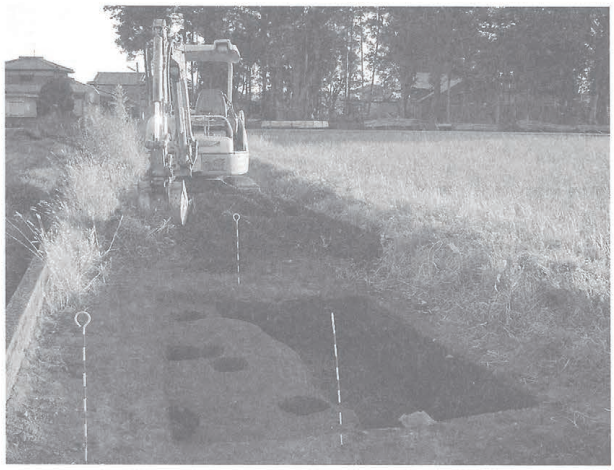


TR3 遺構検出状態



第７図　TR4 出土遺物実測図（S=1/4）

TR4 遺構検出状態



調査風景（TR4）

※宗我神社は東北方約 400mの地字「曽我」に鎮座していたが、大正 3(1914) 年に天正神社と合祀し現在地に遷座。

東野土居遺跡周辺の地理・歴史的景観

第Ⅱ章　東野土居遺跡周辺(香南市域)の地理・歴史的環境

第1節　地理的環境

東野土居遺跡は高知県香南市野市町に所在し、県中央部に拡がる高知平野の東端に位置している。

平成18(2006)年4月に旧香美郡の香南5町村(赤岡町・香我美町・野市町・夜須町・吉川村)が合併し、面積126.5㎢、人口約3万4,500人の香南市が発足した。市域の西端には剣山山系白髪山(香美市物部町)を源流として香南市吉川町吉原で土佐湾に注ぐ物部川(流路延長71㎞)が縦貫し、同香我美町別役峠より迂曲する香宗川(流路延長19.5㎞)と共に流域の基盤を成している。これらの河川により形成された扇状地や沖積平野(河成堆積低地)には沃野が拡がり、最下流域の低湿な海岸平野(汐入湿田)は圃場整備が成され、米作や施設園芸農業などの第一次産業が盛行している。平野部には標高100m未満の小起伏丘陵(残丘)が点在し、山裾及び現・旧河道周辺に断続的に分布する自然堤防沿いに集落が発展している。

当遺跡の所在する香南市野市町は、物部川の左岸に沿って南北約5㎞、東西約4.5㎞の範囲に拡がっており、西は物部川を境として南国市、東は香南市香我美町と接し、北は烏ヶ森山系が連なり香美市土佐山田町と尾根筋を分ける。南は香南市赤岡町、同吉川町が所在し、高知龍馬空港(南国市)に隣接するなど利便性にも優れている。南部には県都高知市と県東部を結ぶ主要国道55号線が東西に横断して県中心部からの交通の便も良く、ベットタウンとして人口も年々増加するなど、近年発展し続けている。

香南市は野市町域を中心に開発・都市化が進行し、高規格道路である南国・安芸道路の建設や、平成14(2002)年には第3セクターによる鉄道「ごめん・なはり線」が開通するなど、社会基盤の整備も進みつつある。一方、市内では山北をはじめとする「棒踊り」や「手結盆踊り」(県指定無形民俗文化財)などの伝統的な祭礼が継承されている地区も多く、民俗文化を次世代に伝える地域社会が残っている。

香南市の南部は太平洋(土佐湾)に面する海岸地帯であり、外洋性の高い波浪や沿岸流が海岸に作用して形成された複数列の浜堤(砂堆)が弓状に延びており、旧汀線を示している。海成複式堆積低地による堤間湿地(堤列低地)の発達により、背後に潟湖性の低地が認められる。この浜堤上に発展した集落である赤岡から岸本にかけての海岸は、嘗て製塩業が盛んであった地域であり、赤岡から物部川上流の大栃(香美市物部町)へ抜ける峠越えの往還路が、現在「塩の道」として整備されている。

香南市の東部には夜須川が南流し、河口付近に位置する手結内港は往時の景観を今に伝える藩政期の掘り込み港である。手結港の東には地質区分による四万十帯の露頭(横浪―手結住吉メランジュ：県指定天然記念物)が観察できる住吉海岸(香南市夜須町～安芸郡芸西村)が所在する。海洋底移動により遠隔地の枕状溶岩や層状チャート・多色凝灰岩などが混在する岩石群が分布し、また同帯の走行に対して上・下盤の剪断方向が異なり、その規模から地殻変動によるものと考えられるなど、プレート理論を実証している。

自然地理学的にみた当遺跡周辺の環境は、北部に物部川により開析分断され低山地化した聞楽山山系の山地と、同川左岸に拡がる中位段丘砂礫層を呈する扇状地性の野市台地(野市面)を中心に形成している。物部川水系の運搬営力の優位性を示して扇端部に香宗川を臨み、自然堤防に家屋の集住がみられる。

聞楽山山系は小起伏山地(起伏量200～300m)に属し、秋葉山山系と烏ヶ森山系(平家ヶ森山系)から構成されている。秋葉山(標高490m)を主峰とする秋葉山山系は野市町の北東に位置する聞楽山(標高368m)より南西方向に標高を減じ、三宝山(金剛山 標高265m)の南西方向で野市台地の下に沈む。その秋葉山山系の北方に平行して烏ヶ森山系があり、同じく南西に向かって逓減して物部川にその山裾を浸蝕され

ている。三宝山の尾根上には仏像構造線が北東―南西の方向性を示して走向しており、当遺跡から見渡せる尾根中腹に連なる急斜面(断層崖：傾斜角30～40°)は、同地質構造線の衝上断層によるものである。

西南日本外帯に属する高知県地域の基盤は、四国脊梁山地をほぼ東西方向に走る御荷鉾構造線及び仏像構造線によって、北から三波川変成帯(御荷鉾緑色岩帯)・秩父累帯及び四万十帯に分類され、大観的には南ほど新しい地層が層状に累重して分布する覆瓦状構造を成している。当該地周辺は地帯構造的には四万十帯北帯に属しており、安芸構造線によって南帯と分けられる。北帯北部は白亜紀前期の地層(付加体構成岩類)から成り、当地域は新荘川層群に属する堂ヶ奈路層及び半山層(葉山層)に該当する。両層とも海底堆積物(混濁流)によるタービダイド層(砂泥互層)を主体に形成され、泥質基質中に様々な大きさ・種類の異地性・準原地性の岩塊を含むメランジュ(混成岩)の分布がみられる。当遺跡の北約2.3㎞にある山峰が三宝山で、中生代の地質構造帯「三宝山帯」の名前の由来となった山であり、尾根上より北部が秩父帯南帯(三宝山帯)である。構造線の北側に沿って石灰岩(トリアス期)が散在しており、北西約5.6㎞には我が国有数の石灰鍾乳洞穴として奇勝に富む龍河洞(香美市土佐山田町)が存在する。

裾野に拡がる野市台地は物部川下流域に発達した開析扇状地(古期扇状地)であり、海抜約40～10ｍと北から南へ緩傾斜し、香長平野(香美・長岡郡南部の河成堆積低地)の東半を形成している。この台地は、秋葉山山系西端の三宝山山麓部で遮られた物部川旧河道が東南東へ流下したためできた扇状地性堆積物(砂礫層)によって形成されたものである。また物部川に面した台地の西端部は５ｍほどの段丘崖となり、下段は沖積扇状地(新期扇状地)と成っている。野市台地は長岡台地(南国市・香美市土佐山田町)を含む段丘中位面と地形的に連続性がみられることから、ほぼ同時期に離水したと推測されている。降灰時期が約7,300年前とされるＫ－Ａｈ火山灰(鬼界アカホヤ)の堆積(濃集層準)が段丘上に認められ、ＡＴ(姶良－Tn)火山灰(約25,000年前)の降灰層準が不明瞭なことから、氷河性海面移動に基づく世界規模の海水準変動(海退)がみられた最終氷期(ヴュルム氷期)極相期(約20,000年前)以前に形成されたと考えられている(1)。

野市台地(扇央部)は粗粒砂岩礫層を呈して透水性が高く、伏流による低地下水位の乏水地であり、原野の拡がる非条里地域と考えられていた。物部川の下刻作用により河床が低下し、台地への灌漑は容易ではなかったが、近世初期以降の大規模な水利事業の展開により、今日にその遺産を見ることができる。

第２節　歴史的環境

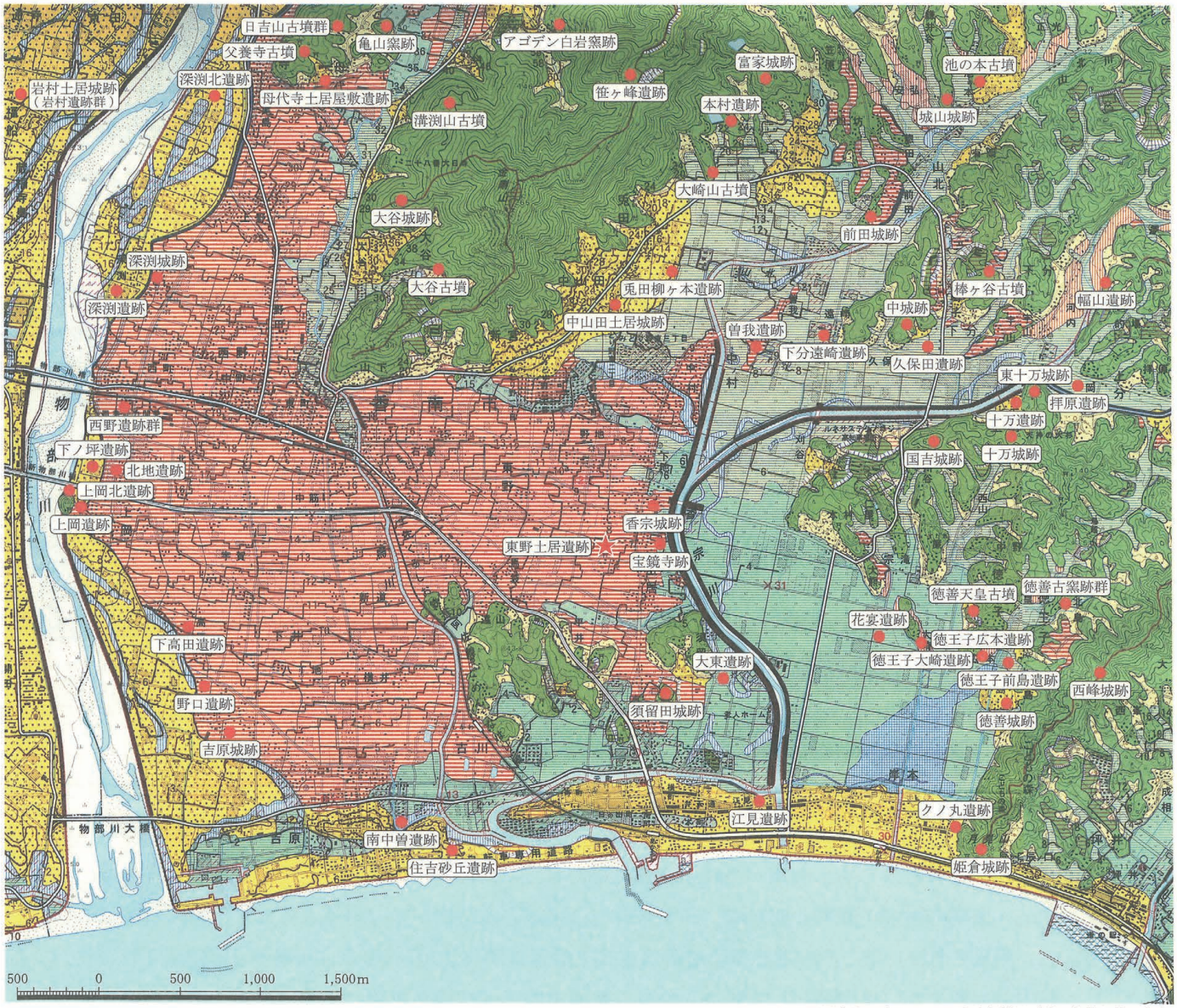
東野土居遺跡の所在する香南市野市町は、北部に聞楽山山系の山塊を背負い南部に平野部が開けている。西は一級水系物部川に隔てられ、東は香宗川以西の扇状地を中心に集落が展開している。

物部川は野市町をはじめ、高知平野東部(香長平野)を潤しているが、現在の流路を形成したのは近世初頭に築堤されて以降のことであり、それ以前に西偏していた複数の旧河道や凹地列の派流が緩勾配の扇状地上に微地形として遺されている。下流域には旧河道地形に沿って断続的に自然堤防が形成され、縄文後期以降の遺物分布がみられる。その中でも当遺跡から約5.6㎞西に位置する田村遺跡群(2)(南国市)は地勢的な優位性もあり、弥生時代における南四国最大級の拠点的(母村)集落として知られている。

香南市域における縄文時代以前の遺跡は、有舌尖頭器(草創期)が採集された手結遺跡、後期(宿毛・片粕・松ノ木式)の土器片を出土した拝原遺跡(3)、晩期の貯蔵穴が確認された十万遺跡(4)、晩期末の突帯文土器が採集された深渕遺跡(5)の例が知られているが、何れも断片的な出土状況であった。平成23(2011)年に香宗川の支流山南川を臨む河成段丘に立地する庭ヶ渕遺跡(6)の発掘調査で、縄文晩期終末の刻目突帯文土器

約300点の他、高知県では居徳遺跡(7)・上ノ村遺跡(8)(土佐市)、ヲキショウジ遺跡(9)(四万十市)に次いで4例目となる孔列文土器(朝鮮半島系)が出土するなど、香長平野では初の事例となる縄文晩期の集落遺跡が発見され、話題となった。これまでは縄文・旧石器の空白地帯といわれるほど縄文時代以前の遺跡の例は僅少であったが、近年の調査により旧石器時代ナイフ形石器文化期から細石器文化期・縄文早期にかけての岩陰遺跡である奥谷南遺跡(10)(南国市)、小型のナイフ形石器が確認された新改西谷遺跡(11)(香美市土佐山田町)、西日本有数の縄文早期の定住跡を検出した刈谷我野遺跡(12)(同香北町)、無文厚手土器・押型文土器(縄文早期)を出土した開キ丸遺跡(13)(同土佐山田町)など、香長平野周辺に縄文後期を遡る遺跡の存在が明らかになりつつあり、香南市域から該期の遺跡が確認される可能性は高いと期待されている。

平成20(2008)年、高規格道路建設に伴う発掘調査で、物部川以東で確認例の無かった弥生前期前半の



※国土地理院 1:25,000 土地条件図 高知・安芸を基に作成。

地形分類

主要分水界　山地斜面等　段丘(中位面・下位面)　段丘(低位面)　山麓堆積地形　扇状地　砂(礫)堆・砂(礫)州

凹地・浅い谷　氾濫平野・谷底平野　海岸平野・三角州　後背低地　旧河道　河川・水涯線及び水面　旧水部

第8図　東野土居遺跡周辺の主な遺跡及び地形分類図(S=1/40,000)

遺構(土坑跡)が、香宗川下流域の海岸平野微高地に立地する徳王子大崎遺跡(14)で発見された。出土した土器は前期前半の西見当Ⅰ式(畿内Ⅰ様式古段階併行)であり、前期の早い段階でも物部川左岸に集落が展開していたことを示す遺跡として注目されている。前述の庭ヶ渕遺跡でも弥生前期前半から中葉の土器片(遠賀川式)の出土がみられ、移行期の遺跡として田村遺跡群の影響(伝播)が考えられている(15)。

弥生前期末になると、上岡遺跡(16)・北地遺跡(17)・下分遠崎遺跡(18)・拝原遺跡・十万遺跡など集落数は急増する。物部川右岸に所在する弥生時代の拠点的集落田村遺跡群からの分村による集落数の増加だと考えられている。下分遠崎遺跡ではカツオの脊椎骨をはじめツキノワグマ・シカ・イノシシ・イヌなど様々な魚骨・獣骨類や、農工具を含む多様な木製品、また遺構出土の炭化米から熱帯ジャポニカのＤＮＡが検出されるなど、自然科学分析により多くの知見が齎された。

下分遠崎遺跡や北地遺跡など幾つかの遺跡では、集落が前期末から弥生中期前半・中葉にかけて継続して営まれるが、前期末のみの短命な遺跡もみられる。香南市域において中期中葉から後半(Ⅲ様式中段階～Ⅳ様式古段階)にかけての遺跡は殆ど確認されていない。

中期末から後期の初めにかけては、当遺跡の北方約 2.8 ㎞の地点に高地(丘陵)性集落的な要素を持つ本村遺跡(19)が所在している。この遺跡からは竪穴住居(建物)跡や段状遺構など当該期の高地性集落の典型的な遺構群と共にガラス製の勾玉も出土している。本村遺跡は標高約 30 m 前後を測る丘陵斜面部に立地しており、土器は凹線文土器が主体である。遺跡の北東に連なる山稜上に所在する笹ヶ峰遺跡や、日本屈指の鍾乳洞である龍河洞内で発見された龍河洞遺跡(香美市土佐山田町)などがほぼ同時期に営まれるなど、周辺一帯の土器の分布状況から、当該期には標高の高い地点を利用していたと考えられており、成立の背景として中部瀬戸内地方の影響を受けた可能性が指摘されている。

物部川と香宗川に挟まれた野市町域は、青銅器についても注目される地域である。当遺跡の北方約 2.1 ㎞の地点には、絵画銅剣で知られる兎田八幡宮があり、西方約 3.1 ㎞の物部川段丘崖上段には、銅鏡(破鏡)の出土した北地遺跡と、銅矛の再加工品が出土した西野ルノ丸南Ａ遺跡(20)(西野遺跡群)が所在している。この段丘崖の下段面からも後期前半の竪穴住居跡(下ノ坪遺跡(21)・上岡遺跡)が確認されており、下ノ坪遺跡では高知平野最大級の竪穴住居跡１棟から、約 80 点にも上るガラス小玉が出土している。段丘崖の上下段に分布するこれらの遺跡は、弥生後期前半に一連の集落を形成していたものと考えられている。

弥生後期後半から古墳時代初頭にかけては、深渕遺跡・西野ルノ丸遺跡・東野土居遺跡(21)・幅山遺跡(22)・野口遺跡・南中曽遺跡など集落数も更に増加する。深渕遺跡・東野土居遺跡・幅山遺跡では竪穴住居跡と土器棺墓が確認され、兎田柳ヶ本遺跡(24)では「方形周溝墓」の可能性を残す遺構を検出しているが、当地域において当該期の墓制や祭祀空間などの様相を把握するには資料の蓄積が不十分で、今後の調査結果に期待したい。これらの集落は物部・香宗両河川流域に展開しており、他地域からの搬入土器(庄内式土器・東阿波型土器)の存在からも、河川が当時の交通に果たしていた役割を推察することができる。

古墳時代前期の古式土師器Ⅱ期以降、高知平野では遺跡の確認例が殆ど無くなるなど、遺跡数急減の可能性が指摘されている。その中で拝原遺跡は古式土師器Ⅲ期(4 世紀)の竪穴住居跡が２棟確認されており、県内でも数少ない検出例として注目される。香南市域では初期須恵器の出土は徳王子広本遺跡を除いて確認されておらず、高知平野を通じても前期古墳は殆ど例がみられない。丘陵先端部に立地していた徳善天皇(花散里)古墳は５世紀代の古墳とされているが、それ以外は６世紀後半以降に築造された後期古墳が大半であり、存在が伝えられるが旧態を存していないものも多い。大谷古墳(25)・大崎山古墳など発掘調査の実施された古墳もあるが、調査が十分成されておらず、詳細な時期特定のできないものが多

い。溝渕山(竹ノ内)古墳や日吉山古墳群・父養寺古墳など野市町佐古地区周辺の丘陵頂部付近に立地するもの、大崎山古墳や池の本古墳・棒ヶ谷古墳など半島状の丘陵に単独で立地するものなどがある。

古墳時代については、4～5世紀前後の様相は殆ど解明されていないのが実情である。6世紀後半から7世紀初めにかけての古墳時代後期の竪穴住居跡が、深渕遺跡・下ノ坪遺跡・西野ルノ丸遺跡・東野土居遺跡などで確認されているが、古墳被葬者の帰属集落との関連性については検討を要すると思われる。

古代(律令期)の遺跡としては、下ノ坪遺跡が白眉である。8世紀前半～9世紀中葉頃に盛行し、古代の出土遺物は硯や丸鞆、全国的にも例の少ない四仙騎獣八稜鏡などが出土している。コの字状に配置された南四国最大級の規模を持つ総柱建物跡を検出しており、物部川に面した立地から奈良時代から平安時代にかけて川津として機能していた遺跡だと考えられている。深渕遺跡も同様に官衙としての役割を果たしていたと考えられており、二彩陶器・緑釉陶器・墨書土器・陶硯・蛇尾などが出土している。対岸に位置する岩村遺跡群(26)(南国市)からも畿内・近江・東海産の緑釉陶器が出土しており、9世紀後半～10世紀中葉頃に盛期を迎えている。中世には城館(岩村土居城跡)の出現がみられ、長期に亙る拠点として存続した要因として、物部川(旧河道)に臨む川津としての水運掌握が背景にあると考えられる。

香宗川流域にも曽我遺跡や十万遺跡など官衙関連と考えられる遺跡が点在している。また条里地割(「香長条里」)の可能性を持つホノギ(中ノ坪・一ノ坪・大坪・四ノ坪など)が随所にみられる。

古代の窯跡として野市町佐古地区周辺に亀山窯跡・アゴデン白岩窯跡、香我美町徳王子に徳善古窯跡群(7世紀後半～8世紀初頭頃)が確認されている。亀山窯跡で生産された瓦は平安京大極殿や、藤原氏の氏寺である法勝寺に使用されていた記録が遺っており、古代における土佐と中央との関係を知る上で重要な遺跡と考えられている。物部川に面して深渕北遺跡(27)が9世紀末～12世紀代にかけて成立していたとみられ、周辺には亀山窯跡関連集落の可能性がある母代寺土居屋敷遺跡(28)が所在している。

古代末から中世初頭にかけて各地で荘園の成立がみられ、香美郡内に立荘された大忍庄(荘)は、土佐湾に面した岸本から山間部の奥物部に跨る広大な荘域を有していた。『和(倭)名類聚抄』(10世紀前半頃成立)にみえる大忍郷が荘園化したものと考えられ、鎌倉時代の後期には鎌倉の律宗寺院極楽寺が、次いで南北朝期には紀州の熊野新宮が荘領主となり、15世紀には室町幕府管領で土佐守護でもあった細川氏の所領となるなど、権門による支配の動向が当該地域に影響を与えてきた。

中世には香美郡南部において香宗我部氏の台頭をみる。香宗我部氏は鎌倉時代初頭に西遷した中原秋通が香美郡宗我部・深渕両郷の地頭職に補任したのに始まるとされている。地名を氏として宗我部氏を名乗ったが、長岡郡の宗我部(秦)氏と区別するため、郡名を冠して香宗我部氏を称したとする。香宗城を居館とし、室町時代(戦国期)には土佐守護細川氏の権力を背景に大忍庄へ進出するが、安芸氏との抗争で衰退する。長宗我部国親の三男親泰を後嗣として迎え局面を打開し、以後長宗我部氏の勢力拡大に貢献する。慶長5(1600)年、主家の改易に伴い地域権力としての香宗我部氏は終焉するが、本流は中山田氏として土佐に家名を遺している。現在香宗城跡は八幡社と土塁の一部を遺存しており、その南東には香宗我部氏菩提寺の宝鏡寺跡(県指定史跡)に観音堂が建っている。周辺の遺跡(東野土居遺跡)からは、中世の土師質土器や瓦質土器の他に貿易陶磁器などの広域流通品の出土がみられる。

また香宗川左岸の標高13m前後を測る丘陵縁辺部の微高地に立地している十万遺跡では、「重濠複郭式屋敷城」(松本豊寿『城下町の歴史的地理的研究』1967年)と考えられる溝跡を検出している。大忍庄内において名主層などの在地勢力が、構造的変質を遂げる時期の遺構として注目されており、周辺の中世城館なども含めて、当該地域が緊張状況下にあった可能性を示唆している。

近世前期になると、物部川山田堰からの分水(引水)により原野の拡がる野市台地の開墾が進み、豊かな穀倉地帯へと景観を変えた。上岡北遺跡(29)からは、物部川治水を手がけた野中兼山による築堤と推測される17世紀頃の石積み遺構が確認されている。野市町は西野(東町)周辺に街村集落が形成され、赤岡の町並と共に民家・商家が発展する。明治以降の近代化に伴う町村制度施行による合併を経て、香南地域の行政・経済・文化の中心地となり、今日に至る。

【註】

(1)研川英征「河岸段丘の形成と、地形学見地からみる物部川および高知平野」『土佐山田史談』2004年
(2)前田光雄・吉成承三 他『田村遺跡群Ⅱ 第1～9分冊』㈶高知県埋蔵文化財センター 2004・2006年
(3)出原恵三 『拝原遺跡』 香我美町教育委員会 1993年
(4)高橋啓明・出原恵三・吉原達生 『十万遺跡発掘調査報告書』 香我美町教育委員会 1988年
(5)高橋啓明・出原恵三・吉原達生 『深渕遺跡発掘調査報告書』 野市町教育委員会 1989年
(6)宮地啓介 『庭ヶ渕遺跡』 香南市教育委員会 2012年
(7)藤方正治・曽我貴行 『居徳遺跡群Ⅰ・Ⅲ・Ⅴ』 ㈶高知県埋蔵文化財センター 2001・2002・2003年
(8)坂本憲昭・宮里　修 『上ノ村遺跡Ⅳ』 ㈶高知県埋蔵文化財センター 2012年
(9)川村慎也 『ヲキショウジ遺跡』 四万十市教育委員会 2011年
(10)松村信博・山本純代 『奥谷南遺跡Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ』 ㈶高知県埋蔵文化財センター 1999・2000・2001年
(11)中山泰弘 『新改西谷遺跡・勝楽寺跡』 土佐山田町教育委員会 2002年
(12)松本安紀彦 『刈谷我野遺跡Ⅰ・Ⅱ』 香北町・香美市教育委員会 2005・2007年
(13)小林麻由・藁科哲夫 『開キ丸遺跡』 土佐山田町教育委員会 2002年
(14)島内洋二「徳王子大崎遺跡」『埋文こうち 第22号』 高知県教育委員会 2009年
(15)出原恵三 『南国土佐から問う弥生時代像 田村遺跡』 新泉社 2009年
(16)更谷大介・溝渕真紀 『上岡遺跡』 野市町教育委員会 2005年
(17)松村信博・宮地啓介 『北地遺跡』 香南市教育委員会 2011年
(18)高橋啓明・出原恵三 他 『下分遠崎遺跡Ⅰ・Ⅱ・Ⅳ』 香我美町・香南市教育委員会 1989・1993・2010年
(19)坂本憲昭 『本村遺跡発掘調査報告書』 野市町教育委員会 1993年
(20)更谷大介「西野遺跡群ルノ丸地区南・ルノ丸地区南A」『埋文こうち 第21号』高知県教育委員会 2008年
(21)出原恵三・池澤俊幸・小松大洋 他 『下ノ坪遺跡Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ』 野市町教育委員会 1997・1998・2000年
(22)筒井三菜・下村　裕 他『高知県埋蔵文化財センター年報 第20号』㈶高知県埋蔵文化財センター 2011年
(23)岡本　修 『幅山遺跡』 香我美町教育委員会 1999年
(24)松村信博・宮地啓介 『兎田柳ヶ本遺跡』 香南市教育委員会 2010年
(25)山本哲也 『大谷古墳』 ㈶高知県文化財団 1991年
(26)三谷民雄 『岩村遺跡群Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ』 南国市教育委員会 1997・1998・1999年
(27)吉成承三・佐竹　寛 『深渕北遺跡』 野市町教育委員会 1996年
(28)松村信博・宮地啓介 『母代寺土居屋敷遺跡』 香南市教育委員会 2010年
(29)更谷大介・溝渕真紀 『上岡北遺跡』 香南市教育委員会 2009年

【参考文献】

『野市町史 上巻』 野市町史編纂委員会 1992年 他

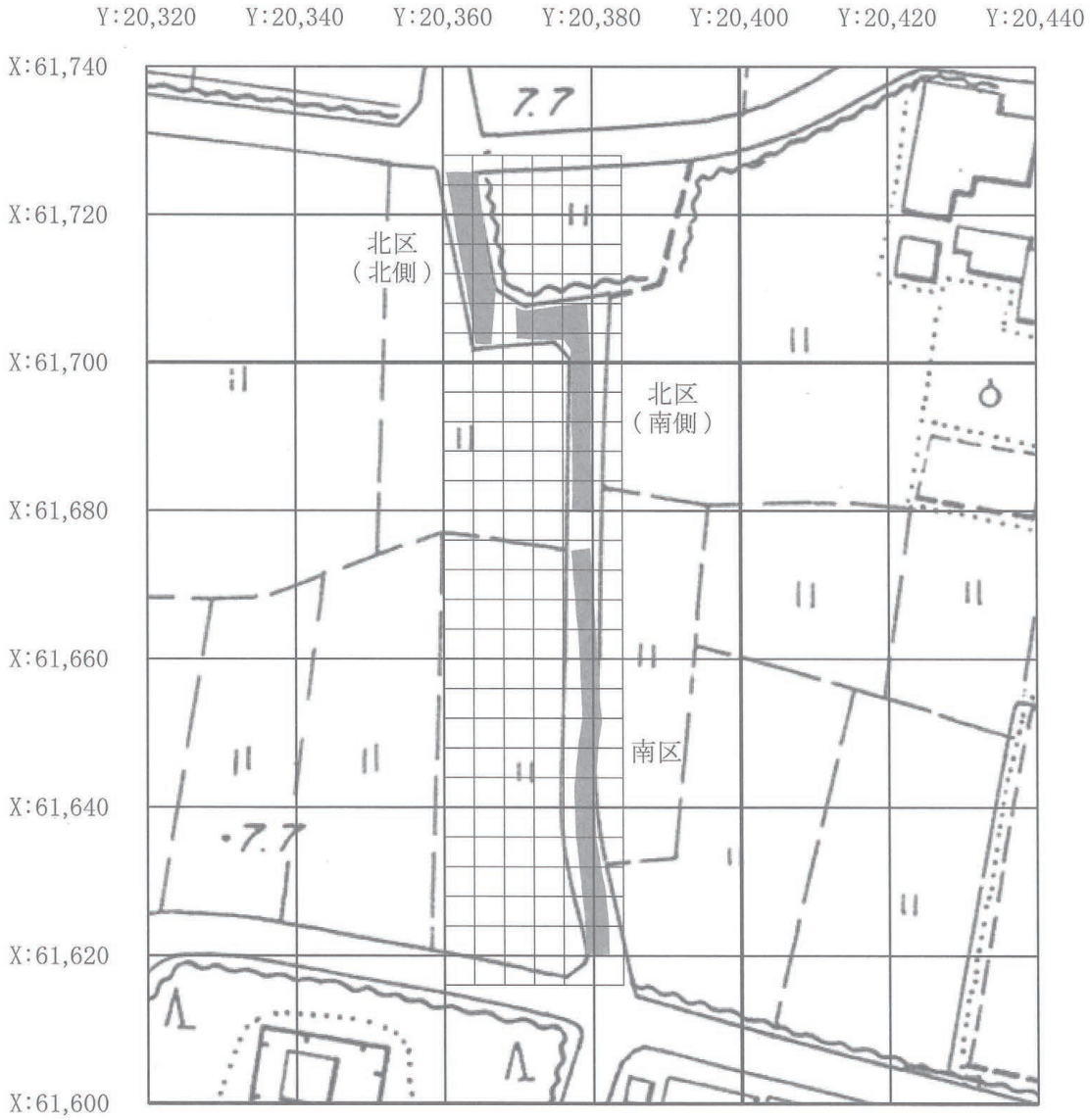
第Ⅲ章　調査の成果

第１節　調査の方法

調査対象地において、既存の境界壁の保全を期して幅を減じて実掘範囲を画定し、工程上用水路工事部分を境に北･南区に区画して調査区を設定した。調査の手順としては、重機を用いて表土を剥除した後、包含層掘削･遺構検出･遺構埋土掘削等を手作業で精査した。

遺構の調査については、調査対象地の形状に則して任意の基準線(測量軸)を設定し、平面実測･レベル(海抜高)測量及び写真撮影(35㎜フィルム)等による記録を行った。層相については目視による土色観察と層理面による分層を試みた。遺構平面図及び土層断面図は、縮尺20分の１を基本として測量を行った。

本報告書では、世界測地系に則した公共座標に基づいて４ｍの方眼を展開し、グリッド番号を付して遺構配置図として使用している。調査時における任意の方向軸は、真北(国土座標第Ⅳ系)を基準としたものに修正して本書図版に掲載している。



第９図　調査区位置及び公共座標（S=1/1,000）

第2節　調査対象地周辺の層序　―黒ボク土壌―

調査対象地は物部川旧河道による河成堆積扇状地(段丘中位面)に所在している。周辺の土壌は、経済企画庁(現国土交通省)発行の『土地分類基本調査「高知」』(1966年)の分類に拠れば野市統(Noi)と呼ばれる土壌で、扇状地上に立地する野市町内の水田地帯を主要な分布域とする土壌である。表層が灰色を呈し、下層が黒ボクの細粒質乃至微粒質の土壌であり、母材は非固結水成岩及び腐植質火山灰層(黒ボク)である。『土佐州郡誌』(宝永年間)土居村の項に「其土黒白」と記されているのはこれであろうか。

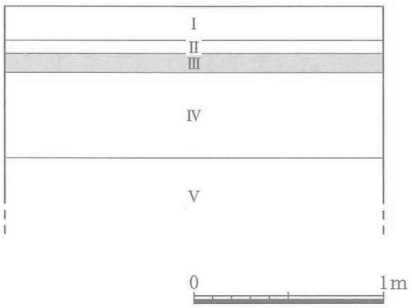
黒ボク土は植物の分解生成物である暗色の腐植を蓄積して有機炭素含量が高く、ポクポクした感触で黒色～黒褐色を呈している。火山灰土を母材とするため火山ガラスを多留しており、足で踏むと音がするとの伝承から四国南部では音地(オンヂ)と呼ばれるなど、比較的容易に層準を確認できる土壌である。火山灰(テフラ)は噴出源の火山に由来する固有の鉱物学的及び化学的特性を有しており、含まれる火山ガラスの屈折率や化学組成の分析により、その供給源を特定することが可能である。黒ボク土層中に拡散するテフラは、火山ガラス比分析や屈折率測定及び層位的な産状などから、約7,300年前の南九州(鹿児島県)鬼界カルデラを噴出源とする広域火山灰(鬼界アカホヤ)によるものと推定されている。西南日本一帯に降下したK-Ah火山灰(鬼界アカホヤ)は、当地域においてもそれまでに堆積していた沖積層に被覆したと考えられ、生成年代を特定できる「鍵層」(広域示準層)として地質学的に有用な地層である。

黒ボク土壌は火山灰を母岩因子の中核とする一方、湿潤で遷移的草本植生下で生成された生物因子土壌であり、腐植層が形成される半自然草原(2次草原)の状態が長期間維持される環境が必要とされている。その要因として火山噴火や山火事などの天然作用の他、人為(火入れ・伐採等)による影響の可能性も指摘されている(1)。何れにせよ嘗ての野市台地は乏水地上に生育する2次林性の疎林(灌木)や野草地が広汎に拡がる原野(荒蕪地)であり、黒ボク土壌の生成に適した環境であったと考えられている。

調査対象地周辺の層序(野市統)は、以下の通りである。

第Ⅰ層	黄灰色	無構造	半湿	漸変	
第Ⅱ層	黄褐灰色	無構造	半湿	漸変	糸状斑含
第Ⅲ層	黒褐色	腐植頗る富む(黒ボク)			中度塊状構造
		細孔含む	半湿	画然	
第Ⅳ層	褐色	細孔富む	半湿	画然	
第Ⅴ層	礫層				

経済企画庁『土地分類基本調査「高知」』(1966) より



第10図　野市統柱状図 (S=1/40)

第3節　南区の調査

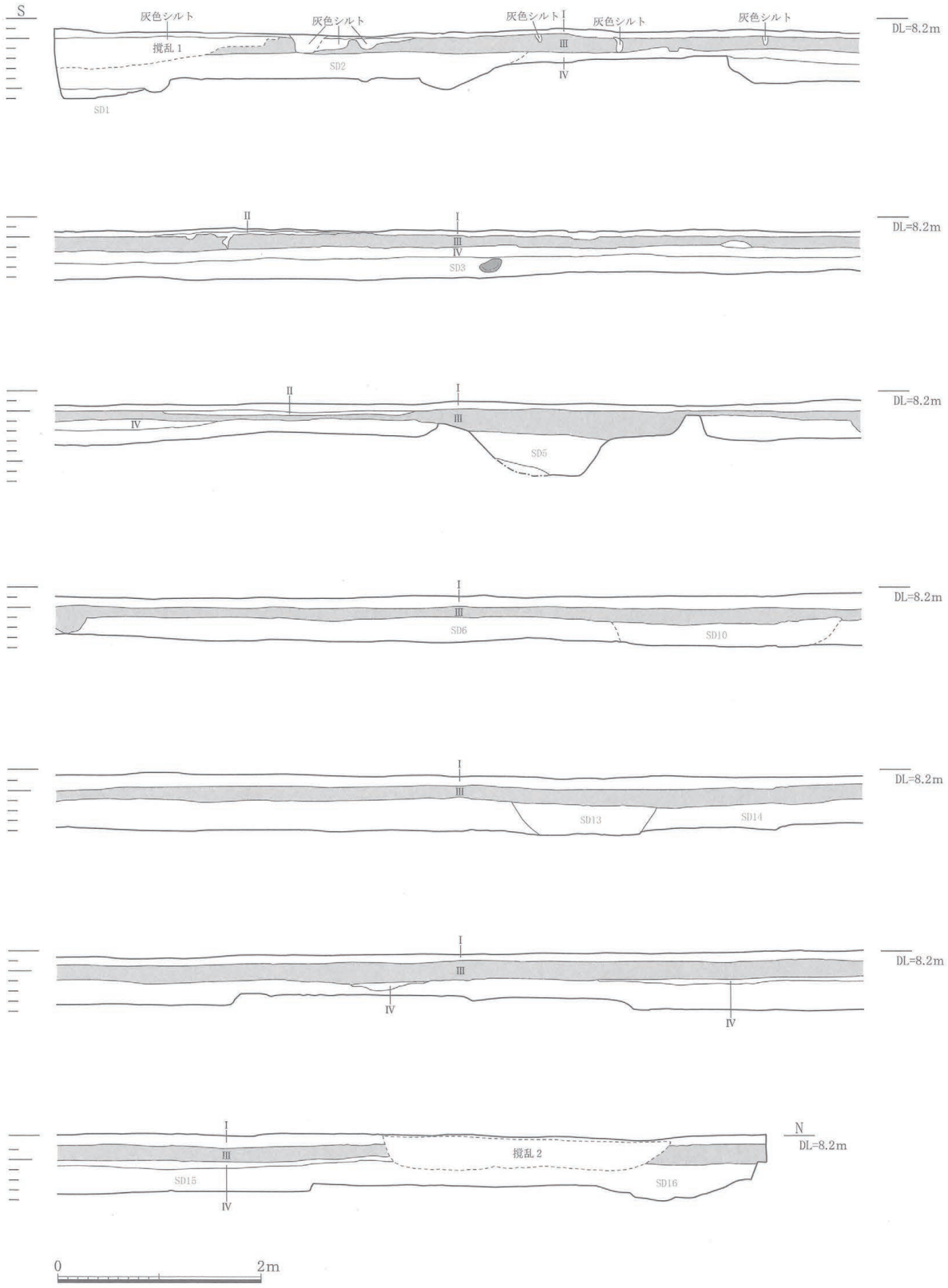
1. 基本層序

調査区西壁(S-N)で堆積状況を観察した。ほぼ水平に堆積しており、シルト層の堆積を確認できた。

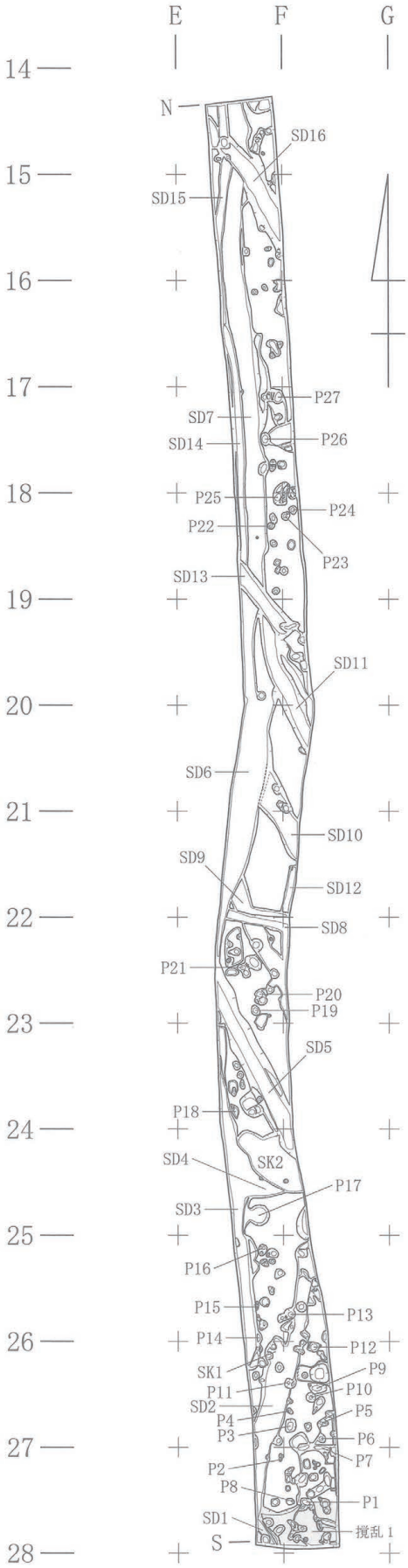
Ⅱ層は削平を受けている可能性があり、残存部の層厚は僅少である。Ⅲ層は黒ボク土と考えられ、層厚は約5～30㎝を測る。本調査区での遺物包含層を成しており、人為的擾乱(再堆積)を受けた可能性が考えられる。Ⅳ層は部分的な堆積であり、整地土的に地山土を用いた可能性を含んでいる。

南区における基本層序は以下の通りである。

Ⅰ：灰色シルト（表土）　Ⅱ：灰橙色シルト　Ⅲ：黒褐色シルト（遺物包含層）　Ⅳ：橙褐色シルト



第11図　南区 西壁セクション図（S=1/60）



2. 中世の遺構と遺物

南区で検出した主な古代～中世の遺構は、土坑状遺構１基、溝状遺構12条である（ピット状遺構を除く）。土坑状遺構に関してはＳＫ１を含めて大部分が形態的に捉え難い形状を呈している。

黒色又は黒灰色シルトを埋土の基調とするものが当該期に比定されると考えられるが、遺構の多くは重複しており、新旧関係については検討を要する。

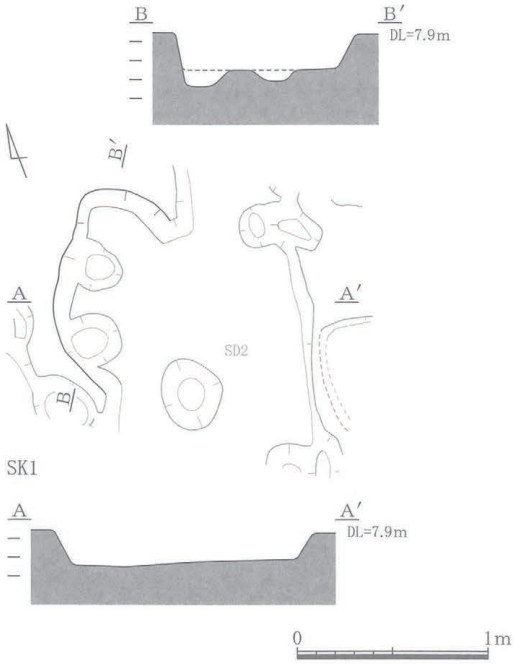
遺物は土師質土器（土師器の可能性を含む）・瓦質土器片等を中心に出土しており、一部は摩耗している。土師質土器の底部には回転糸切り痕が多く認められる。中世土器の帰属時期は、概して11世紀から14世紀代の範疇に求めることができる。

土坑状遺構（ＳＫ）

ＳＫ１（第12図）　中世

調査区Ｅ26グリッドに位置する。検出高は7.84ｍを測る。ＳＤ２及びピット状遺構と切り合い関係にある。平面形態は不整形状を呈する。検出規模は0.95×0.48ｍ、床面高は7.66ｍを測る。断面形態は箱形状を呈し、深さは18㎝を測る。

遺物は底部を含む土師質土器片20点を出土している。



第12図　南区 遺構配置図（S=1/250）/SK1 平面・エレベーション図（S=1/40）

溝状遺構（ＳＤ）

ＳＤ１（第13図）　中世

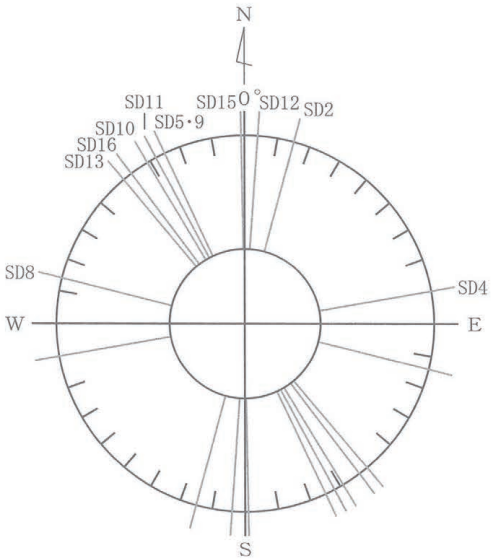
調査区Ｅ27グリッドに位置する。両端は調査区外へ続いており、未検出である。調査区南端の攪乱１下面より検出し、検出高は北端で7.55ｍ、南端で7.62ｍを測る。検出状態での主軸方向（対真北偏傾角）はＮ−31°−Ｗである。ピット状遺構と切り合い関係にある。検出規模は1.37×1.20ｍ、床面高は7.40ｍを測る。断面形態は箱形状を呈し、深さは22㎝を測る。埋土は黒灰色シルトである。

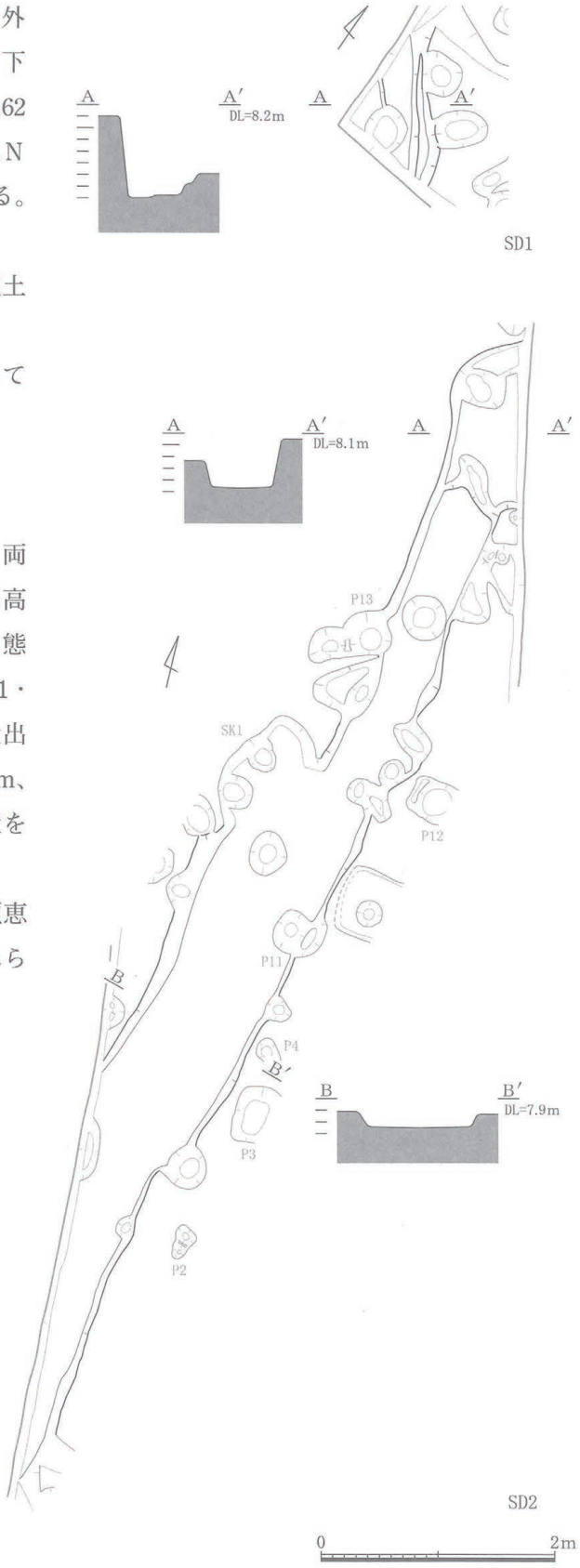
遺物は土師質土器片２点と須恵器片１点を出土している。他に鉄状遺物１点を出土している。

ＳＤ２（第13図）　中世

調査区Ｅ26･27/Ｆ25･26グリッドに位置する。両端は調査区外へ続いており、未検出である。検出高は北端で7.83ｍ、南端で7.79ｍを測る。検出状態での主軸方向はＮ−15°−Ｅである。ＳＫ１及びＰ11・13を含むピット状遺構と切り合い関係にある。検出規模は9.35×0.52〜1.12ｍ、床面高は北端で7.70ｍ、南端で7.56ｍを測る。断面形態は皿状及び箱形状を呈し、深さは13〜24㎝を測る。

遺物は口縁･底部を含む土師質土器片11点と須恵器片２点を出土しており、須恵器片には火襷がみられる。図示したのは土師質土器の坏(4)である。



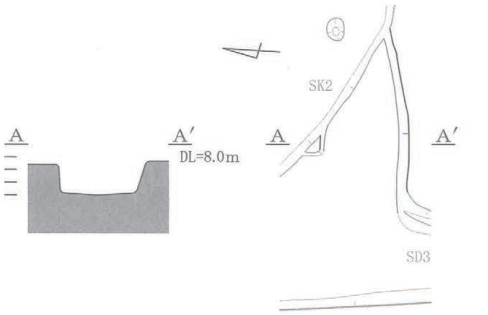


第13図　南区 溝状遺構群偏傾角 /SD1･2 平面･エレベーション図（S=1/60）

ＳＤ４(第14図)　中世

調査区Ｅ24グリッドに位置する。両端はＳＤ３･ＳＫ２に切られており、未検出である。検出高は7.87ｍを測る。検出状態での主軸方向はＮ−80°−Ｅである。検出規模は1.27×0.70ｍ、床面高は7.60〜7.71ｍを測る。断面形態は箱形状を呈し、深さは16〜27㎝を測る。埋土は黒色の強い灰黒色シルトである。

遺物は青磁碗(龍泉窯系)の細片１点を出土している。

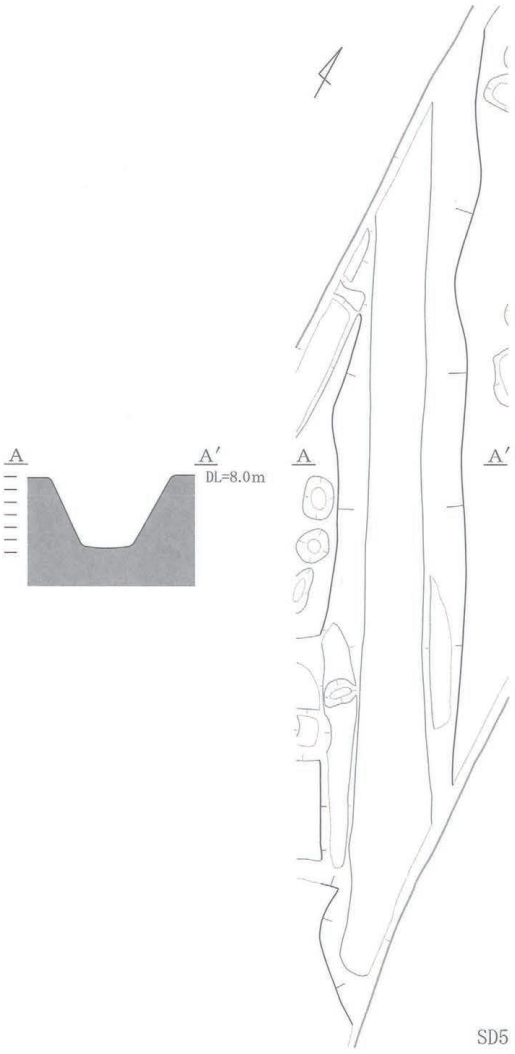


SD4

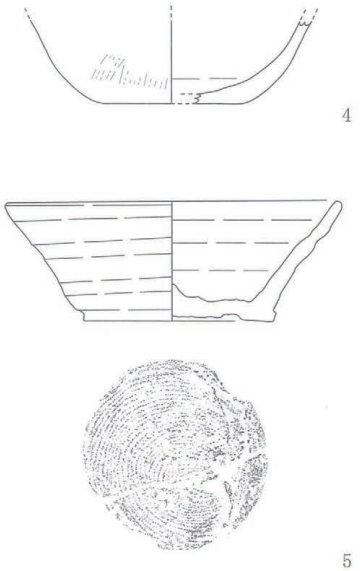
ＳＤ５(第14図)　中世

調査区Ｅ22･23／Ｆ23･24グリッドに位置する。両端は調査区外へ続いており、未検出である。検出高は北端で7.94ｍ、南端で7.85ｍを測る。検出状態での主軸方向はＮ−28°−Ｗである。ピット状遺構と切り合うが、新旧関係は不明である。検出規模は5.99×1.03ｍ、床面高は7.41ｍを測る。断面形態は逆台形状を呈し、深さは44〜58㎝を測る。埋土は黒灰色シルトである。

遺物は口縁･底部を含む土師質土器片72点、須恵器片２点、瓦質土器片１点を出土している。図示したのは土師質土器の坏(5)である。



SD5



0　10㎝

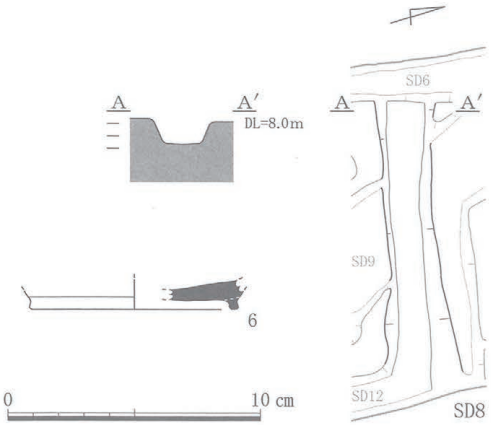
0　2ｍ

第14図　SD4･5 平面･エレベーション図(S=1/60) 出土遺物実測図(S=1/3)

ＳＤ８(第15図)　古代～中世

調査区Ｅ21･22／Ｆ22グリッドに位置する。東端は調査区外へ続いており、未検出である。検出高は7.94ｍを測る。検出状態での主軸方向はＮ－76°－Ｗである。ＳＤ6･8･12と切り合い関係にある。検出規模は2.16×0.38～0.54ｍ、床面高は7.74ｍを測る。断面形態は箱形状を呈し、深さは20㎝を測る。

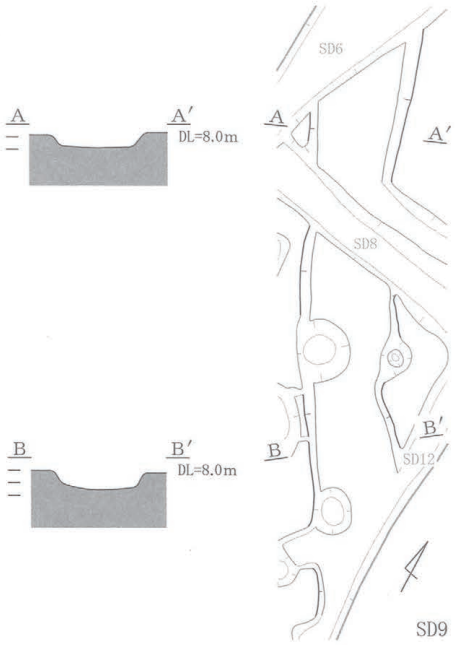
遺物は須恵器片３点を出土している。図示したのは須恵器の坏の底部(6)である。



ＳＤ９(第15図)　中世

調査区Ｅ21･22グリッドに位置する。南端は調査区外へ続いており、未検出である。検出高は北端で7.93ｍ、南端で7.91ｍを測る。検出状態での主軸方向はＮ－28°－Ｗである。ＳＤ6･8･12と切り合い関係にある。検出規模は4.03×0.73ｍ、床面高は北端で7.82ｍ、南端で7.75ｍを測る。断面形態は皿状を呈し、深さは11～16㎝を測る。埋土は濃い黒色シルトである。

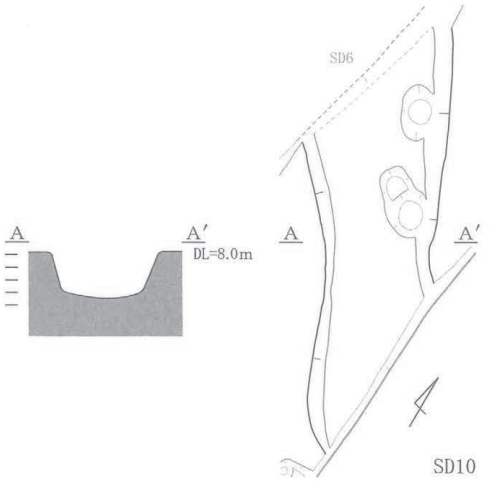
遺物は土師質土器片２点を出土している。

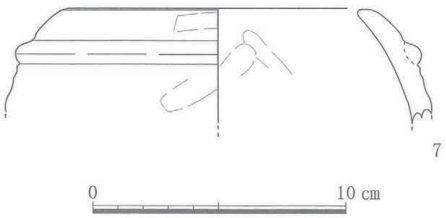


ＳＤ10(第15図)　中世

調査区Ｅ20･21／Ｆ20･21グリッドに位置する。南端は調査区外へ続いており、未検出である。検出高は北端で7.92ｍ、南端で7.94ｍを測る。検出状態での主軸方向はＮ－31°－Ｗである。ＳＤ６及びピット状遺構と切り合い関係にある。検出規模は2.48×1.10ｍ、床面高は北端で7.65ｍ、南端で7.63ｍを測る。断面形態は箱形状を呈し、深さは30～37㎝を測る。埋土は黒色の強い黒灰色シルトである。

遺物は土師質土器片８点、須恵器片１点、瓦質土器(羽釜)片１点を出土しており、土師質土器片は摩耗している。図示したのは瓦質土器の羽釜(7)である。



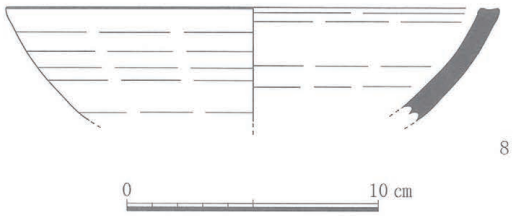


第15図　SD8･9･10 平面･エレベーション図 (S=1/60) 出土遺物実測図 (S=1/3)

ＳＤ 11(第 16 図)　中世

調査区Ｅ19／Ｆ19･20 グリッドに位置する。南端は調査区外へ続いており、未検出である。検出高は 7.96ｍを測る。南端からＮ−25°−Ｗで検出し、ＳＤ６と切り合い関係となりながらＮ−10°−Ｗに方向を変えてＳＤ 13 と切り合い検出を終える。検出規模は 5.76×0.68ｍ、床面高は 7.56ｍを測る。断面形態は逆台形状を呈し、深さは 40～46 ㎝を測る。埋土は黒色の強い黒灰色シルトである。

遺物は土師質土器片 38 点、須恵器片１点、瓦質土器片１点を出土しており、土師質土器片は摩耗している。図示したのは須恵器の鉢(8)である。

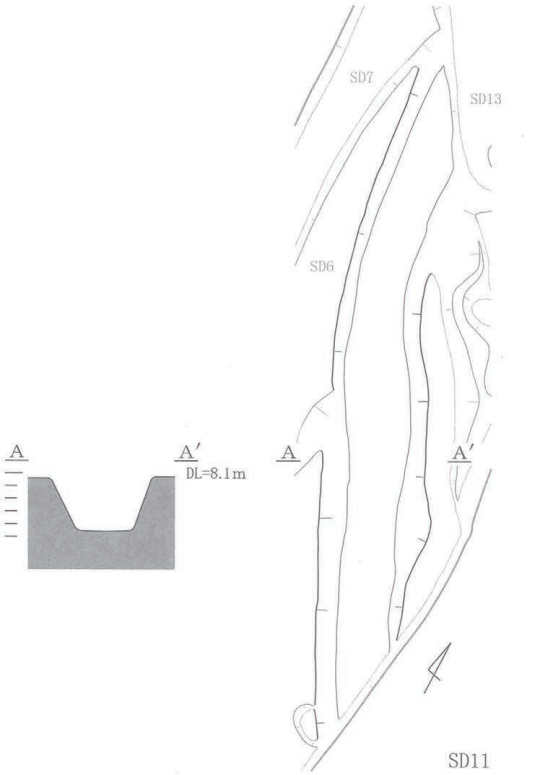


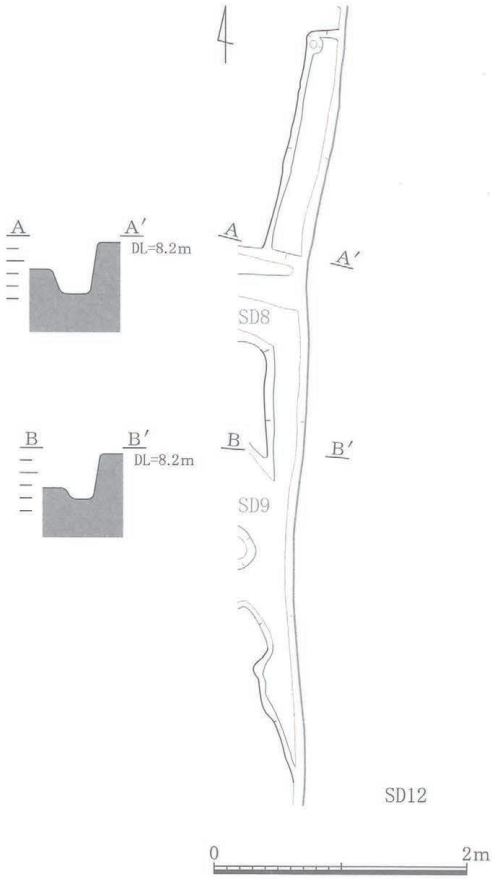
SD11 遺構完掘状態

ＳＤ 12(第 16 図)　中世

調査区Ｅ22／Ｆ21･22 グリッドに位置する。東側は調査区外のため、未検出である。検出高は 7.95ｍを測る。検出状態での主軸方向はＮ−4°−Ｅである。ＳＤ8･9 と切り合い関係にある。検出規模は 5.95×0.35ｍ、床面高は北端で 7.89ｍ、南端で 7.86ｍを測る。断面形態は箱形状を呈し、深さは９～20 ㎝を測る。

遺物は土師質土器片４点を出土している。



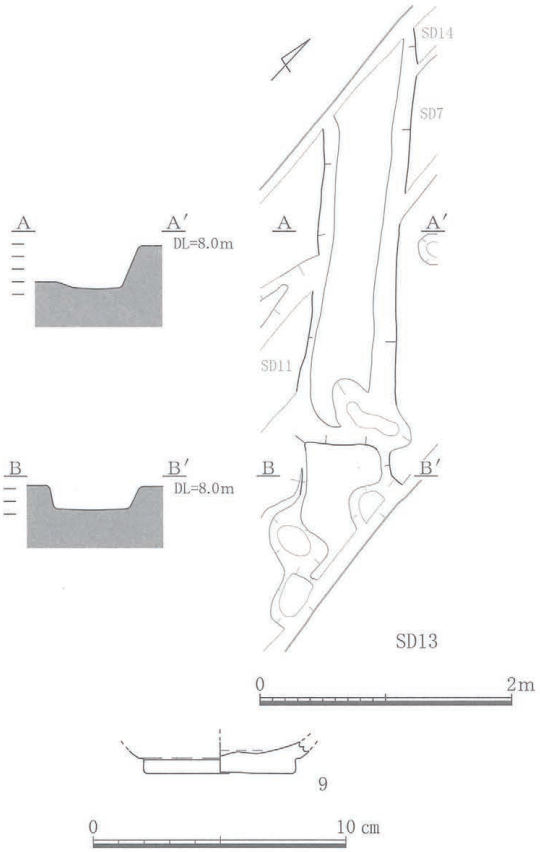


第 16 図　SD11･12 平面･エレベーション図 (S=1/60) 出土遺物実測図 (S=1/3)

ＳＤ 13(第 17 図)　中世

調査区Ｅ 18･19 / Ｆ 19 グリッドに位置する。両端は調査区外へ続いており、未検出である。検出高は 7.97 m を測る。検出状態での主軸方向はＮ−40°−Ｗである。ＳＤ 6･7･11･14 と切り合い関係にある。検出規模は 3.99×0.69 m、床面高は北端で 7.57 m、南端で 7.72 m を測る。断面形態は逆台形状を呈し、深さは 25 〜 34 ㎝を測る。埋土は黒色の強い黒灰色シルトである。

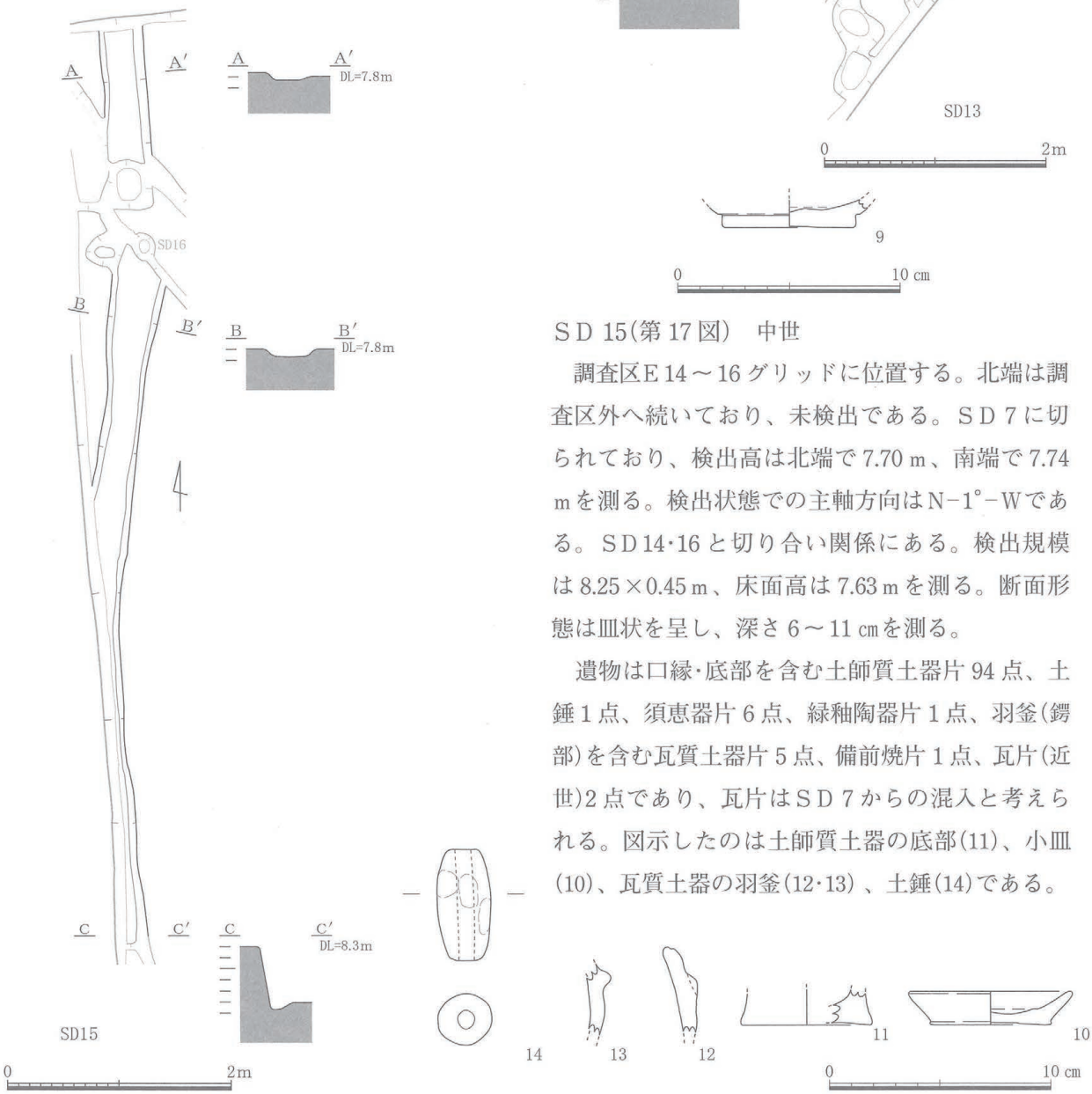
遺物は底部を含む土師質土器片 8 点を出土している。図示したのは土師質土器の底部(9)である。



ＳＤ 15(第 17 図)　中世

調査区Ｅ 14 〜 16 グリッドに位置する。北端は調査区外へ続いており、未検出である。ＳＤ 7 に切られており、検出高は北端で 7.70 m、南端で 7.74 m を測る。検出状態での主軸方向はＮ−1°−Ｗである。ＳＤ 14･16 と切り合い関係にある。検出規模は 8.25×0.45 m、床面高は 7.63 m を測る。断面形態は皿状を呈し、深さ 6 〜 11 ㎝を測る。

遺物は口縁･底部を含む土師質土器片 94 点、土錘 1 点、須恵器片 6 点、緑釉陶器片 1 点、羽釜(鍔部)を含む瓦質土器片 5 点、備前焼片 1 点、瓦片(近世)2 点であり、瓦片はＳＤ 7 からの混入と考えられる。図示したのは土師質土器の底部(11)、小皿(10)、瓦質土器の羽釜(12･13)、土錘(14)である。

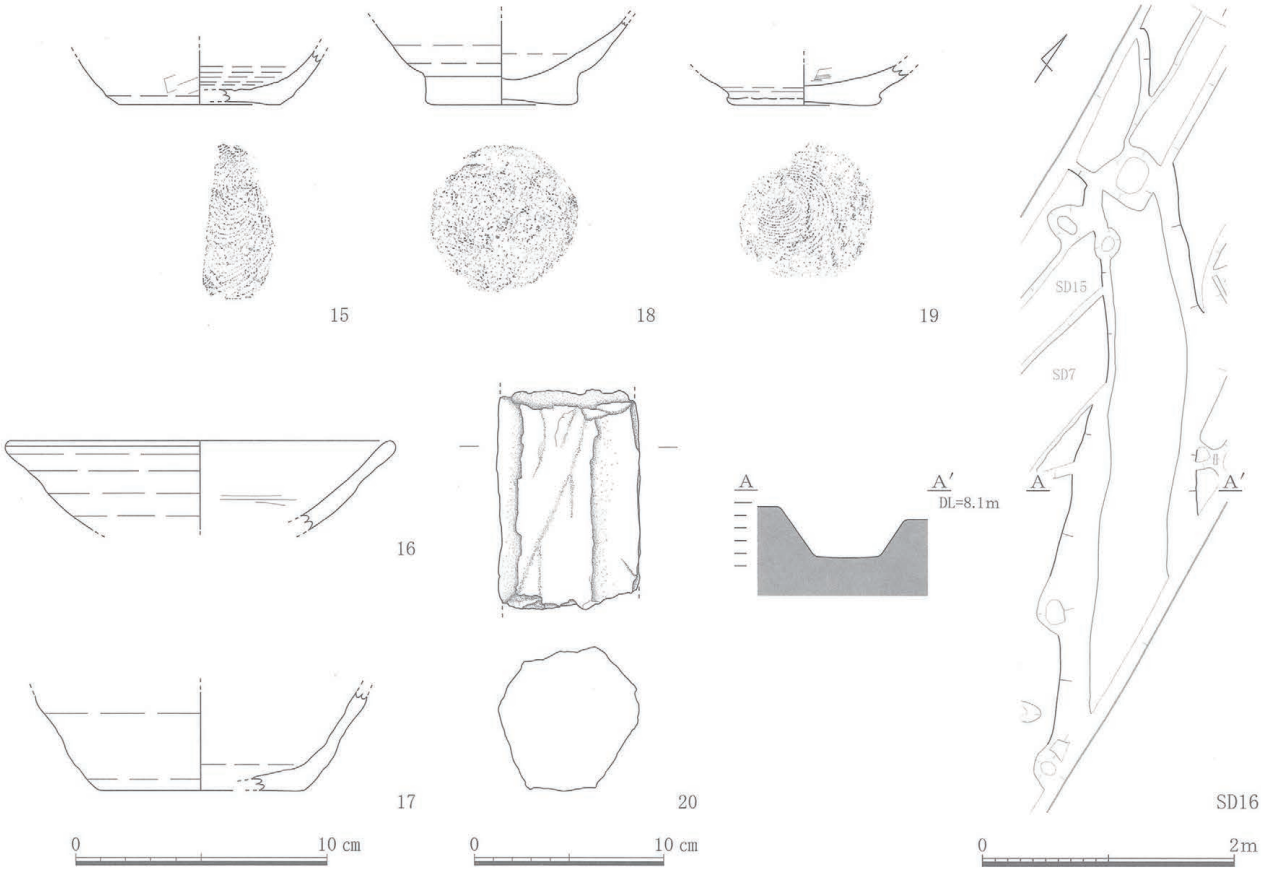


第 17 図　SD13･15 平面･エレベーション図 (S=1/60)　出土遺物実測図 (S=1/3)

ＳＤ 16(第 18 図)　中世

調査区Ｅ 14･15 グリッドに位置する。両端は調査区外へ続いており、未検出である。検出高は 7.97 m を測る。検出状態での主軸方向はＮ−37°−Ｗである。ＳＤ 7･15 及びピット状遺構と切り合い関係にある。検出規模は 4.92×0.99 m、床面高は北端で 7.59 m、南端で 7.56 m を測る。断面形態は逆台形状を呈し、深さは 40 ㎝を測る。

遺物は口縁･底部を含む土師質土器片 58 点、須恵器片 3 点、白磁片 1 点を出土している。図示したのは土師質土器の坏(15･16･17)、椀(18･19)、石製加工品(20)である。



第 18 図　SD16 平面･エレベーション図 (S=1/60) 出土遺物実測図 (S=1/3･1/4)

ピット状遺構(P)

南区においてピット状遺構は時期不明を含めて約 180 個を検出したが、規則性(掘建柱建物跡等)は認められなかった。遺物の出土が確認できたものは 25 個であり、何れも須恵器･土師質土器片を僅かに含む程度である。遺構の多くは切り合い関係が顕著であり、中世から近世の遺構が混在している状態である。

ピット状遺構に関しては、基本的に遺物の出土を確認した遺構について番号を付して記録しており、時期差に関係なく本項目において一括して掲載している。

Ｐ 3(第 19 図)

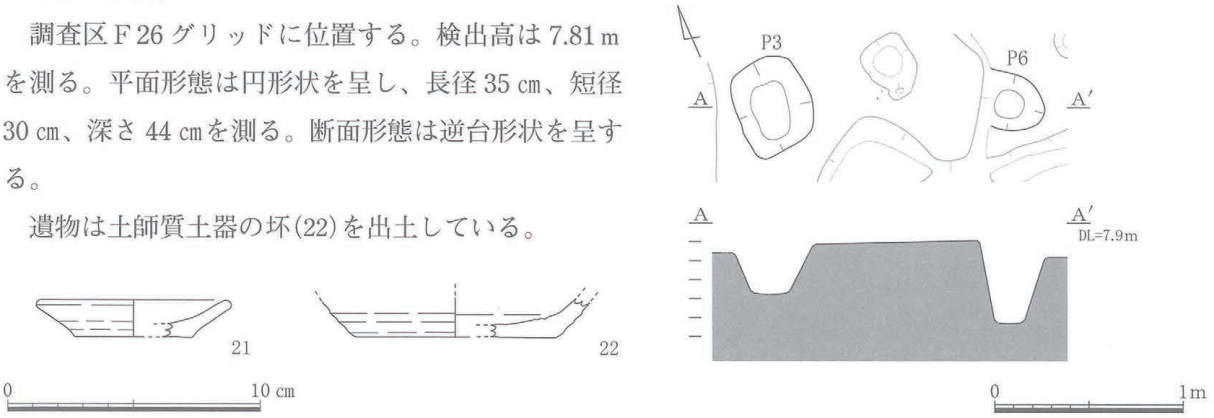
調査区Ｆ 26 グリッドに位置する。検出高は 7.74 m を測る。平面形態は隅丸方形状を呈し、長径 48 ㎝、短径 40 ㎝、深さ 22 ㎝を測る。断面形態は逆台形状を呈する。

遺物は土師質土器片２点を出土している。図示したのは土師質土器の小皿(21)である。

Ｐ６(第19図)

調査区Ｆ26グリッドに位置する。検出高は7.81ｍを測る。平面形態は円形状を呈し、長径35㎝、短径30㎝、深さ44㎝を測る。断面形態は逆台形状を呈する。

遺物は土師質土器の坏(22)を出土している。



第19図　P3･6 平面･エレベーション図 (S=1/40) 出土遺物実測図 (S=1/3)

遺構番号	形態	規模			検出高(m)	切合関係	遺構位置(グリッド)	出土遺物	備考
		長径(m)	短径(m)	深さ(m)					
P1	楕円形状	(0.40)	(0.30)	0.14	7.72	ピット状遺構	F27	土師質土器片　1点 (底部回転糸切り痕)	
P2	円形状	(0.15)	(0.15)	0.10	7.78	ピット状遺構	E27	土師質土器片　1点	
P3	隅丸方形状	0.48	0.40	0.22	7.74	—	F26	土師質土器片　2点 (底部回転糸切り痕)	
P4	楕円形状	0.27	0.18	0.11	7.75	—	F26	土師質土器片　1点	
P5	楕円形状	(0.28)	0.23	0.11	7.80	ピット状遺構	F26	土師質土器片　1点 (底部回転糸切り痕)	
P6	円形状	0.35	0.30	0.44	7.81	—	F26	土師質土器片　1点 (底部回転糸切り痕)	
P7	楕円形状	(0.70)	0.22	0.36	7.79	ピット状遺構	F26･27	土師質土器片　1点	
P8	楕円形状	0.32	0.26	0.27	7.81	—	F27	—	
P9	楕円形状	0.64	0.41	0.40	7.82	ピット状遺構	F26	土師質土器片　2点 (底部回転糸切り痕)	
P10	円形状	0.38	0.35	0.33	7.82	—	F26	土師質土器片　1点	
P11	円形状	0.35	(0.30)	0.29	(7.59)	SD2 ピット状遺構	F26	土師質土器片　3点 近世瓦　1点	近世
P12	円形状	0.36	(0.36)	0.38	7.84	ピット状遺構	F26	土師質土器片　1点	摩耗
P13	円形状	0.43	0.37	0.26	7.82	SD2 ピット状遺構	F25	須恵器片　1点	内面平滑
P14	(円形状)	0.49	(0.25)	0.19	7.85	SD3	E25	土師質土器片　7点	摩耗
P15	楕円形状	(0.25)	0.11	0.05	7.84	—	E25	—	
P16	円形状	(0.30)	0.30	0.23	7.87	ピット状遺構	E25	土師質土器片　2点	摩耗
P17	円形状	0.79	0.76	0.11	7.87	溝状遺構	E24	土師質土器片　1点	摩耗
P18	不整楕円形状	0.61	0.25	0.16	7.90	—	E23	土師質土器片　1点	摩耗
P19	楕円形状	0.39	0.31	0.30	7.90	—	E22	土師質土器片　1点	
P20	円形状	(0.40)	(0.35)	0.36	7.90	ピット状遺構	E22	土師質土器片　1点	
P21	楕円形状	(0.40)	(0.30)	0.34	7.93	ピット状遺構	E22	土師質土器片　1点	
P22	円形状	0.26	(0.25)	0.24	7.99	ピット状遺構	E18	土師質土器片　1点	
P23	円形状	0.30	(0.30)	0.34	7.99	ピット状遺構	F18	土師質土器片　2点	
P24	円形状	0.33	0.31	0.28	7.97	ピット状遺構	F18	土師質土器片　1点	
P25	楕円形状	(0.55)	(0.35)	0.58	7.99	ピット状遺構	F18	土師質土器片　20点	
P26	楕円形状	0.47	0.35	0.27	7.96	土坑状遺構	E17	土師質土器片　1点	摩耗
P27	楕円形状	0.53	(0.40)	0.38	8.02	土坑状遺構	E17	土師質土器片　2点 須恵器片　1点	

第１表　南区ピット状遺構計測表

3.近世の遺構と遺物

南区で検出した主な近世の遺構は、土坑状遺構1基、溝状遺構4条である(ピット状遺構を除く)。

検出状態及び出土遺物等から、灰色又は灰黒色シルトを埋土の基調とするものが当該期に比定されると考えられるが、先行する時期の遺構群との切り合い関係等を含めて、尚検討を要すると思われる。

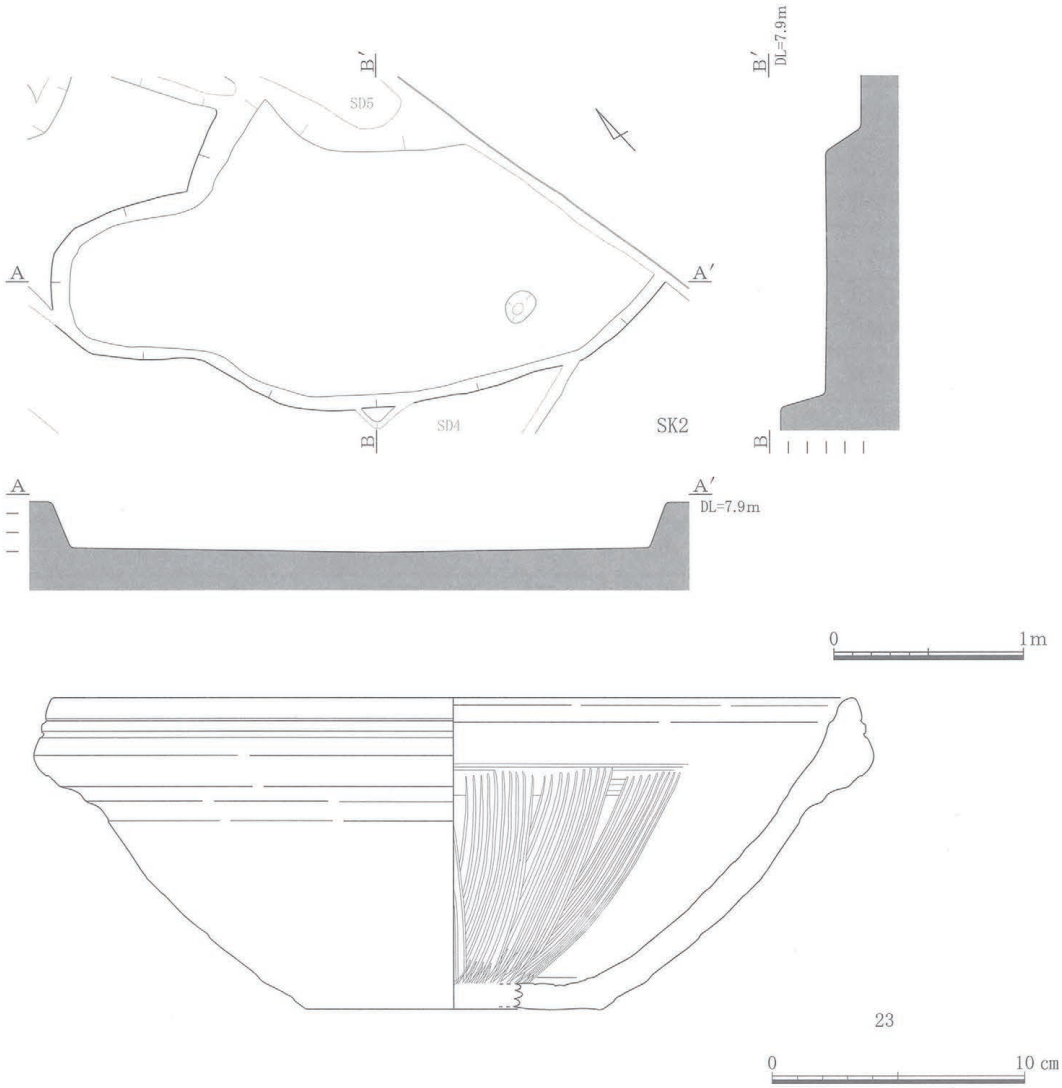
遺物は土師質土器片等の中世遺物を比較的多く含むが、近世陶磁器・瓦片(近世)等を出土しており、時期差が確認できる。近世遺物の帰属時期は概して17世紀前葉～18世紀代に求めることができる。

土坑状遺構(ＳＫ)

ＳＫ2(第20図)　近世

調査区Ｅ24/Ｆ24グリッドに位置する。検出高は7.86ｍである。ＳＤ4･5を切っている。平面形態は不整形状を呈する。検出規模は3.24×1.65ｍ、床面高は7.61ｍを測る。断面形態は箱形状を呈し、深さは25㎝を測る。埋土は灰黒色シルトである。全体の形状から切り合いの可能性も考えられる。

遺物は底部を含む土師質土器片13点、須恵器片1点、備前焼(擂鉢)1点を出土しており、土師質土器片は摩耗している。図示したのは備前焼の擂鉢(23)である。



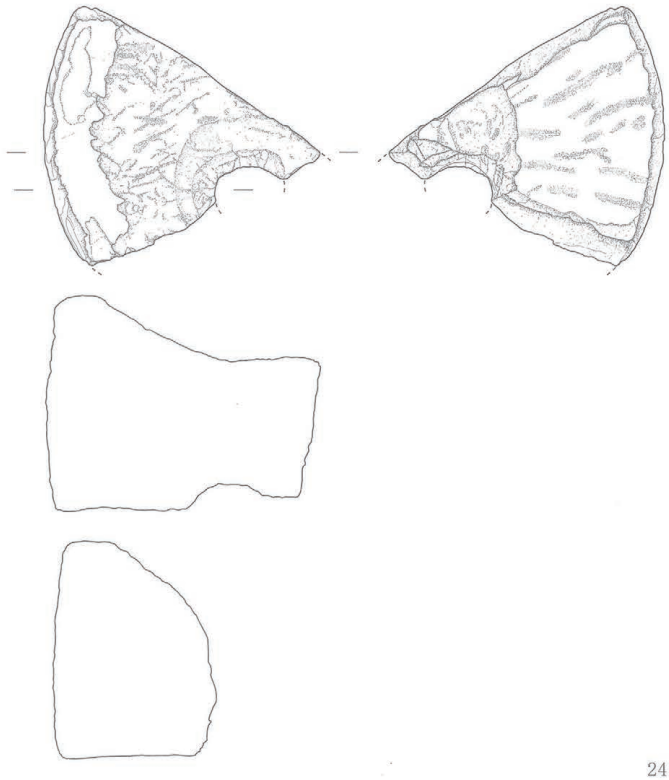
第20図　SK2 平面･エレベーション図(S=1/40) 出土遺物実測図(S=1/3)

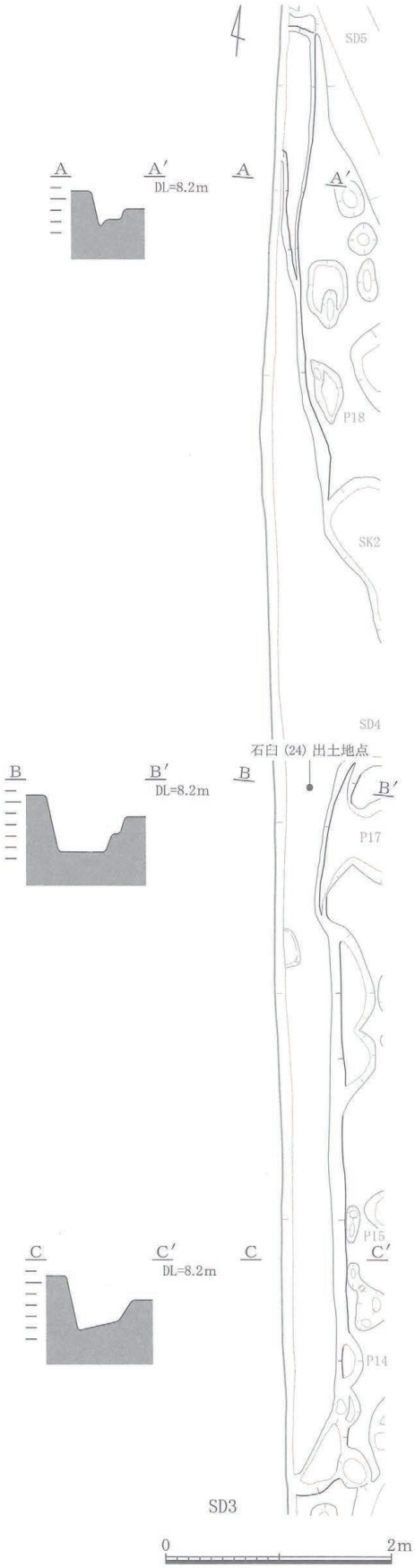
溝状遺構(ＳＤ)

ＳＤ３(第21図)　近世

調査区Ｅ23～26グリッドに位置する。西側は調査区外へ続いており未検出であるが、調査区西端に沿って検出していると考えられる。検出高は7.83ｍを測る。検出状態での主軸方向はN-5°-Wである。ＳＤ４及びＰ14･17を含むピット状遺構と切り合い関係にある。検出規模は13.03×0.25～0.62ｍ、床面高は北端で7.78ｍ、南端7.52ｍを測る。断面形態は台形状を呈し、深さは12～32㎝を測る。埋土は灰黒色シルトに橙色シルト(地山)が混じる。床面の形状から切り合いの可能性も考えられる。

遺物は口縁･底部を含む土師質土器片13点、近世陶器片１点、石製品(石臼)１点を出土している。他に鉄状遺物１点と炭化物を少量出土している。図示したのは石臼(24)である。





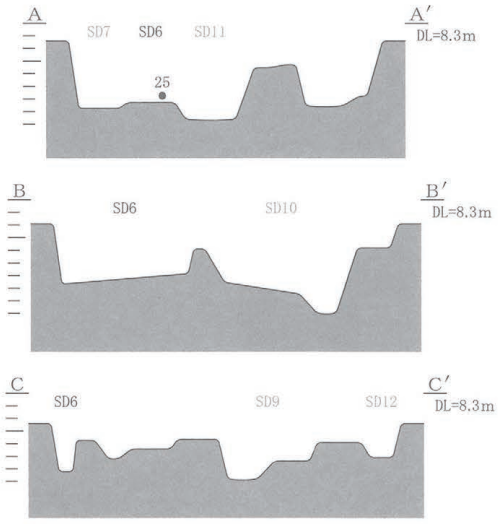
第21図　SD3 平面･エレベーション図 (S=1/60) 出土遺物実測図 (S=1/4)

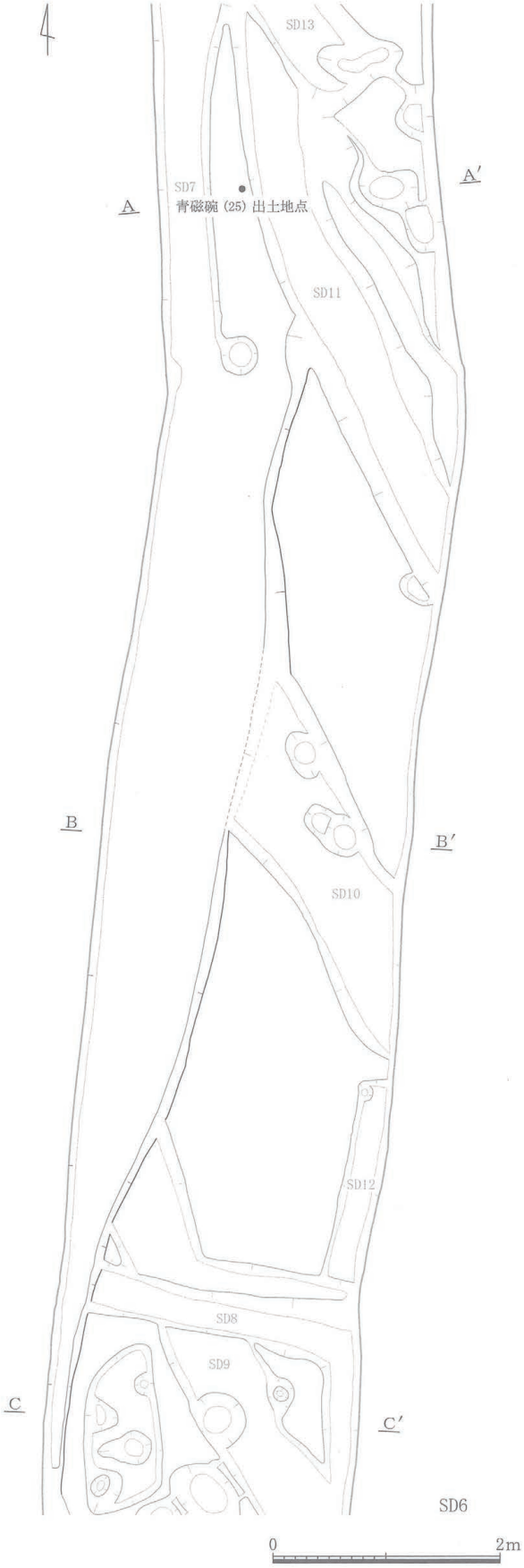
ＳＤ６(第22図)　近世

調査区Ｅ19～22グリッドに位置する。北端はＳＤ11、南端はＳＤ５と切り合い関係にある。検出高は北端で7.89ｍ、南端で7.93ｍを測る。検出状態での主軸方向はN-9°-Eである。ＳＤ７～11･14と切り合い関係にある。検出規模は13.45×1.10ｍ、床面高は北端で7.64ｍ、南端で7.68ｍを測る。断面形態は箱形状を呈し、深さは25㎝を測る。埋土は灰黒色シルトである。床面の形状からＳＤ７と重複若しくは同一遺構の可能性が考えられる。

遺物は土師質土器片３点、備前焼片１点、近世陶器片２点、瓦片(近世)１点を出土しており、土師質土器片は摩耗している。図示したのは近世の青磁碗(25)である。

SD6 遺構完掘状態



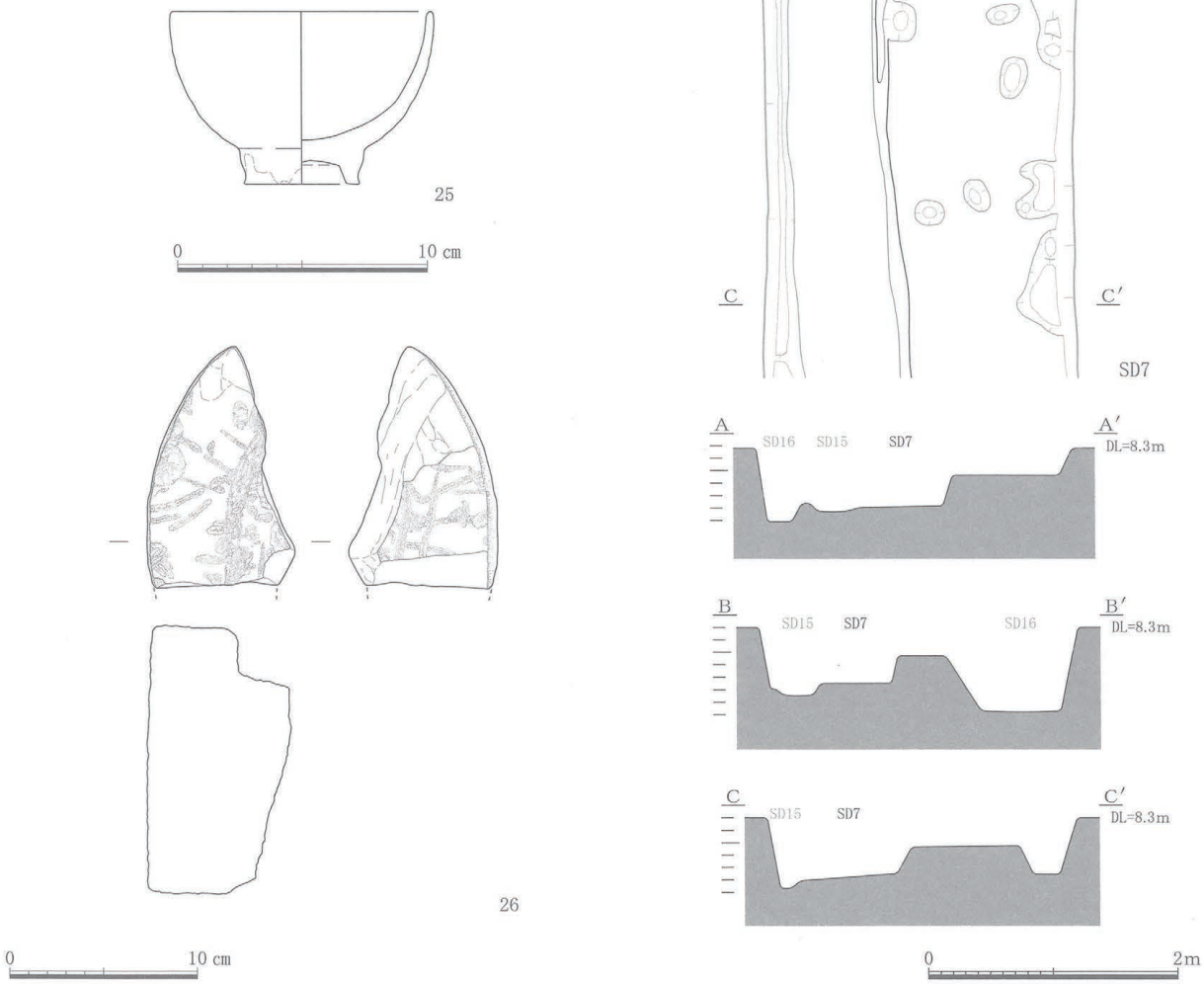


第22図 SD6 平面･エレベーション図 (S=1/60)

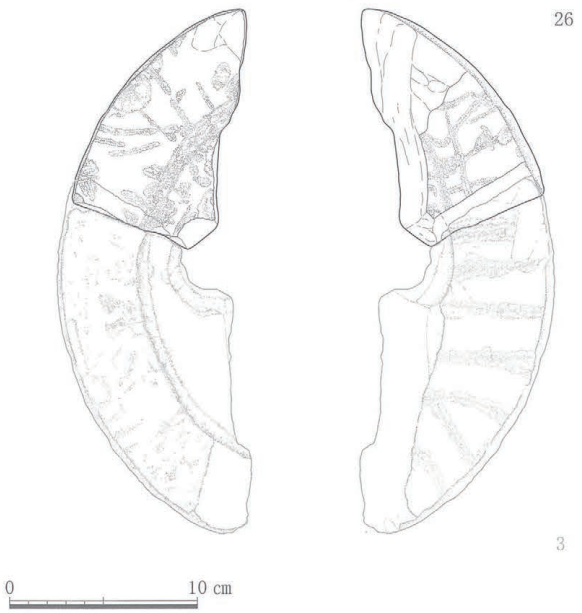
ＳＤ７（第23図）　近世

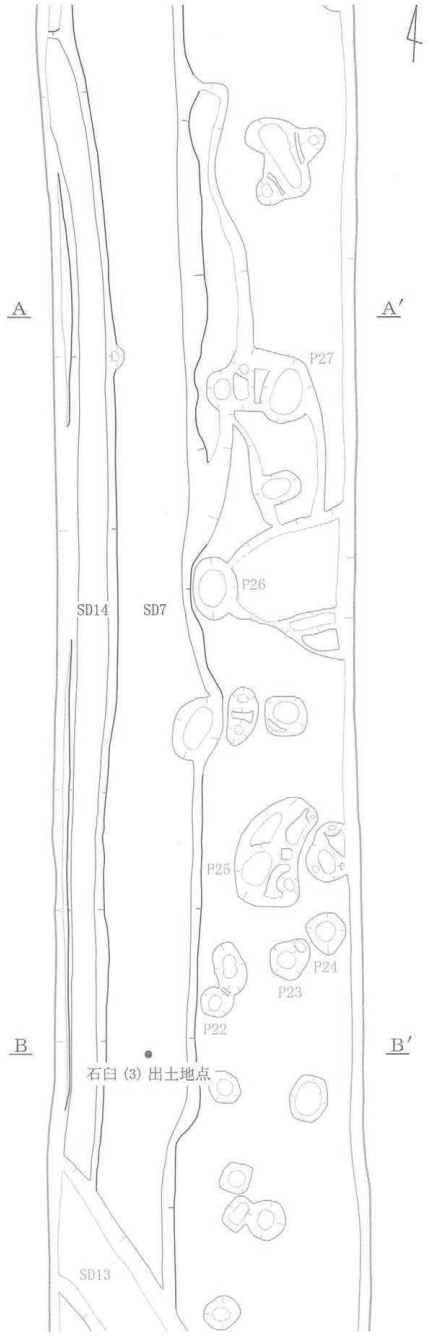
調査区Ｅ14～18グリッドに位置する。北端は調査区外へ続いており、未検出である。検出高は北端で7.94ｍ、南端で7.89ｍを測る。検出状態での主軸方向はN-2°-Wである。ＳＤ13～16と切り合い関係にある。検出規模は18.40×1.10ｍ、床面高は北端で7.71ｍ、南端で7.67ｍを測る。断面形態は台形状を呈し、深さは23㎝を測る。埋土は灰黒色シルトである。接続関係等からＳＤ６と同一遺構の可能性が考えられる。

遺物は口縁･底部を含む土師質土器片34点、須恵器片５点、白磁碗（Ⅳ類）の細片１点、近世陶磁器片１点、瓦片（近世）３点、石製品（石臼）１点を出土している。図示したのは石臼(26)である。26はＴＲ４の石臼(3)と接合し、同一個体と考えられる。



第23図　SD7 平面･エレベーション図（S=1/60）出土遺物実測図（S=1/3･1/4）

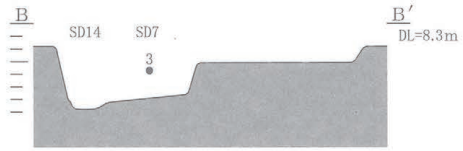


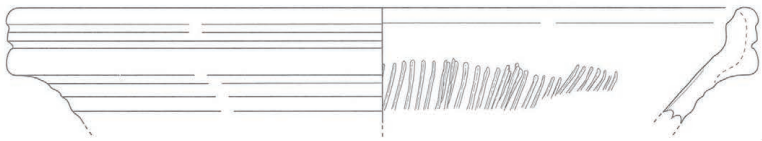


ＳＤ 14(第 24 図)　近世

調査区Ｅ 16～19 グリッドに位置する。北端は調査区外へ続いており、未検出である。検出高は 7.95 m を測る。検出状態での主軸方向はＮ－3°－Ｗである。ＳＤ 7･13･15 と切り合い関係にある。検出規模は 9.20×0.37 m、床面高は北端で 7.62 m、南端で 7.60 m を測る。断面形態は皿状を呈し、深さは 22 cm を測る。埋土は灰色の強い灰黒色シルトである。

遺物は土師質土器片 2 点と備前焼(擂鉢)片 2 点を出土している。他に鉄状遺物 1 点を出土している。図示したのは備前焼の擂鉢(27)である。





第 24 図　SD7･14 平面･エレベーション図 (S=1/60) 出土遺物実測図 (S=1/3･1/4)

4. 包含層出土遺物

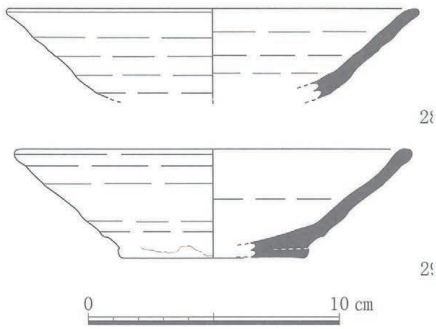
中世

本調査区(南区)ではⅢ層(黒褐色シルト)を中心に口縁・底部を含む土師質土器片約600点、瓦質土器片6点、須恵器片8点、布目瓦片1点を出土しており、一部は摩耗している。土師質土器は供膳形態(什器)を中心に出土がみられ、器種ごとの分類を試みた。また調査区南端の落ち込み部分(攪乱1)から多くの遺物が出土しており、包含層出土遺物と分別して掲載している。

須恵器

椀(第25図)

29(28)：色調は暗灰黄色を呈しており、焼成は不良である。回転ナデ調整で、ロクロ目を残している。体部は斜上外方へ立ち上がる。口縁部は僅かに外反し、口唇部は丸く収めている。円盤状高台は形骸化しており、断面に粘土帯接合痕が確認できる。底部に回転糸切り痕が認められる。

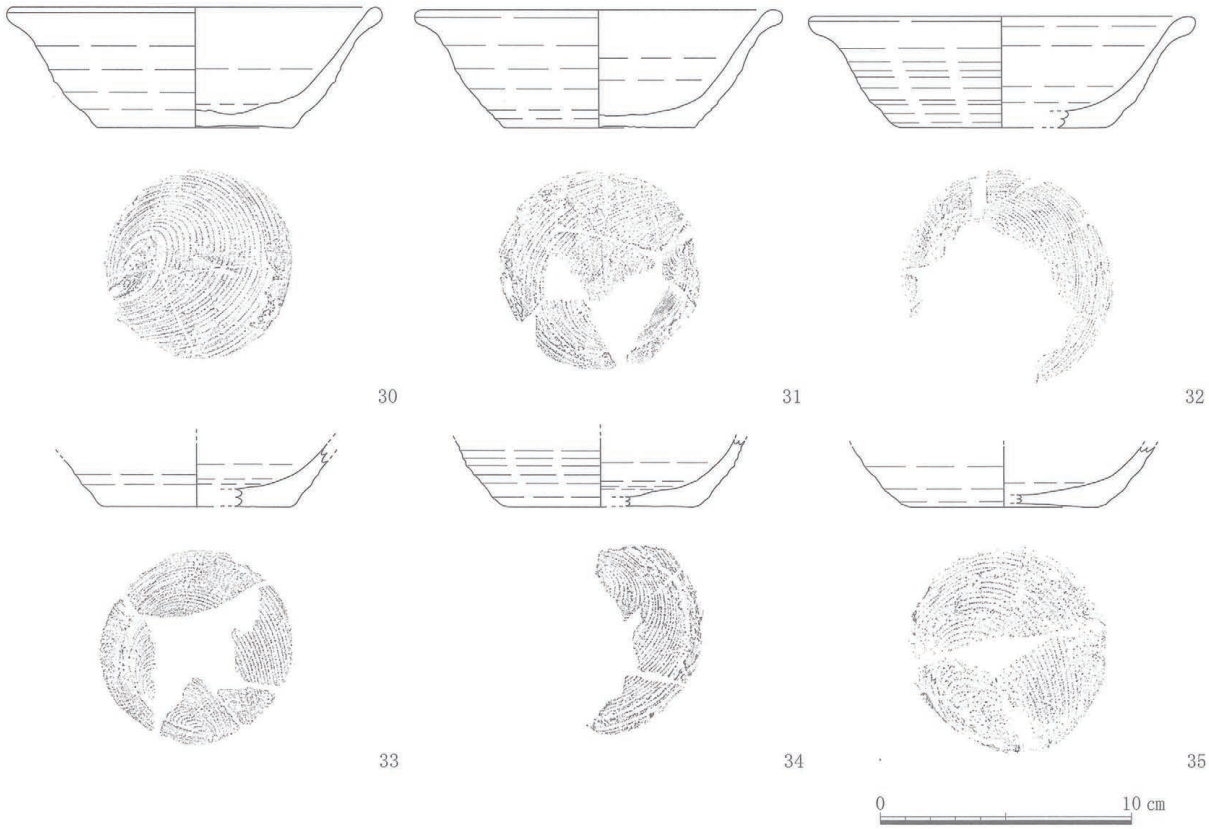


第25図　南区 包含層出土遺物実測図1 (S=1/3)

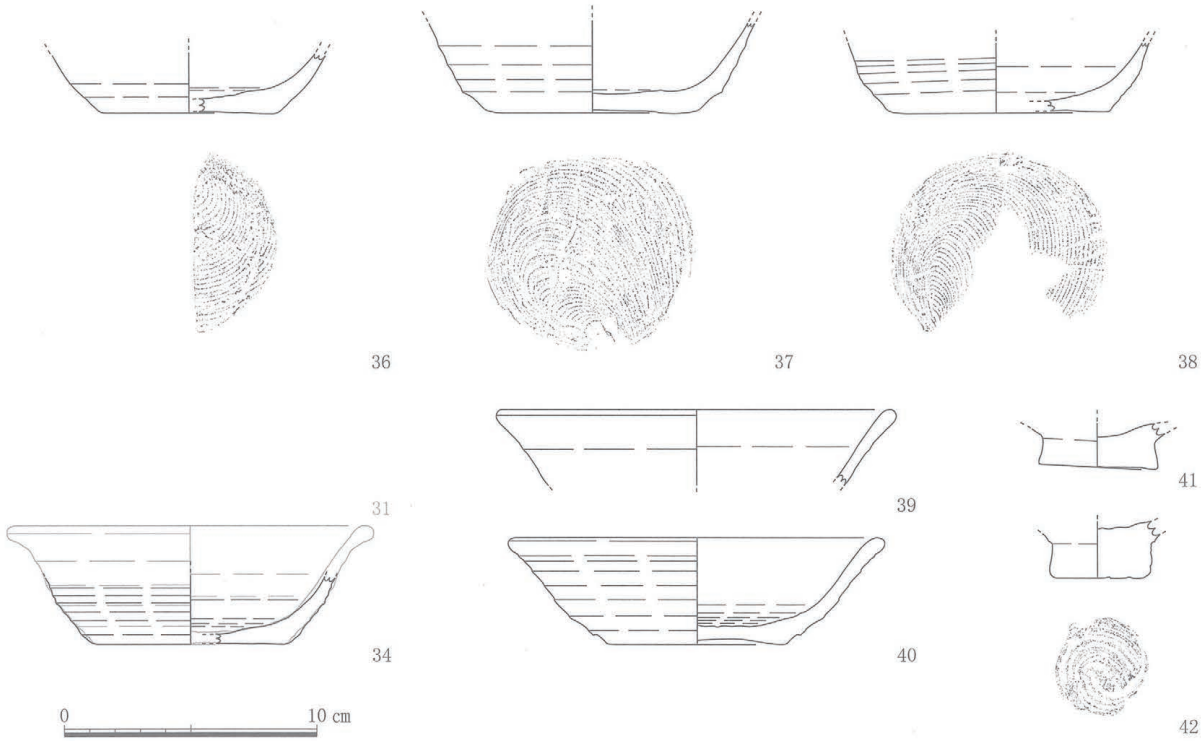
土師質土器

坏(第26・27図)

30～32(34～36)：回転ナデ調整で、内外面にロクロ目を残している。体部は内彎気味に立ち上がる。口縁部は短く外反し、端部は肥厚して口唇部は丸く収めている。底部に回転糸切り痕が認められる。



第26図　南区 包含層出土遺物実測図2 (S=1/3)



第 27 図　南区 包含層出土遺物実測図 3（S=1/3）

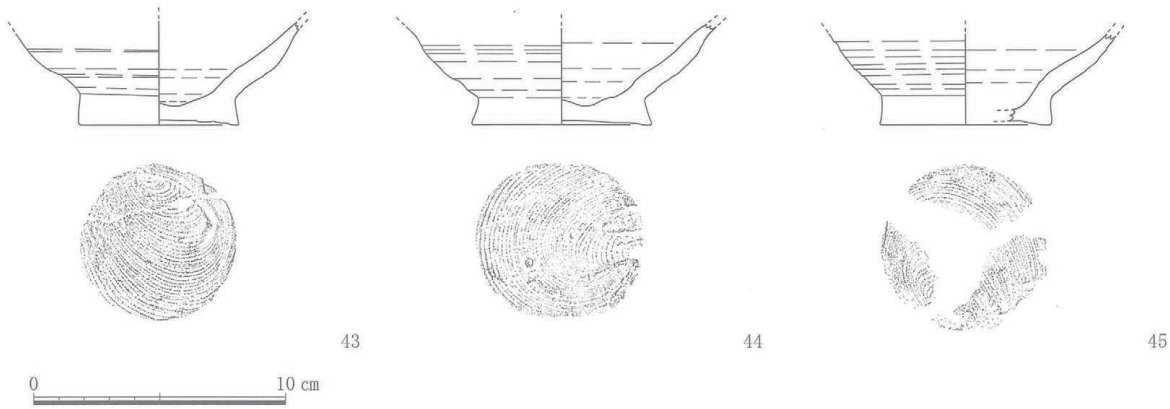
37･38：回転ナデ調整で、外面にロクロ目を残している。体部は直線的に立ち上がる。底部に回転糸切り痕が認められる。

40(39)：回転ナデ調整で、内外面にロクロ目を残している。体部は内彎気味に立ち上がる。口縁部は僅かに外反し、端部は若干肥厚して口唇部は丸く収めている。底部に回転糸切り痕が認められる。

41･42：回転ナデ調整で、高(柱状)高台を呈している。底部に回転糸切り痕が認められる。

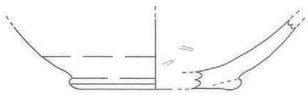
椀(第 28･29 図)

43～45：回転ナデ調整で、体部は「ハ」字形に開いている。高い円盤状高台を呈し、内底部が凹状(有段)を成してロクロ目を残している。底部に回転糸切り痕が認められる。



第 28 図　南区 包含層出土遺物実測図 4（S=1/3）

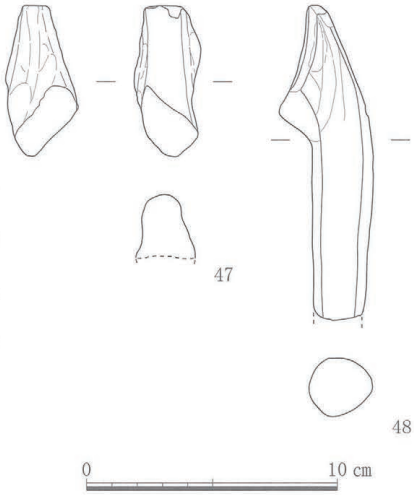
46：回転ナデ調整で、体部は内彎して立ち上がる。内底部にミガキを施している。円盤状高台は形骸化しており、断面に粘土帯接合痕が確認できる。底部に回転糸切り痕が認められる。



瓦質土器

煮炊具(第29図)

47･48：三足鍋の脚部であり、付け根部分から剥離している。



第29図　南区 包含層出土遺物実測図5 (S=1/3)

撹乱1

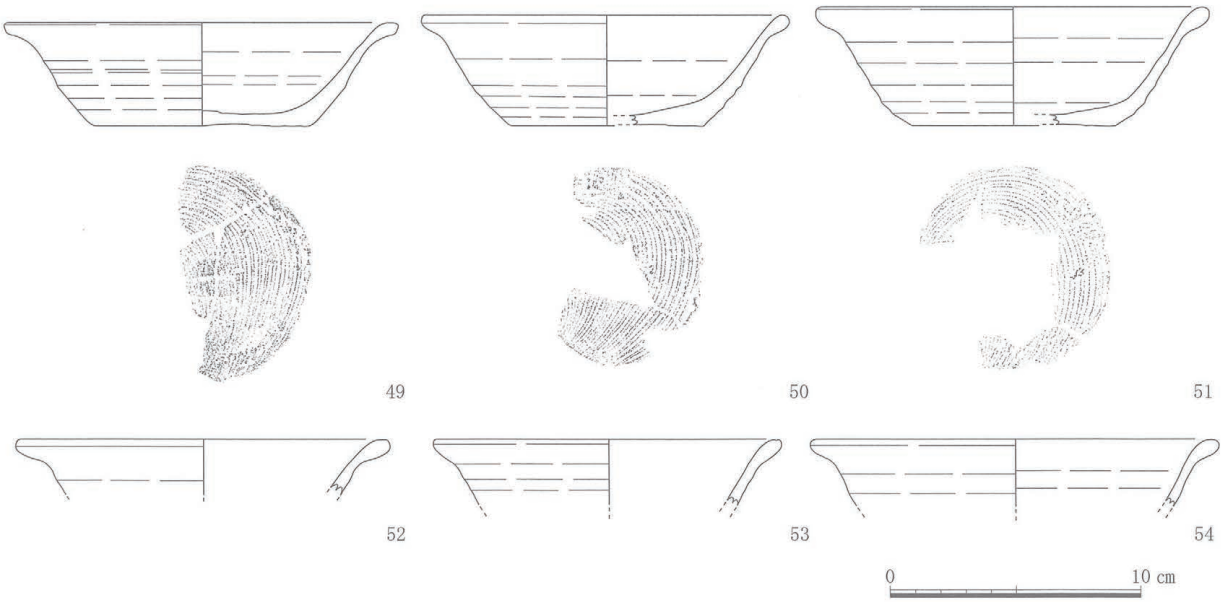
撹乱1は調査区南端に位置し、検出幅約1.5m、深さ約0.3mを測る。南面する市道敷設工事の施工によるものとみられ、近現代の硝子瓶なども出土している。中世の遺物は口縁･底部を含む土師質土器片約200点、須恵器片6点を出土している。土師質土器は供膳形態(什器)を中心に出土がみられ、器種ごとの分類を試みた。比較的多くの遺物を出土しており、包含層出土遺物と接合する例も複数みられるなど、出土状況から旧状の形態は検討を要すると思われる。

土師質土器

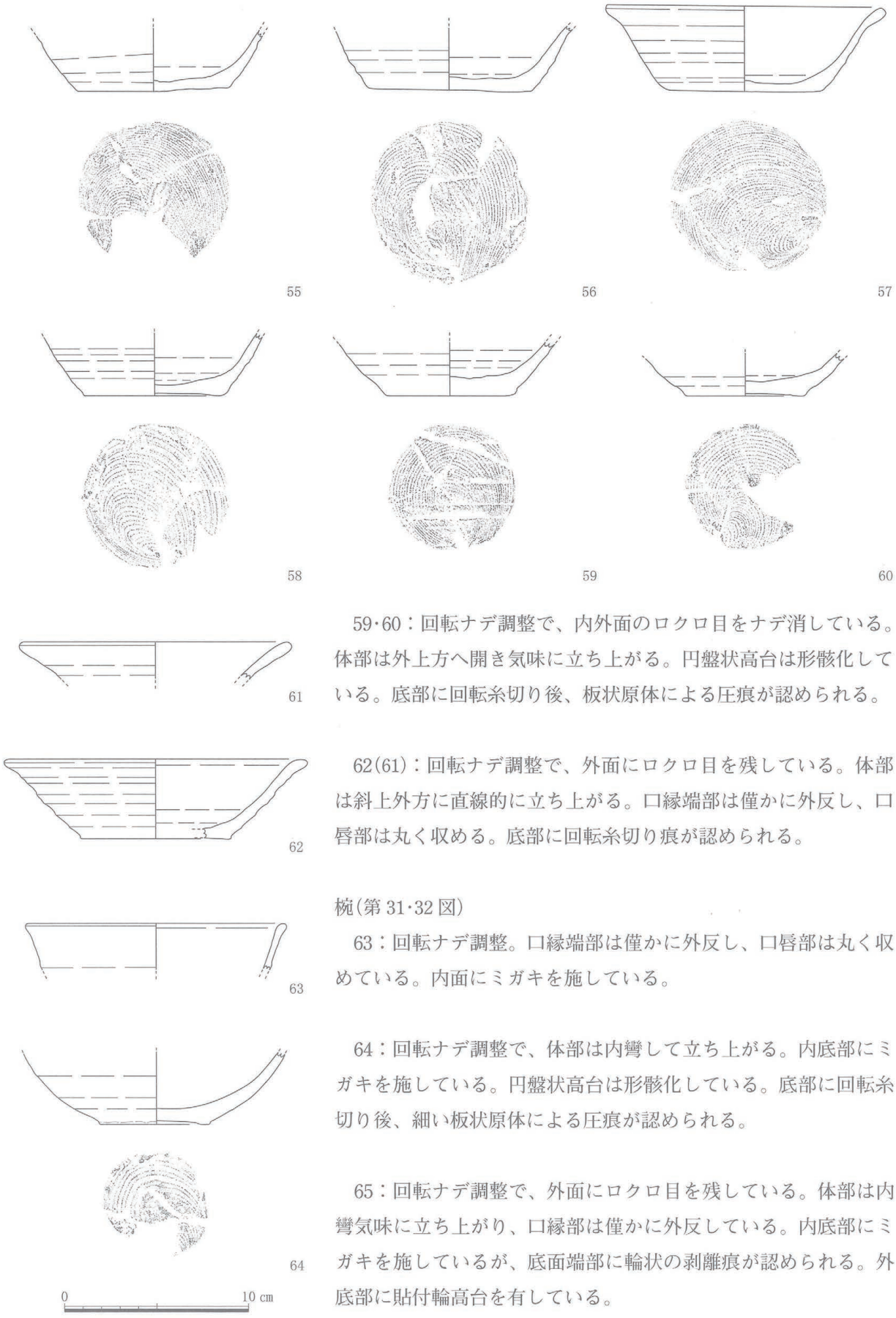
坏(第30･31図)

49･50(52～54)：回転ナデ調整で、内外面にロクロ目を残している。体部は内彎気味に立ち上がる。口縁部は短く外反し、端部は肥厚して口唇部は丸く収めている。底部に回転糸切り痕が認められる。

51･57(55～58)：回転ナデ調整で、内外面にロクロ目を残している。体部はやや直線的に立ち上がる。口縁部は短く外反し、端部は肥厚して口唇部は丸く収めている。底部に回転糸切り痕が認められる。



第30図　南区 撹乱1 出土遺物実測図1 (S=1/3)



59･60：回転ナデ調整で、内外面のロクロ目をナデ消している。体部は外上方へ開き気味に立ち上がる。円盤状高台は形骸化している。底部に回転糸切り後、板状原体による圧痕が認められる。

62(61)：回転ナデ調整で、外面にロクロ目を残している。体部は斜上外方に直線的に立ち上がる。口縁端部は僅かに外反し、口唇部は丸く収める。底部に回転糸切り痕が認められる。

椀(第31･32図)

63：回転ナデ調整。口縁端部は僅かに外反し、口唇部は丸く収めている。内面にミガキを施している。

64：回転ナデ調整で、体部は内彎して立ち上がる。内底部にミガキを施している。円盤状高台は形骸化している。底部に回転糸切り後、細い板状原体による圧痕が認められる。

65：回転ナデ調整で、外面にロクロ目を残している。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部は僅かに外反している。内底部にミガキを施しているが、底面端部に輪状の剥離痕が認められる。外底部に貼付輪高台を有している。

第31図　南区 撹乱1 出土遺物実測図2 (S=1/3)

小皿(第32図)

66：回転ナデ調整で、内外面にロクロ目を残している。体部は外上方へ開き気味に立ち上がる。口縁端部は僅かに外反し、口唇部は丸く収めている。底部に回転糸切り痕が認められる。

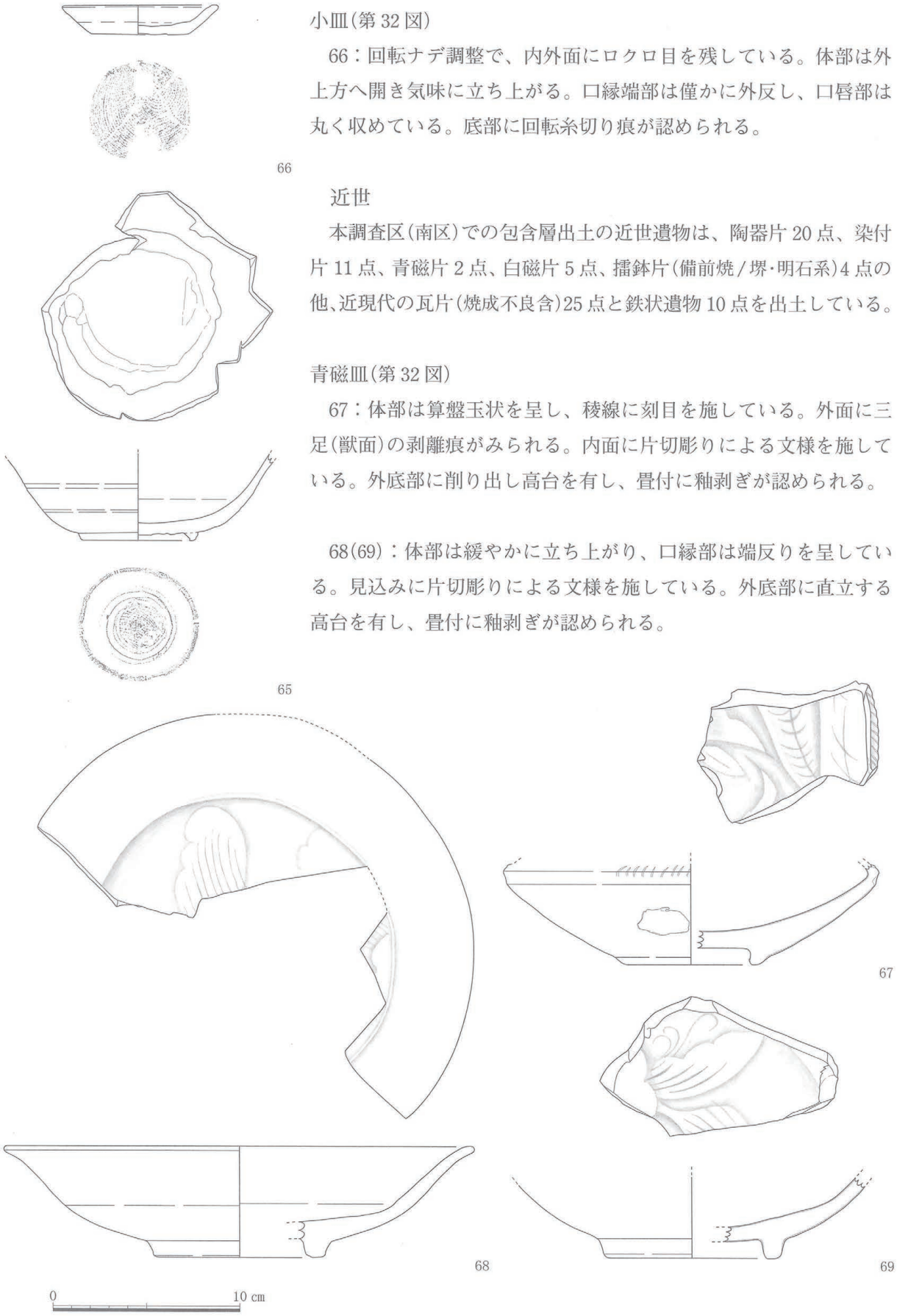
近世

本調査区(南区)での包含層出土の近世遺物は、陶器片20点、染付片11点、青磁片2点、白磁片5点、擂鉢片(備前焼/堺・明石系)4点の他、近現代の瓦片(焼成不良含)25点と鉄状遺物10点を出土している。

青磁皿(第32図)

67：体部は算盤玉状を呈し、稜線に刻目を施している。外面に三足(獣面)の剥離痕がみられる。内面に片切彫りによる文様を施している。外底部に削り出し高台を有し、畳付に釉剥ぎが認められる。

68(69)：体部は緩やかに立ち上がり、口縁部は端反りを呈している。見込みに片切彫りによる文様を施している。外底部に直立する高台を有し、畳付に釉剥ぎが認められる。



第32図　南区 撹乱1 出土遺物実測図3・包含層出土遺物実測図6 (S=1/3)

碗(第33図)

70：器面に網目文を施し、外底面に1条、高台外面に2条の界線(圏線)の染付がみられる。畳付に釉剥ぎが認められる。

壺/瓶(第33図)

71：外面のみに施釉がみられ、体部は直線的に外斜上方に立ち上がる。断面逆台形状の腰輪高台を有しており、畳付に釉剥ぎが認められる。

小皿(第33図)

72：型成形による放射(貝殻)状痕がみられる。体部は直線的に立ち上がり白磁釉を施している。腰折れの高台を有し、高台径が比較的大きい。

鍋(第33図)

73：回転ナデ調整で、胴部内面に鉄釉を施している。口縁部に受け部を有している。

土製品(第33図)

74：残存部は断面楕円形の撥状を呈している。一部に櫛描き状の条痕がみられる。側面に罅状の接合痕が確認できる。

窯道具(第33図)

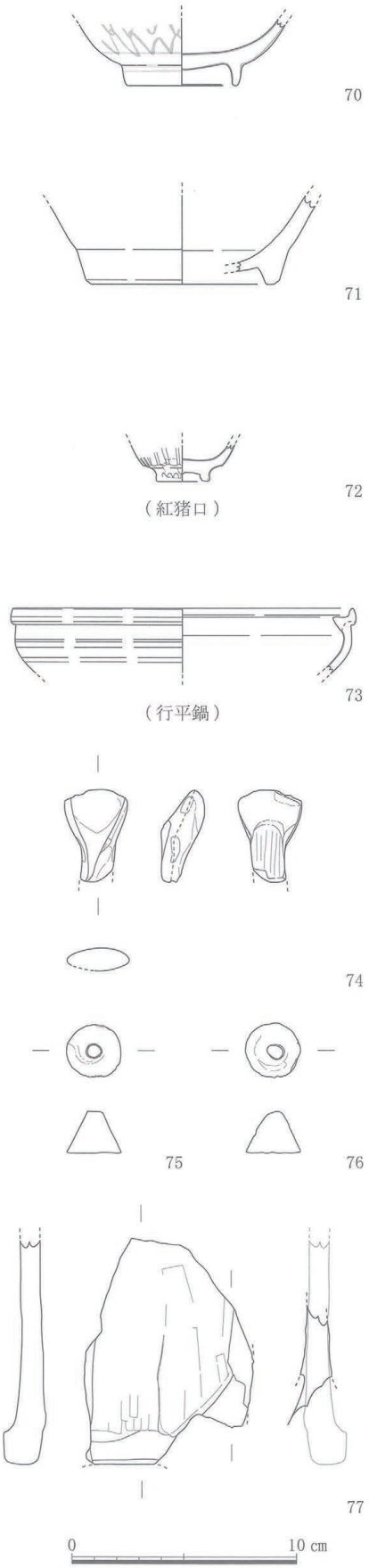
75･76：円錐状を呈している。ハリ。※76は攪乱1出土遺物。

攪乱1

攪乱1出土の近世遺物は陶器片36点、染付片10点、白磁片3点、擂鉢片(備前焼/堺･明石系)3点、焜炉片25点を出土し、焜炉片は接合に適わないが2個体分を確認できる。他に近現代の瓦片35点、染付片(型紙刷り)2点、鉄状遺物22点、硝子片5点を出土している。

焜炉(第33図)

77：外面はナデ調整で、ヘラ状原体による圧痕が認められる。内面はハケ調整で、ハケ目が顕著に残っている。方形(箱形)状を呈している。(焜炉D類(2))



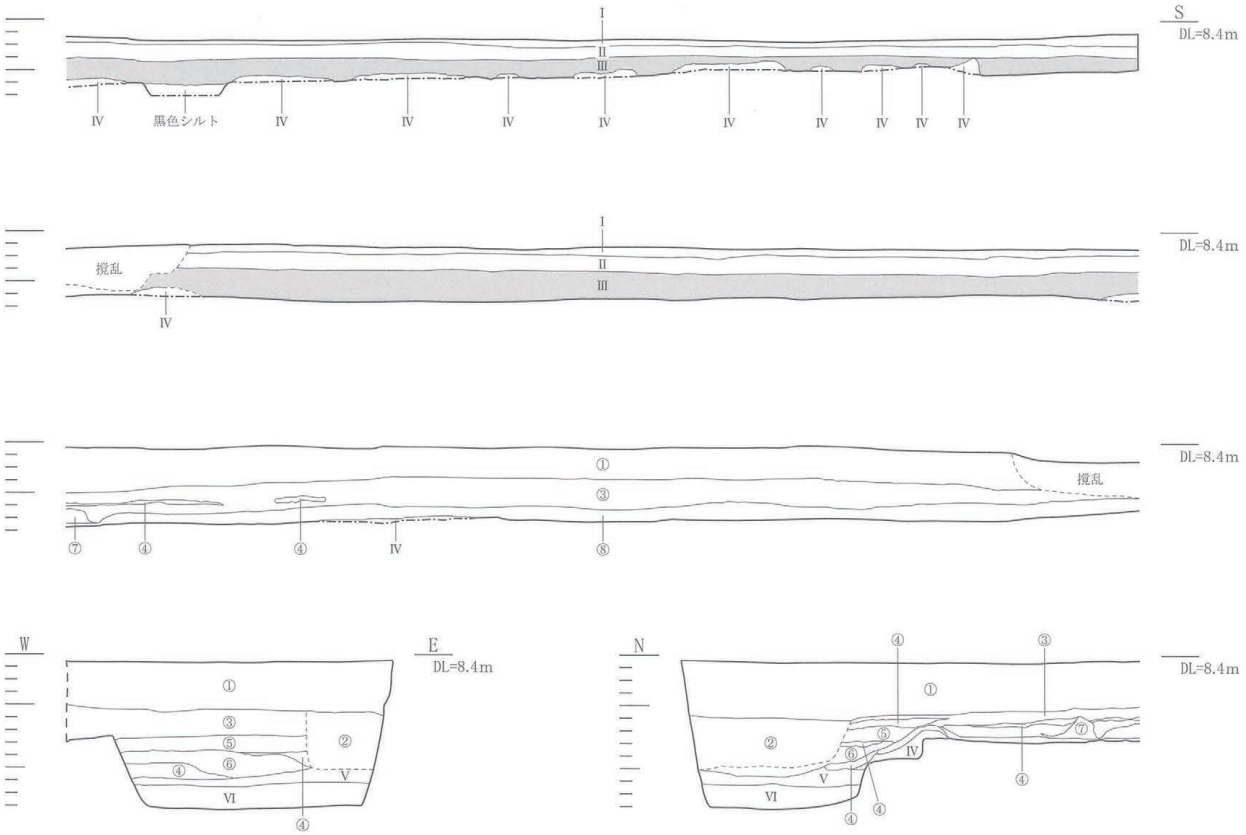
第33図　南区 包含層出土遺物実測図7･攪乱1 出土遺物実測図4 (S=1/3)

第４節　北区の調査

１．基本層序

調査区南側の東壁及び北壁の一部、北側の西壁で堆積状況を観察した。調査区南側の北半は造成に伴う客土により層序は失われているが、遺存する部分については黒ボク土(Ⅲ層)を含むシルト層の堆積がみられ、概況は基本的に南区と共通している。

調査区北側もⅡ・Ⅲ層は客土であると考えられるが、下層より浅い凹地状の堆積(ＳＸ１)を検出した。ＳＸ１は深さ約0.7ｍ前後を測り、調査区のほぼ全面から検出しているが、遺物の出土は確認していない。規模及び形態は不明であるが、埋没した旧流路跡若しくは湛水地跡の可能性を含んでおり、①～③層の堆積状況から自然地形を存していると考えられる。



北壁セクション図 (S=1/60)

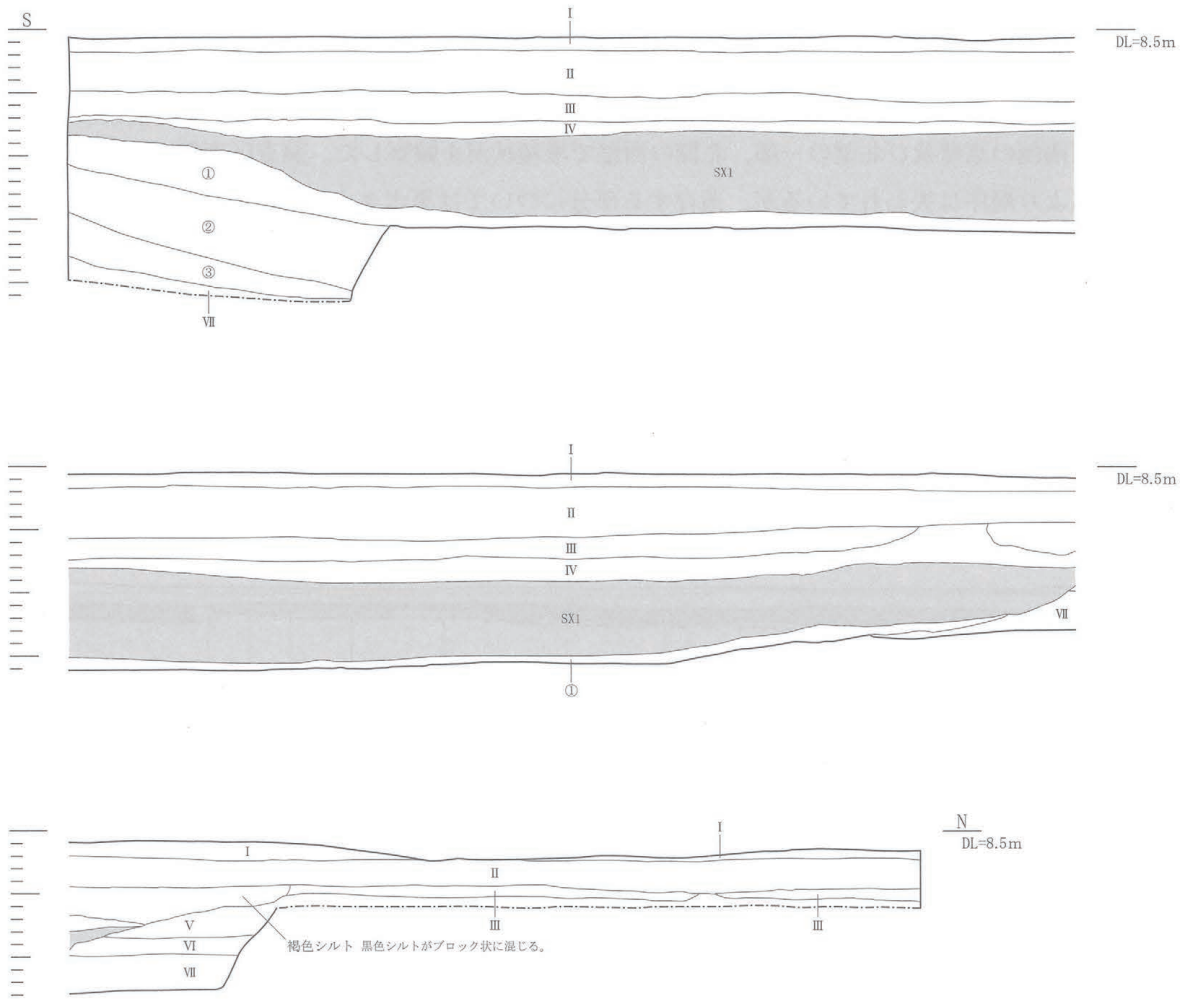
東壁セクション図 (S=1/60)

①: 灰黒褐色シルト　砂礫と橙色山土が混じる。(造成土)
②: 淡灰色シルト　２～８㎝大の礫が混じる。(撹乱)
③: 黒色シルト質砂　橙色が混じる。(造成土)
④: 濃黒色粘砂土(造成土)
⑤: 褐灰色砂礫(造成土)
⑥: 灰白色砂礫(造成土)
⑦: 濃黒色シルト　橙色シルト(山土)が混じる。(造成土)
⑧: 灰色粘土質シルト

Ⅰ: 灰色シルト(表土)
Ⅱ: 灰褐色シルト
Ⅲ: 黒褐色シルト(遺物包含層)
Ⅳ: 橙色シルト(地山)
Ⅴ: 濃灰色粘砂シルト(地山)
Ⅵ: 淡灰褐色粘土質シルト(地山)

0　2m

第34図　北区(南側)東・北壁セクション図 (S=1/60)



西壁セクション図（S=1/60）

SX1：黒灰色シルト 褐色シルトが混じる。
①：褐灰色砂質シルト
②：淡灰褐色砂質シルト
③：灰黒色シルト質砂

Ⅰ：灰色シルト（表土）
Ⅱ：黒灰色シルト 灰色シルト・黒色シルトが混じる。（造成土）
Ⅲ：褐灰色シルト 明橙色礫が混じる。（造成土）
Ⅳ：灰黒色粘土質シルト
Ⅴ：褐灰色シルト（遺構検出面）
Ⅵ：褐灰色シルト 砂礫を含む。
Ⅶ：砂礫層 黄（橙）色を呈する。

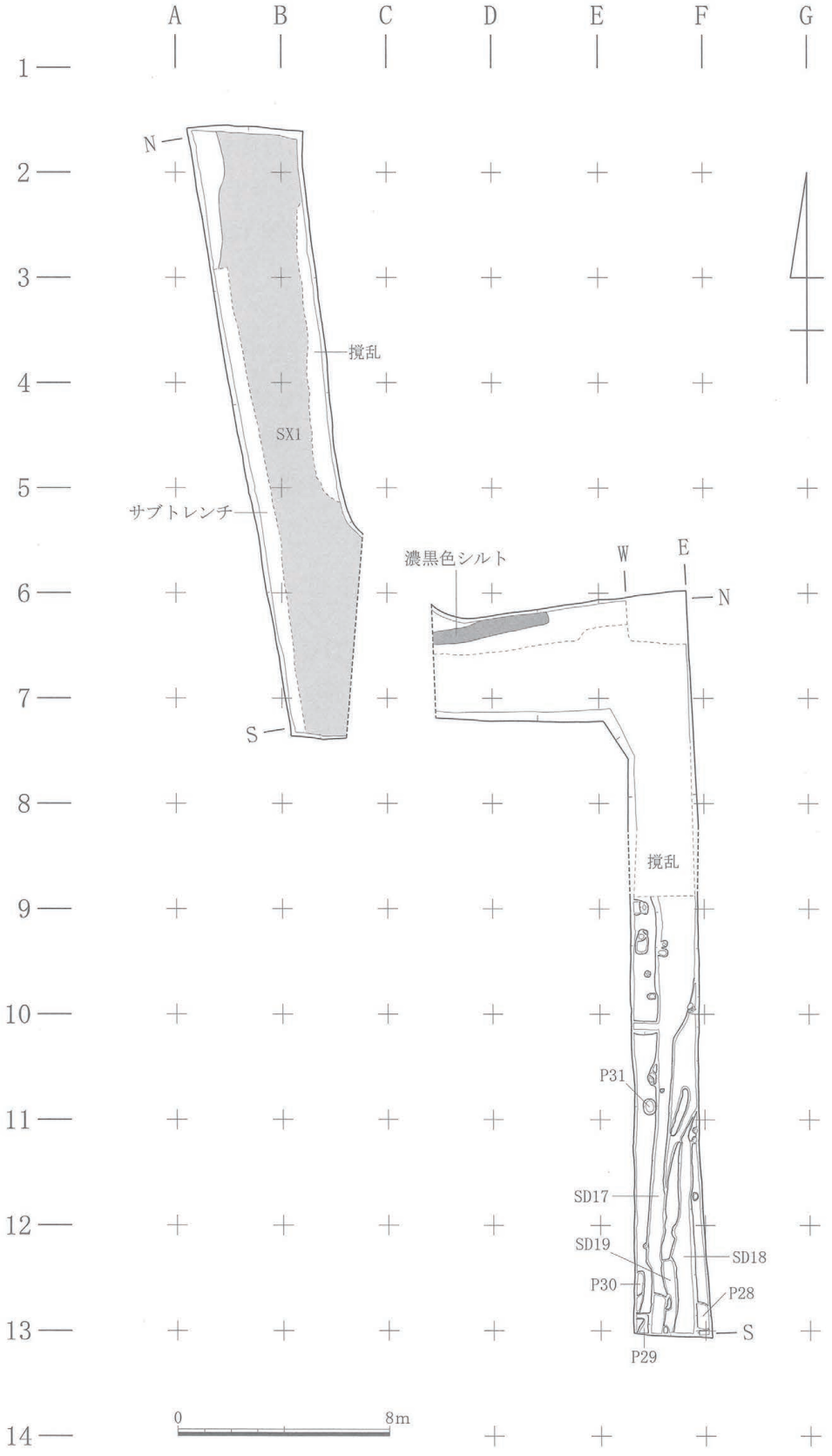
0　2m

第35図　北区（北側）西壁セクション図（S=1/60）

2．北区の遺構と遺物

北区では南側南半から溝状遺構を中心に遺構を検出している。同遺構は重複しているが、検出状態から新旧関係が看取できる。遺物は土師質土器等を中心に出土しており、摩耗がみられる。北側で検出したＳＸ１は自然地形（流路・湛水地跡等）の可能性が考えられ、発掘調査等は実施しなかった。

溝状遺構（ＳＤ）



第 36 図　北区 遺構配置図 (S=1/250)

ＳＤ 17(第 33 図)　中世

調査区Ｅ8～12 グリッドに位置する。南端は調査区外へ続いており未検出であるが、南区ＳＤ 15 と接続する可能性を残している。検出高は北端で 7.95 m、南端で 7.96 m を測る。検出状態での主軸方向はＮ-3°-Ｅである。ＳＤ 19 及びピット状遺構と切り合い関係にある(ＳＤ 19 を切る)。検出規模は 11.83×0.63 m、床面高は北端で 7.72 m、南端で 7.74 m を測る。断面形態は台形状を呈し、深さは 23 ㎝を測る。

遺物は口縁･底部を含む土師質土器片 104 点、須恵器片 3 点、瓦質土器(椀･羽釜)片 2 点、青磁碗(龍泉窯系)の細片 1 点、土錘 1 点、備前焼片 4 点を出土しており、土師質土器片の一部は摩耗している。

ＳＤ 18(第 33 図)　中世

調査区Ｅ 11･12 グリッドに位置する。南端は調査区外へ続いており、未検出である。検出高は北端で 7.90 m、南端で 8.01 m を測る。検出状態での主軸方向はＮ-1°-Ｅである。ＳＤ 19 及びピット状遺構と切り合い関係にある(ＳＤ 19 を切る)。検出規模は 8.43×0.57 m、床面高は北端で 7.66 m、南端で 7.75 m を測る。断面形態は台形状を呈し、深さは 25 ㎝を測る。遺物の出土は確認していない。

ＳＤ 19(第 33 図)　中世

調査区Ｅ 12 グリッドに位置する。南端は調査区外へ続いており、未検出である。検出高は 7.97(7.72) m を測る。検出状態での主軸方向はＮ-3°-Ｗである。ＳＤ 17･18 及びピット状遺構と切り合い関係にあり(ＳＤ 17･18 に切られる)、検出規模は 2.85×0.58 m、床面高は北端で 7.66 m、南端で 7.72 m を測るが、北側に延伸する可能性を残している。残存状態での断面形態は皿状を呈し、深さは 7 ㎝を測る。

遺物は底部を含む土師質土器片 14 点、須恵器片 1 点を出土しており、土師質土器片は摩耗している。

ピット状遺構(Ｐ)

北区においてピット状遺構は時期不明を含めて約 20 個を検出したが、規則性(掘建柱建物等)は認められなかった。遺物の出土が確認できたものは 4 個であり、何れも土師質土器片を僅かに含む程度である。

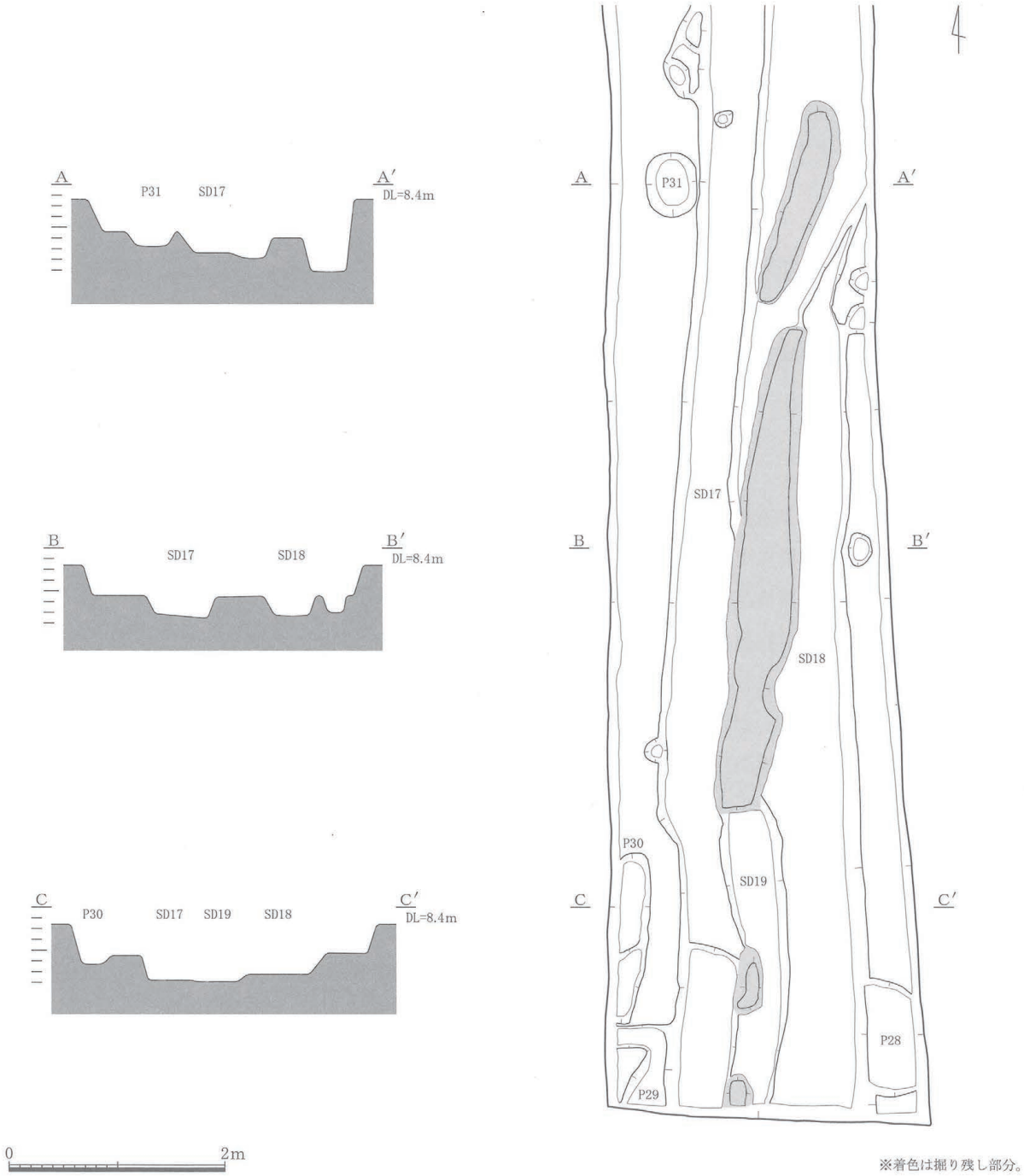
遺構番号	形態	規模			検出高(m)	切合関係	遺構位置(グリッド)	出土遺物	備考
		長径(m)	短径(m)	深さ(m)					
P28	楕円形状	1.07	(0.45)	0.14	7.99	SD18	E12･F12	土師質土器片　3 点	
P29	不整形状	(0.80)	(0.60)	0.14	7.98	—	E12	土師質土器片　1 点 (底部回転糸切り痕) 砥石　1 点	
P30	楕円形状	(1.00)	(0.30)	0.06	7.93	ピット状遺構	E12	土師質土器片　3 点	
P31	楕円形状	0.59	0.47	0.14	7.96	—	E10	土師質土器片　2 点	

第２表　北区 ピット状遺構計測表

３．包含層出土遺物

中世

本調査区(北区)では南側南半を中心に口縁･底部を含む土師質土器片 35 点、瓦質土器片(三足鍋の脚部) 1 点、須恵器片 3 点を出土しており、一部は摩耗している。北側からは一部摩耗した口縁･底部を含む土師質土器片 75 点を出土しているが、客土中の出土であり、他所の遺物包蔵地より搬入された可能性も考慮しなければならない。本調査において遺構の検出を確認していない弥生時代(後期)の細片数点が出土しており、当該期の遺跡が付近に所在している可能性を示唆している。



土師質土器

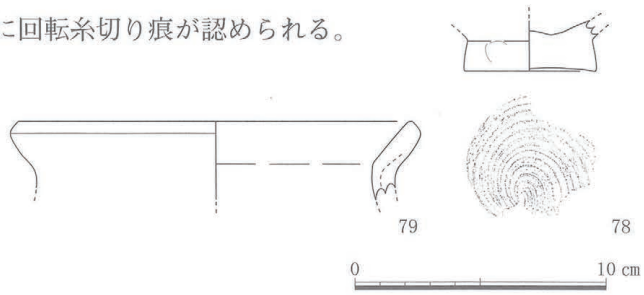
坏(第 37 図)

78：回転ナデ調整。高(柱状)高台を呈し、底部に回転糸切り痕が認められる。

土師器

煮炊具(鍋)/ 甕(第 37 図)

79：口縁部は屈曲して端部は面を取っている。

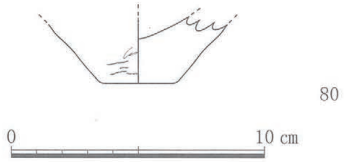


第 37 図　SD17・18・19 平面・エレベーション図 (S=1/60) / 北区 包含層出土遺物実測図 1 (S=1/3)

弥生土器

壺(第38図)

80：外面はタタキ調整後、ミガキを施している。底部は狭い平底状を呈している。(ヒビノキⅡ式)



第38図　北区 包含層出土遺物実測図2 (S=1/3)

近世

本調査区(北区)での包含層出土の近世遺物は、陶器片5点、染付片10点、白磁片1点、擂鉢片(備前焼/堺・明石系)7点の他、近現代の瓦片(焼成不良含)23点を出土している。瓦片の内20点は南側北半の造成部分(上層)から比較的纏まって出土しており、埋め立てに伴い廃棄された可能性が考えられる。

第5節　調査日誌抄

平成19年1月17日　調査開始

1.17(水) 調査区南…遺構検出作業

1.18(木) 調査区南…遺構検出作業/遺構配置図(S=1/40)作成

1.19(金) 調査区南…遺構検出作業終了

1.22(月) 調査区南…南端より遺構掘削作業　調査区北…表土掘削(重機)/遺構検出作業

1.26(金) 調査区南…ＳＤ1･2/Ｐ1～8調査

1.29(月) 調査区北…遺構検出作業/調査区北･東壁セクション図(S=1/20)作成

1.30(火) 調査区南…ＳＤ2･3/Ｐ9～16調査　調査区北…北側遺構検出作業/遺構配置図(S=1/40)作成

1.31(水) 調査区南…ＳＫ2/ＳＤ3･5調査　調査区北…遺構検出作業(重機･手作業)

2.1 (木) 調査区南…ＳＤ3･5･7･8調査　調査区北…北側の調査

2.2 (金) 調査区南…ＳＤ7･9･10･11調査　調査区北…北側の調査

2.5 (月) 調査区南…ＳＤ6･7･10･11･13調査/遺構平面図(S=1/20)作成　調査区北…北側の調査(終了)

2.6 (火) 調査区南…ＳＤ14･15･16調査

2.7 (水) 調査区南…ＳＤ14･15･16調査/遺構平面図(S=1/20)作成

2.8 (木) 調査区南…ＳＤ14･15･16調査

2.13(火) 調査区南…遺構平面図(S=1/20)･調査区西壁セクション図(S=1/20)作成
　　調査区北…南側遺構検出作業

2.15(木) 調査区南…清掃作業　調査区北…ＳＤ17･18･19調査

2.16(金) 調査区全体の清掃作業/調査区完掘写真

【註】

(1) 菊池直樹氏(高知県文化財団埋蔵文化財センター)の御教示による。

(2) 浜田恵子「土佐出土の土製火鉢･焜炉類」『四国と周辺の土器Ⅱ —火鉢･焜炉類にみる流通と生活形態—』四国城下町研究会 2003年

第３表　遺物観察表（土師質土器・瓦質土器・須恵器・他）

図版番号	出土地点	種類	器種器形	法量（cm）			色調	特徴	備考
				口径	器高	底径			
4	SD2	土師質土器	坏	—	(3.3)	6.0	内）にぶい黄橙 外）明黄褐	チャート等の細・粗粒砂を含む。回転ナデ調整。体部は内彎気味に立ち上がる。底部回転糸切り痕。	全体に摩耗
5	SD5	土師質土器	坏	13.2	4.8	7.7	内）にぶい黄橙 外）にぶい黄橙	チャート等の細・粗粒砂を含む。内外面にロクロ目を残す。体部は直線的に立ち上がる。口縁端部は面を取る。内面底央は回転成形により凸状を成す。	
6	SD8	須恵器	坏	—	(1.2)	8.2	内）灰 外）灰	細・粗粒砂を含む。ヨコナデ調整。底部外縁端部に外傾する貼付高台。	内底面は平滑
7	SD10	瓦質土器	羽釜	11.2	(4.9)	—	内）灰 外）灰	チャート等の細・粗粒砂を含む。内外面ナデ調整。断面蒲鉾状の鍔を貼付。	
8	SD11	須恵器	鉢	19.6	(4.5)	—	内）黄灰 外）灰黄	精選された胎土。回転ナデ調整。口唇部は凹状を成す。	
9	SD13	土師質土器	椀	—	(1.3)	6.0	内）灰黄 外）灰黄	精選された胎土。回転ナデ調整。内底部にロクロ目を残す。円盤状高台。底部回転糸切り痕。	全体に摩耗
10	SD15	土師質土器	小皿	7.2	1.5	5.4	内）浅黄 外）浅黄	細粒砂を含む。回転ナデ調整。内底面にロクロ目が残る。体部は外方へ開き、口唇部は丸く収める。底部回転糸切り痕。	全体に摩耗
11	SD15	土師質土器	坏	—	(1.6)	5.9	内）浅黄橙 外）にぶい橙	精選された胎土。回転ナデ調整。柱状高台を呈し、内底部は凹状を成す。底部回転糸切り痕。	
12	SD15	瓦質土器	羽釜	—	(3.8)	—	内）灰黄 外）灰黄	細・粗粒砂を含む。ナデ調整。断面蒲鉾状の鍔を貼付。	全体に摩耗
13	SD15	瓦質土器	羽釜	—	(3.2)	—	内）オリーブ黒 外）オリーブ黒	細・粗粒砂を含む。ナデ調整。断面三角形の鍔。鍔部の上下にヨコナデを施し、下部は凹状を成す。	全体に摩耗
15	SD16	土師質土器	坏	—	(2.2)	6.4	内）にぶい橙 外）にぶい橙	チャート等の細・粗粒砂を含む。回転ナデ調整。内外面にロクロ目が残る。体部は内彎気味に立ち上がり、外面に板状原体による圧痕。内底部に渦状のロクロ目が残る。底部回転糸切り痕。	外面摩耗
16	SD16	土師質土器	坏	13.6	(4.6)		内）にぶい黄橙 外）にぶい黄橙	精選された胎土。回転ナデ調整。外面にロクロ目が残る。体部は外傾がやや強く、内面下部に沈線状の調整痕。口縁部は僅かに肥厚し、口唇部は丸く収める。	
17	SD16	土師質土器	坏	—	(3.9)	8.0	内）浅黄橙 外）浅黄橙	細・粗粒砂を含む。回転ナデ調整。体部は外方へ開き、直線的に立ち上がる。底部回転糸切り痕。	全体に摩耗
18	SD16	土師質土器	椀	—	(3.3)	4.6	内）橙 外）橙	チャート等の細・粗粒砂を含む。回転ナデ調整。高い円盤状高台を呈し、内底部が凹状を成す。底部回転糸切り痕。	器表の摩耗が激しい
19	SD16	土師質土器	椀	—	(1.6)	6.0	内）灰白 外）灰白	細・粗粒砂を含む。回転ナデ調整。内底面にハケ状原体による調整痕。円盤状高台。底部回転糸切り痕。	全体に摩耗
21	P3	土師質土器	小皿	7.4	1.5	4.6	内）にぶい黄橙 外）にぶい黄橙	精選された胎土。回転ナデ調整。外面にロクロ目が残る。体部は外方へ開き、口唇部は丸く収める。底部回転糸切り痕。	
22	P6	土師質土器	坏	—	(1.6)	8.0	内）浅黄 外）浅黄	細粒砂を含む。回転ナデ調整。外面にロクロ目を残す。内底面端部に双線状の沈線。底部回転糸切り痕。	若干摩耗
28	南区包含層	須恵器	椀	15.4	(3.6)	—	内）灰黄 外）灰黄	精選された胎土。回転ナデ調整。内外面にロクロ目が残る。体部は斜上外方へ直線的に立ち上がる。口縁部は僅かに外反し、口唇部は丸く収める。	
29	南区包含層	須恵器	椀	15.4	4.4	7.2	内）暗灰黄 外）暗灰黄	精選された胎土。回転ナデ調整。体部は斜上外方へ立ち上がる。口縁部は僅かに外反し、口唇部は丸く収める。円盤状高台は形骸化。底部断面に粘土帯接合痕。底部回転糸切り痕。	
30	南区包含層	土師質土器	坏	14.4	4.8	7.8	内）にぶい橙 外）にぶい橙	細・粗粒砂を含む。回転ナデ調整。内外面にロクロ目を残す。口縁部は短く外反し、端部は肥厚する。口唇部は丸く収める。底部回転糸切り痕。	
31	南区包含層	土師質土器	坏	14.0	4.7	7.6	内）浅黄橙 外）浅黄橙	細・粗粒砂を含む。回転ナデ調整。内外面にロクロ目を残す。口縁部は短く外反し、端部は肥厚する。口唇部は丸く収める。内底部に右→左のヘラケズリ。底部回転糸切り痕。	
32	南区包含層	土師質土器	坏	14.8	4.4	8.2	内）にぶい橙 外）にぶい橙	精選された胎土。回転ナデ調整。外面にロクロ目を残す。内面ヘラミガキ・ヘラケズリ。口縁端部は丸みを帯びて肥厚し、短く外反する。底部回転糸切り痕。	
33	南区包含層	土師質土器	坏	—	(2.5)	7.7	内）にぶい黄橙 外）にぶい黄橙	細・粗粒砂を含む。回転ナデ調整。内外面のロクロ目をナデ消す。体部は直線的に立ち上がる。底部回転糸切り痕。	
34	南区包含層	土師質土器	坏	—	(2.7)	7.5	内）にぶい黄橙 外）にぶい黄橙	細・粗粒砂を含む。回転ナデ調整。外面にロクロ目を残す。体部は内彎気味に立ち上がる。底部回転糸切り痕。	
35	南区包含層	土師質土器	坏	—	(2.4)	8.0	内）にぶい橙 外）にぶい橙	細・粗粒砂を含む。回転ナデ調整。内外面のロクロ目をナデ消す。内底部にミガキ。底部回転糸切り痕。	
36	南区包含層	土師質土器	坏	—	(2.4)	7.0	内）にぶい橙 外）にぶい橙	火山ガラス（微量）等の細・粗粒砂を含む。回転ナデ調整。内外面のロクロ目をナデ消す。体部は内彎気味に立ち上がる。底部回転糸切り痕。	
37	南区包含層	土師質土器	坏	—	(4.1)	—	内）にぶい橙 外）にぶい橙	精選された胎土。回転ナデ調整。外面にロクロ目を残す。体部は直線的に立ち上がる。底部回転糸切り痕。	
38	南区包含層	土師質土器	坏	—	(2.8)	8.7	内）にぶい黄橙 外）浅黄橙	細粒砂を含む。回転ナデ調整。外面にロクロ目を残す。内面に右→左のヘラケズリ。外面にハケ状原体による調整痕。体部は直線的に立ち上がる。底部回転糸切り痕。	
39	南区包含層	土師質土器	坏	15.8	(3.0)	—	内）にぶい黄橙 外）にぶい黄橙	精選された胎土。回転ナデ調整。口縁部は僅かに外反し、端部は若干肥厚する。口唇部は丸く収める。	

図版番号	出土地点	種類	器種器形	法量（cm）			色調	特徴	備考
				口径	器高	底径			
40	南区包含層	土師質土器	坏	14.3	4.2	7.1	内）浅黄 外）浅黄	細粒砂を含む。回転ナデ調整。内外面にロクロ目を残す。体部は内彎気味に立ち上がる。口縁部は僅かに外反し、端部は若干肥厚する。口唇部は丸く収める。底部回転糸切り痕。	
41	南区包含層	土師質土器	坏	—	(1.8)	4.7	内）灰白 外）橙	細・粗粒砂を含む。回転ナデ調整。高（柱状）高台。底部回転糸切り痕。	
42	南区包含層	土師質土器	坏	—	(2.3)	3.8	内）にぶい橙 外）にぶい橙	細・粗粒砂を含む。回転ナデ調整。高（柱状）高台。底部回転糸切り痕。	
43	南区包含層	土師質土器	椀	—	(4.1)	6.3	内）にぶい橙 外）にぶい橙	チャート等の細・粗粒砂を含む。回転ナデ調整。体部は「ハ」字形に開く。高い円盤状高台を呈し、内底部が凹状（有段）を成してロクロ目が残る。底部回転糸切り痕。	
44	南区包含層	土師質土器	椀	—	(4.0)	7.0	内）にぶい黄橙 外）にぶい橙	細・粗粒砂を含む。回転ナデ調整。体部は「ハ」字形に開く。内面ヘラケズリ。高い円盤状高台を呈し、内底部が凹状（有段）を成してロクロ目が残る。底部回転糸切り痕。	
45	南区包含層	土師質土器	椀	—	(3.6)	6.7	内）にぶい橙 外）にぶい橙	チャート等の細・粗粒砂を含む。回転ナデ調整。体部は「ハ」字形に開く。高い円盤状高台を呈し、内底部が凹状（有段）を成す。底部回転糸切り痕。	
46	南区包含層	土師質土器	椀	—	(2.8)	6.8	内）淡黄 外）灰白	細・粗粒砂を含む。回転ナデ調整。体部は内彎して立ち上がる。内底部にミガキを施す。円盤状高台は形骸化。底部断面に粘土帯接合痕。底部回転糸切り痕。	
47	南区包含層	瓦質土器	鍋脚部	—	(6.0)	—	内） 外）黄灰	細粒砂を含む。三足鍋の脚部。ナデ調整。付け根部分から剥離。	
48	南区包含層	瓦質土器	鍋脚部	—	(12.5)	—	内） 外）浅黄	チャート等の細・粗粒砂を含む。三足鍋の脚部。付け根部分から剥離。	焼成不良
49	撹乱1	土師質土器	坏	15.1	4.1	8.4	内）にぶい橙 外）にぶい橙	精選された胎土。回転ナデ調整。内外面にロクロ目を残す。口縁端部は僅かに肥厚し、短く外反する。底部回転糸切り痕。	
50	撹乱1	土師質土器	坏	14.3	4.4	7.6	内）にぶい黄橙 外）にぶい黄橙	火山ガラス等の細・粗粒砂を含む。回転ナデ調整。内外面にロクロ目を残す。体部は内彎気味に立ち上がる。口縁部は短く外反し、端部は肥厚する。口唇部は丸く収める。底部回転糸切り痕。	
51	撹乱1	土師質土器	坏	15.1	4.7	8.2	内）にぶい黄橙 外）にぶい黄橙	精選された胎土。回転ナデ調整。内外面にロクロ目を残す。口縁部は丸みを帯びて肥厚し、短く外反する。底部回転糸切り痕。	
52	撹乱1	土師質土器	坏	14.6	(2.2)	—	内）にぶい橙 外）橙	精選された胎土。回転ナデ調整。口縁部は短く外反し、端部は肥厚する。口唇部は丸く収める。	
53	撹乱1	土師質土器	坏	13.6	(2.6)	—	内）浅黄橙 外）浅黄橙	細・粗粒砂を含む。回転ナデ調整。口縁部は短く外反し、端部は僅かに肥厚する。口唇部は丸く収める。	
54	撹乱1	土師質土器	坏	16.0	(2.6)	—	内）にぶい黄橙 外）にぶい黄橙	精選された胎土。回転ナデ調整。口縁部は短く外反し、端部は肥厚する。口唇部は丸く収める。	
55	撹乱1	土師質土器	坏	—	(3.4)	8.2	内）浅黄橙 外）褐灰	火山ガラス等の細・粗粒砂を含む。回転ナデ調整。内外面のロクロ目をナデ消す。内底部に右→左のヘラケズリ。底部回転糸切り痕。	外底部に煤け
56	撹乱1	土師質土器	坏	—	(3.6)	8.7	内）にぶい橙 外）にぶい橙	チャート等の細・粗粒砂を含む。回転ナデ調整。内外面にロクロ目を残す。体部は直線的に立ち上がり、口縁部は僅かに外反する。底部回転糸切り痕。	
57	撹乱1	土師質土器	坏	14.8	4.7	8.3	内）にぶい黄橙 外）にぶい黄橙	細・粗粒砂を含む。回転ナデ調整。内外面にロクロ目を残す。体部は直線的に立ち上がる。口縁部は短く外反し、端部は丸く収める。底部回転糸切り痕。	
58	撹乱1	土師質土器	坏	—	(3.4)	7.7	内）にぶい黄橙 外）にぶい黄橙	細・粗粒砂を含む。回転ナデ調整。外面にロクロ目を残す。体部は直線的に立ち上がる。内底部のロクロ目をナデ消す。底部回転糸切り痕。	
59	撹乱1	土師質土器	坏	—	(2.9)	7.0	内）にぶい黄橙 外）にぶい黄橙	火山ガラス等の細・粗粒砂を含む。回転ナデ調整。内外面のロクロ目はナデ消している。円盤状高台は形骸化。底部回転糸切り後、板状原体による圧痕が認められる。	
60	撹乱1	土師質土器	坏	—	(2.3)	6.6	内）灰白 外）灰黄	火山ガラス（微量）等の細・粗粒砂を含む。回転ナデ調整。内外面のロクロ目をハケ状原体によりナデ消す。円盤状高台は形骸化。底部回転糸切り後、板状原体による圧痕。	
61	撹乱1	土師質土器	坏	14.8	(2.1)	—	内）浅黄橙 外）浅黄橙	チャート等の細・粗粒砂を含む。回転ナデ調整。口縁部は僅かに肥厚し、口唇部は丸く収める。	
62	撹乱1	土師質土器	坏	16.0	4.3	8.2	内）にぶい黄 外）にぶい黄橙	精選された胎土。回転ナデ調整。外面にロクロ目を残す。体部は斜上外方に直線的に立ち上がる。口縁端部は僅かに外反し、口唇部は丸く収める。底部回転糸切り痕。	
63	撹乱1	土師質土器	坏	14.0	(2.5)	—	内）にぶい黄橙 外）にぶい黄橙	精選された胎土。回転ナデ調整。外面にロクロ目が残る。口縁端部は僅かに外反し、口唇部は丸く収める。内面にミガキ。	
64	撹乱1	土師質土器	椀	—	(3.9)	6.0	内）灰黄 外）灰黄	精選された胎土。回転ナデ調整。体部は内彎して立ち上がる。内底部にミガキを施す。円盤状高台は形骸化。底部回転糸切り後、細い板状原体による圧痕。	
65	撹乱1	土師質土器	椀	—	(4.8)	6.2	内）にぶい黄橙 外）にぶい黄橙	細粒砂を含む。回転ナデ調整。外面にロクロ目を残す。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部は僅かに外反する。内底部にミガキを施す。内底面端部に輪状の剥離痕。貼付輪高台。	
66	撹乱1	土師質土器	小皿	8.3	1.6	5.2	内）にぶい黄橙 外）にぶい黄橙	チャート等の細・粗粒砂を含む。回転ナデ調整。内外面にロクロ目を残す。体部は外上方へ開く。口縁部は僅かに外反し、口唇部は丸く収める。底部回転糸切り痕。	

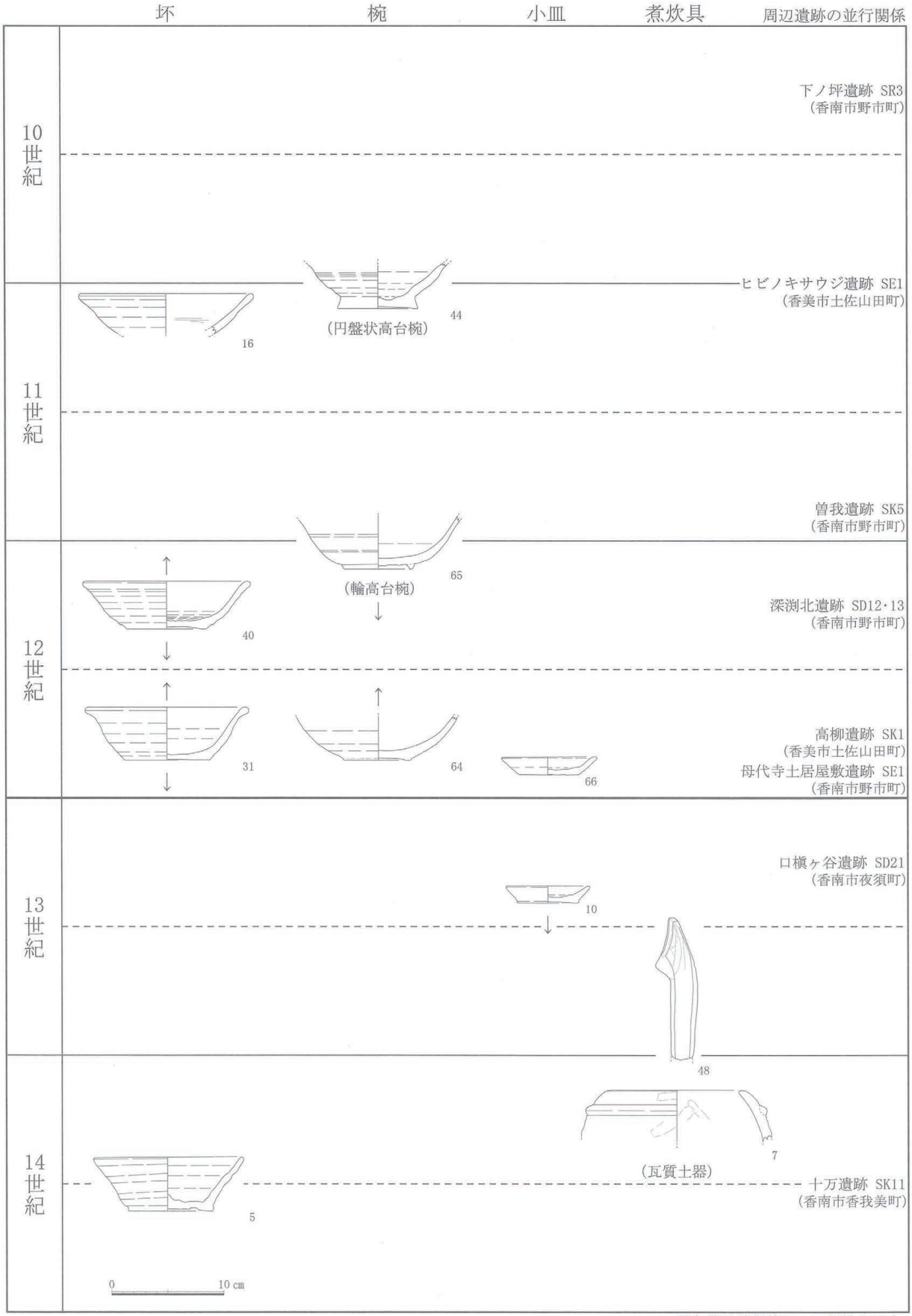
図版番号	出土地点	種類	器種器形	法量（cm）			色調	特徴	備考
				口径	器高	底径			
78	北区包含層	土師質土器	坏	—	(2.0)	5.7	内）にぶい橙 外）にぶい橙	細・粗粒砂を含む。回転ナデ調整。高(柱状)高台。底部回転糸切り痕。	
79	北区包含層	土師器	鍋(甕)	15.6	(3.1)	—	内）にぶい黄橙 外）にぶい黄橙	チャート等の細・粗粒砂を含む。口縁部は屈曲し、端部は面を取る。	
80	北区包含層	弥生土器	壺	—	(2.7)	2.8	内）橙 外）黒褐	細・粗粒砂を含む。外面はタタキ調整後、ミガキ。底部は狭い平底。	ヒビノキⅡ式

第４表　遺物観察表（近世陶磁器・近世陶器・備前焼・他）

図版番号	出土地点	種類	器種器形	法量（cm）			色調	特徴	備考
				口径	器高	底径			
1	TR2	近世陶器	皿	14.7	3.5	9.1	内）灰白 外）灰白	回転ナデ調整。器面にロクロ目を残す。口縁部は僅かに外反し、端部は面を取る。見込みに釉剥ぎを認める。外底部に高台を有する。	瀬戸美濃系？
2	TR4	近世陶器	捏鉢	21.2	(5.3)	—	内）灰褐 外）灰黄褐	灰釉(透明釉)を薄く施釉。口縁部外面が玉縁状に肥厚し、釉剥ぎを認める。口縁部上端に重ね焼痕(熔着)。	18C
23	SK2	備前焼	擂鉢	31.8	12.3	11.6	内）灰褐 外）にぶい赤褐	チャート等の細・粗粒砂を含む。器面は回転ナデ調整。体部は外上方へ立ち上がる。口縁部は肥厚し、顎部の張り出しが顕著。外縁帯に２条の凹線を施す。ベタ底。10本単位の条線(擂目)を施す。	
25	SD7	近世陶器	碗	10.4	7.0	4.6	内）淡緑青 外）淡緑青	体部は内彎して立ち上がる。器面に灰オリーブ釉を施す。丸茶碗。	18C前葉頃の肥前産の可能性
27	SD14	備前焼	擂鉢	29.2	(4.6)	—	内）にぶい赤褐 外）にぶい赤褐	細・粗粒砂を含む。器面は回転ナデ調整で、ロクロ目を残す。体部は外上方へ立ち上がる。口縁部は肥厚し、上方へ拡張する。外縁帯に2条の凹線を施す。6～7本単位の条線(擂目)を施す。口縁部断面に重ね焼による還元焔焼成がみられる。	17C中葉～18C前葉
67	南区包含層	近世陶磁器	皿	—	(5.5)	7.2	内）淡緑青 外）淡緑青 断）灰白	胎土は密で黒い細粒を含む。体部は算盤玉状を呈し、稜線に刻目を施す。外面に三足(獣面)の剥離痕。内面に片切彫りによる文様を施す。外底部に削り出し高台を有し、畳付に釉剥ぎを認める。	17C前葉頃 肥前波佐見産
68	南区包含層	近世陶磁器	皿	25.0	6.0	8.8	内）淡緑青 外）淡緑青 断）灰白	胎土は密で黒い細粒を含む。体部は緩やかに立ち上がり、口縁部は端反りを呈す。見込みに片切彫りによる文様を施す。外底部に直立する高台を有し、畳付に釉剥ぎを認める。	17C 肥前波佐見産
69	南区包含層	近世陶磁器	皿	—	(4.4)	9.0	内）淡緑青 外）淡緑青 断）灰白	胎土は密で黒い細粒を含む。見込みに片切彫りによる文様を施す。外底部に直立する高台を有し、畳付に釉剥ぎを認める。	17C 肥前波佐見産
70	南区包含層	近世陶磁器	碗	—	(3.0)	5.0	内）灰白 外）灰白	器面に網目文を施す。外底面に１条、高台外面に２条の界線の染付。畳付に釉剥ぎを認める。	17C後半～18C
71	南区包含層	近世陶磁器	壺(瓶)	—	(4.0)	8.2	内）灰黄褐 外）灰白 断）灰白	胎土は密で灰白色。外面のみ施釉。体部は直線的に外斜上方に立ち上がる。断面逆台形状の腰輪高台を有し、畳付に釉剥ぎを認める。(見込みに残留異物焼成痕)	
72	南区包含層	近世陶磁器	小皿	—	(1.6)	2.3	内）明オリーブ灰 外）明緑灰	型成形による放射(貝殻)状痕。体部は直線的に立ち上がり、白磁釉を施す。腰折れの高台を有し、高台径が比較的大きい。	紅猪口 17C前葉 肥前系
73	南区包含層	近世陶器	鍋	15.4	(2.9)	—	内）浅黄 外）浅黄	回転ナデ調整。胴部内面に鉄釉。口縁部に受け部を有する。	行平鍋
77	攪乱１	土師質土製品	焜炉	—	(10.1)	—	内）浅黄橙 外）橙	細・粗粒砂を含む。外面ナデ・内面ハケ調整。外面にヘラ状原体による圧痕。	方形(箱形)

第５表　遺物観察表（土製品・石製品・他）

図版番号	出土地点	種類	器種器形	法量（cm）				色調	特徴	備考
				全長	全幅	全厚	重量			
3	TR4 (SD7)	石製品	石臼	(20.4)	(9.4)	15.0	(2,500g)	内） 外）	砂岩。上臼部分。上面は凹状を成し、口径4cmの孔が貫通。摺り目は４～５条単位が残存(摩耗)。	外面に煤け ※26と同一個体
14	SD15	土製品	土錘	5.0	2.4	2.3	26.0g	内） 外）にぶい黄橙	チャート等の細・粗粒砂を含む。芯を用いて成形。両端は面を取る。側部に圧痕を認める。	
20	SD16	石製品	加工品	11.6	7.6	7.6	(1,215g)	内） 外）	結晶片岩。面を取る。	
24	SD3	石製品	石臼	(14.6)	(14.6)	11.5	(2,273g)	内） 外）	砂岩。上臼部分。上面は凹状を成し、口径5cmの孔が貫通。上端に研磨痕。摺り目は２～３条が残存(摩耗)。	外面に若干の煤け 断面に被熱赤変
26	SD7	石製品	石臼	(13.0)	(8.0)	14.4	(1,674g)	内） 外）	砂岩。上臼部分。上面は凹状を成す。摺り目は２～３条が残存(摩耗)。	外面に煤け ※3と同一個体
74	南区包含層	土製品	—	(4.1)	(2.8)	1.0	(17.0g)	内） 外）橙	細・粗粒砂を含む。残存部は撥状を呈し、断面は楕円形。一部に櫛描き状の条痕。側面に罅条の接合痕。	
75	南区包含層	土製品	窯道具	(1.9)	2.5	(1.9)	(8.0g)	内） 外）にぶい褐	円錐状を呈す。頂部に輪状の熔着(鉄釉)。	ハリ支え技法
76	攪乱１	土製品	窯道具	(1.9)	2.5	(1.9)	(8.0g)	内） 外）にぶい褐	円錐状を呈す。頂部に輪状の熔着(鉄釉)。	ハリ支え技法
81	表採	石製品	石臼	(28.6)	(15.6)	9.0	(5,000g)	内） 外）	砂岩。上臼部分。上面は凹状を成し、上端に研磨痕。摺り目は摩耗し観察不可。	



※矢印は時期修正の可能性を示す。

第39図　南区 中世土器編年表 (S=1/5)

第Ⅳ章　総括

第１節　東野土居遺跡出土の中世土器様相

古代(律令期)から中世の掘立柱建物跡や溝状遺構などを検出した東野土居遺跡(1)の主要部は、香宗川の自然堤防上から立山神社周辺に展開しており、本調査区はその縁辺部付近に所在している。

当遺跡(以下本調査対象地)は標高約7.8～8.0ｍ(遺構検出高)を測る河成堆積扇状地に立地し、溝状遺構を中心に検出がみられ、北端は凹地状を呈した自然地形の可能性を存して集落の北限を示唆している。

本調査で得られた出土遺物や検出遺構は、質･量共に充分ではなく、遺跡の性格について明確な位置付けを行う事は困難であるが、若干の考察を試み総括としたいと考える。遺物の分類については遺構出土の遺物が僅少で、多くは包含層及び攪乱１からの出土であり、型式に基づく相互の共伴関係や、層位による相対的な出土状況を把握できる資料は乏しく、帰属時期の編年観については検討の余地が残り意を尽くせていない。本項では図化し得た遺物を概観するに留め、土器様相のまとめとしたい。

(1)土師質土器

土師質土器は坏、椀、小皿を出土しており、出土遺物における割合は８割以上を占める。供膳具に関しては殆どが回転台成形で､底部回転糸切りを製作手法の基調としている。土師質土器とは轆轤(回転台)を用いて成形し、施釉せず低火度で酸化焔焼成された中世土器の一つとして捉えられており、本報告書においてもその名称を使用しているが、土師器との区別における概念規定は明確ではないとされる(2)。

出土した土師質土器は殆どが在地産と考えられ、搬入品及び京都系(模倣)土師器皿(手捏ね成形)の出土は確認していない。

坏：口縁部が短く外反し、端部は肥厚して口唇部を丸く収めている形態の坏が比較的多く出土しており､体部が内彎する型式(30～36･49～54)とやや直線的に立ち上がる型式(33･55～58)の２種類がみられる。特徴となる口縁部が欠損している場合でも、出土状態や体部の形状から同型の可能性を示唆してみた(第27図31･34)。法量の平均値は口径14.6㎝、器高4.6㎝、底径7.9㎝を測る。12世紀代(後半)を中心に周辺の他の遺跡でも出土が確認されている(3)。

この他に、体部の外傾がやや強く比較的器高指数の低い形態の坏(16)や、器高が高めで底部はやや平高台状を呈している形態の坏(5)が出土するなど、時期差がみられる(第39図)。

椀：体部が「ハ」字形に開き､円盤状高台を呈して内底部が凹状(有段)を成す形態の椀(18･43～45)が数個体出土しており、当遺跡における帰属時期(10世紀末～11世紀初頭)の動向を認める。輪高台を有した形態の椀(65)や形骸化した円盤状高台を呈した形態の椀(46･64)は時期がやや下り、内面にミガキを施して器面を滑らかにするなど、坏との区別が顕著である。

小皿：小皿の口径は９世紀から14世紀頃まではほぼ縮小傾向にあり(4)、本調査では口径8.3～7.2㎝を測る小皿(10･21･66)の出土がみられ、12世紀末～13世紀代の範疇に比定されると考えられる。本調査における坏･椀などの供膳具の出土量と比較すると、その割合は僅少である。

(2)瓦質土器

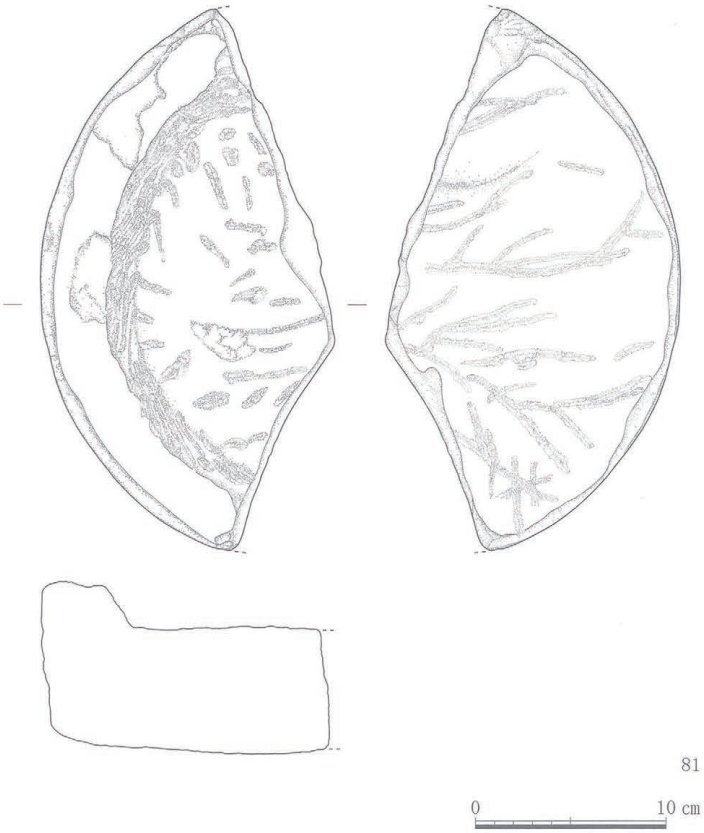
瓦質土器は煮炊具(羽釜)を中心に出土がみられるが、出土遺物における割合は僅少である。13 世紀(後半)に出現するとされる三足羽釜形態の脚部(47･48)を出土しているが、鍔部は退化する傾向がみられる。また溝状遺構(ＳＤ17)から瓦器椀の底部が出土するなど、土佐における瓦質土器の劃期に該当する時期と考えられるが、14 世紀中葉～後半にかけて出現するとされる「土佐型鍋」(5)の出土は確認しておらず、当遺跡の消長を示唆していると考えられる。

(3)貿易陶磁器

本調査において貿易当陶磁器(青磁･白磁)の出土は細片 4 点を確認しているに過ぎず、東野土居遺跡全体(他調査区)を含めても出土量は多くはない(6)。細片は 13 世紀前半頃の龍泉窯系青磁碗(鎬連弁文)と 12 世紀末～13 世紀初頭頃の白磁碗(Ⅳ類)と考えられ、帰属時期は本県に搬入された盛期を示している(7)。12 世紀末～13 世紀初頭にかけては広域流通品の物部川下流域での出土頻度が概して低調となる時期でもあり(8)、このことは本調査において検出した遺構群にもこの時期を劃期とする時期差が看取できる。

(4)石製品

石臼：全て挽(碾)臼であり、石材は砂岩を用いている。挽臼は上臼(雌臼)と下臼(雄臼)から成り、上臼には供給口となる孔が貫通している。目は中心から放射状に刻む主溝と平行に刻む副溝が上臼･下臼共に同じ分画(条数)で構成されている。挽臼は紀元前に西アジア方面で発明され、中国･朝鮮半島を経由して日本に伝わったとされる。鎌倉時代以降に普及し始めるが、一般的に使用されるようになるのは江戸時代になってからと考えられており、食習慣(粉食)の変化と石工技術の進歩が関係しているとみられている(9)。本調査区において表採(81)を含めて 3 個体分が見つかっており、出土遺構から近世の所産と考えられる。



第 40 図　表採遺物実測図 (S=1/4)

小括

遺物からみた当遺跡の中世期の概要は、10 世紀末～ 11 世紀初頭頃に存立の基盤が推察され、12 世紀代を中心に一時期の盛期が看取できる。続く 13 世紀代は瓦質土器を出土する遺構群の出現がみられ始め、当遺跡における一つの劃期と捉えることも可能である。しかしながら 14 世紀後半以降を示唆する遺物の出土は確認できず、次に人々の営為が認められるのは近世(17 世紀)に入ってからである。

近年、泥炭層のボーリングコア分析や年輪の成長線、海水準曲線などの分析により、中世の気候変動

について長期的な気温の寒暖変化が明らかになりつつあるとされている(10)。太陽(黒点)活動や炭素14の放射性同位体生成率に関する分析結果などから概観すると、中世初期(11世紀後半～12世紀)は比較的温暖な時期とされ、開墾等による荘園公領制などが成立する。鎌倉時代にもその傾向は続くとされるが、中～後期(13世紀末～16世紀中葉)にかけては太陽活動の衰退期(ウォルフ/シュペーラー極小期)となり、因果関係は不明ながら寒冷化(小氷期)の影響で社会情勢が不安定になる。近世初期(16世紀末～17世紀初頭)にはやや回復し、水利事業の展開や新田開発など生産活動が向上するが、17世紀中葉～18世紀初頭にかけての黒点極小期間(マウンダー極小期)に再び寒冷化が始まり、19世紀中葉まで小氷期(ダルトン極小期)が続いたとされている。これらの環境復元は試論的であり積極的援用は難しいが、当遺跡の消長と軌を一にする可能性も残されており、調査事例を比較検討するなどの考古学的検証が課題となると思われる。

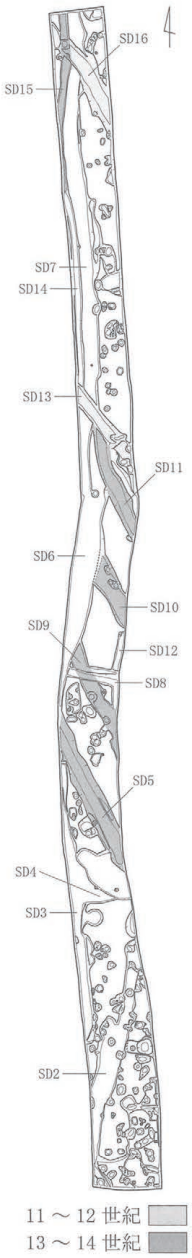
第2節　東野土居遺跡における中世村落の景観的様相

東野土居遺跡における調査対象地での検出遺構は、南・北(南半)区共に溝状遺構を中心に検出している。溝状遺構の機能した時期は大きく中世・近世に分けられるが、中世の遺構は出土遺物と検出状態での主軸方向(対真北平均傾斜度)から時期差が看取できる。

溝状遺構群偏傾角(第13図)に示されるように、ＳＤ13・16の主軸方向はN−37～40°−W(平均偏傾角N−39°−W)であるのに対し、ＳＤ5・9・10・11はN−25～31°−W(平均偏傾角N−28°−W)と僅かながら差異を認められる。前者からは円盤状高台を有する土師質土器を出土するなど、埋没時期は11世紀代の年代観を与えることができる。一方後者は瓦質土器の出土がみられ、遺物の帰属時期から埋没時期の下限は13～14世紀代の範疇に求めることができる。また同じく瓦質土器を出土したＳＤ15は真北(N−1°−W)に走向するなど現況地割にほぼ則しており、北区で検出したＳＤ17(N−3°−E)と出土遺物の類似性なども含めて、同一遺構の可能性が考えられる。同様に近世の溝状遺構も北を指向しており、時期差を経て同地割を踏襲していた可能性が看取できるが、香宗川流域に展開する条里的(方格状)地割(N−13°−E)(11)とは方向を異にしている。本調査は農道整備工事事業に伴う発掘調査であり、実掘範囲は幅約3ｍ前後と限られているため、検出したこれらの溝状遺構群は部分的な検出に留まり、全容は不明である。

集落遺跡とは基本的に屋敷地群として認識できる遺跡であり、道路状遺構を伴うとされているが、本調査では確認していない。今回の調査で屋敷の区画溝の可能性を残す遺構としてはＳＤ5の検出をみる。幅約1ｍ、深さ約0.6ｍを測り、断面形態は逆台形状を呈する比較的確然とした溝状遺構であるが、小字「野々土居」(東野土居遺跡)(12)で検出したような防御的機能を有する堀状形態とは異なり、軍事性を帯びる遺構とは捉え難い。出土遺物から14世紀中葉～後半頃までには埋没したものと考えられる。

本調査区では集落の中心となるような区画された屋敷地跡は確認していないが、数条の溝状遺構が一定の規則性を保ちながら集落を形成していた可能性が考えられる。溝状遺構は水利に乏しい段丘中位面に立地している当遺跡において、灌漑施設としての機能を有していた可能性が想定されるが、検出した溝状遺構の床面高に高低差は殆



第41図　南区 溝状遺構変遷図 (S=1/350)

ど認められず、自然科学分析などの検証資料も無いため、流水・湛水状況を示す証左は不明である。野市台地との地形的連続性がみられる長岡台地においても、耕作地を灌漑し得た用水溝水系の確立は17世紀前半～中葉を待たねばならず、漏水率の高い黒ボク土壌を有する両台地の中世(前半)の景観は、近年の発掘調査等(13)の成果により畑耕を中心に展開していたと考えられているが、一部に自然湧水(伏流水)を利用して緩傾斜地に谷田(やとだ)(谷地田)などの水田耕作地を形成していた可能性も指摘されている(14)。

出土遺物(広域流通品)から当該期の様相を概観すると、12世紀末～13世紀初頭頃に中世的流通への劃期があるとされ、14世紀中葉～後半には遺跡の消長や搬入品の集中状況からみた大きな変化がみられる。平安期や鎌倉初期から盛行を続けた遺跡の中で、14世紀前半～15世紀前半に該当する時期に衰退する周辺遺跡は、林田遺跡(15)(香美市土佐山田町)や拝原遺跡、十万遺跡などがあり、当遺跡においてもその傾向が看取できる。一方で14世紀後半～15世紀代にかけては田村遺跡群への偏在が顕著となる(16)。

出土遺物の考察によって得られた年代観に基づき、13～14世紀代を中心とした当該地における歴史的情勢などを文献史料等の観点から検討してみたい。11世紀後半～12世紀にかけて土佐国でも様々な荘園が立荘し、当遺跡周辺においても兎田保(香南市野市町)や徳善保(同香我美町)、須留田別府(同赤岡町)などの荘名がみられる。「承久の乱」(1221年)直後の同3年8月1日付の六波羅下知状(「香宗我部家伝證文」)に「大炊寮便補土左国香曾我部保」との記述があり、当遺跡は立地からみて香宗我部保に属していたと考えられる。貞応3(1224)年2月25日付の北条泰時書状(同)により、荘郷を自領として守護所使不入の権限を得た香宗我部氏は在地領主として地域権力化し、荘民に対する勧農沙汰権(下地進止権)や検断権を確立するなど封建的領主へと変貌していった。鎌倉時代末期になると世情が不安定になり、嘉暦2(1327)年12月16日付の六波羅裁許状(同)には社領の一部(大高坂郷)が押妨されるなどの沙汰が記されている。同書状には「土左国立山社地頭彦太郎宣通」とあり、宣通は香宗我部氏の庶流(立山氏)として一分地頭職を得て香宗我部郷地頭秀頼の下(もと)にあったとされる人物である。倒幕に前後する元弘3(1333)年5月27日付の須留田心了軍忠状(同)には、香宗我部家に帰属していたとされる同氏が足利尊氏に応じたとする書面が遺されている。須留田氏は香宗我部郷須留田の名主的土豪で、建武3(1336)年10月22日付の藤原清秀・源長氏連署奉書(同)にも須留田法眼房なる人物が北朝(足利)方として糾合するよう促す文面が記されている。香宗我部氏も南北朝期に功名を成し、暦応4(1341)年と推定される閏4月5日付の高師直(こうのもろなお)書状(同)などから、同氏(秀頼)が権門(守護)を背景に大忍庄や吉原庄(同吉川町)に勢威の伸張を図っていたことが窺える。香宗我部秀頼(甲斐孫四郎)は元弘3(1333)年6月4日付の書状(『土佐国蠹簡集』)で、長宗我部氏と共に介良庄(長岡郡)の平定を尊氏から命じられるなど、鎌倉時代末から南北朝期にかけて香宗我部家を統御した人物であり、康永4(1345)年に地頭職を譲り(「香宗我部家伝證文」)、延文2(1357)年に死去したと伝えられている。

「観応の擾乱」(1350～1352年)を経て土佐守護は細川氏に推移り、満益(頼益流細川氏)以降、守護代として田村周辺を基盤に15世紀中～後半にかけて最盛期を築くに至る(「最御崎寺文書」「吸江寺文書」他)。細川氏の守護代所としてあった田村城館(17)(南国市)は、西偏していた物部川旧派流を臨む自然堤防に立地していたと想定されている。河口付近の浜堤背後の旧潟湖は嘗て「大湊」と呼ばれ、後身の町場(『長宗我部地検帳』)が流路を介して守護代館と一体となって機能し、細川氏権力を支えていたと考えられている(18)。

当遺跡周辺の歴史的情勢を気候環境も含めて概括すれば、“中世温暖期”とされた鎌倉時代初頭に中原氏(香宗我部氏)が地頭職として当郷に補任し、「承久の乱」などを契機に封建的領主として地域権力化する。寒冷化が始まる鎌倉時代末期の立山神社周辺の支配構造が文献等で確認できるが、香宗我部家惣領(秀

※大日本帝國陸地測量部（明治40年測量 昭和8年修正）1：25,000 後免を基に『野市町史』附属地図「野市町小字図」を参考に作成。

第42図　東野土居遺跡周辺小字図（S=1/10,000）

頼)の歿年時期(14世紀中葉)と前後して当遺跡は廃されており、南北朝期などの時局及び寒冷化に伴う海退(飛砂現象)等の影響も、地域権力構造を変質させる要因を成した可能性が指摘されている(19)。広域流通品の田村城館への集中が守護代細川氏の入封時期と重なるが、「大湊」の消長との関連は示唆的である(20)。

当該地における中世村落の景観的様相は、調査対象地周辺の小字(「宮ノ後」・「ニノミコ」等)が、少なくとも天正16(1588)年の『長宗我部地検帳』(「香宗分御地検帳」)に遡り、「立山分」の記載などから立山神社(立山氏)との関連性(社領域)を示唆する遺称として傍証ながら復原し得る。また小字「神主」付近から社跡の可能性が考えられる遺構を検出しており(21)、同神社との関連も考慮される。中世立山神社領の構造、社領支配・経営及び社領農民の存立形態等の諸問題についての検討は、今後の課題として後考に期したい。東野土居遺跡の調査は、南国・安芸道路建設に伴う発掘調査等により、一部面的な集落の展開を見せ始めたところであり、扇状地から沖積低地へと漸次的に逓減する地形的特性に占地している状況も視野に入れ、集落の構成要素である屋敷・耕作地の存在形態や地域構造の中で村落の変遷を考える必要性が生ずるものと思われる。また明治期の『高知県香美郡町村誌』香宗村の項に、本村より野市村境の小字「宮ノ後」を流下する「岩﨑溝」(幅3尺)という水渠の存在が記されている。関連の有無は不明であるが、地割に則した溝状遺構や、肥前産陶磁器(青磁皿)等の威信財の意図的な廃棄の可能性も含めて、近世期の村落構造(生産遺構等)及び17世紀中葉から始まるとされる寒冷化の影響についての検討も課題として残されている。

第3節　東野土居遺跡周辺(香南市域)の中世集落関連遺跡

香南市は現在約170遺跡(平成24年度)を確認(把握)しており、中世に帰属するとされる遺跡は凡そ50遺跡(城館・寺跡・五輪塔群等を除く)を数え、多くは複合遺跡である。発掘調査等が実施された主な香南市域の中世集落関連遺跡について、調査事例の概要を述べたい。

1. 深渕北遺跡

野市町父養寺に所在し、河口から約5㎞上流の標高約22m前後を測る物部川東岸の新期扇状地に立地している。古代末から中世前期に成立していたと考えられ、11世紀後半～12世紀代の遺物を主体とする溝を伴う掘建柱建物跡を検出している。また貿易陶磁器(同安窯系青磁碗、白磁碗Ⅳ・Ⅴ類)の出土がみられ、川に面した立地から「郡津」の可能性も想定されており、亀山窯跡(野市町佐古)との関連が指摘されている。

2. 母代寺土居屋敷遺跡

野市町母代寺に所在し、標高約33～34m前後を測る山麓堆積地形に立地している。12世紀後半を中心とする12世紀前半～13世紀後半にかけての集落遺跡であり、包含層からは14世紀前半～16世紀後半の遺物も出土している。貿易陶磁器(龍泉窯系・同安窯系青磁碗、白磁碗Ⅳ類等)や滑石製石鍋(同転用温石)、楠葉型瓦器椀など広域流通品の出土がみられ、井戸跡から廃絶儀礼に用いたと考えられる瓦類、須恵器(甕)等を出土するなど、周辺に所在する深渕北遺跡や亀山窯跡との関連が指摘されている。

3. 北地遺跡

野市町下井に所在し、河口から約2.8㎞上流の標高約17m前後を測る物部川東岸の古期扇状地に立地している。弥生時代(前期末～中期中葉・後期前半)の集落跡及び古代の官衙関連遺構を検出しており、周辺の下ノ坪遺跡や西野遺跡群などとの関連が指摘されている。中世の遺物は僅少であるが、貿易陶磁器(白磁碗Ⅳ類)や大和型瓦質土器の風炉(火舎)を出土している。

4. 曽我遺跡

野市町中ノ村に所在し、河口から約3.2㎞上流の標高約8m前後を測る香宗川と支流山北川に挟まれた自然堤防に立地している。律令期の官衙関連と考えられる掘建柱建物跡を中心に検出がみられ、中世の遺構は僅少であるが、出土遺物から11世紀末を帰属時期とする土坑(井戸跡)が確認されている。

5. 十万遺跡

香我美町十万に所在し、標高約13m前後を測る香宗川左岸の丘陵縁辺部の微高地に立地している。縄文晩期から近世初頭にかけての遺構を検出しているが、遺跡の盛行期は古代(8世紀中葉～後半)の官衙関連遺構(掘建柱建物跡)と中世(14～15世紀)の環濠屋敷群の成立に求められる。14世紀代の土坑から廃棄された未ロクロ成形の土師器皿を含む供膳具を出土している。

6. 拝原遺跡

香我美町上分拝原に所在し、標高約19m前後を測る香宗川の支流山南川右岸の河成段丘に立地している。中世(前期)の遺構として掘建柱建物跡や溝状遺構を検出し、貿易陶磁器(龍泉窯系・同安窯系青磁碗、白磁碗Ⅳ類等)や瓦器椀など11～13世紀代に比定される遺物の出土がみられる。本遺跡は縄文時代(後期)の土器片や、弥生時代(前期末・後期中葉)、古墳時代(前期)の集落跡を検出しており、香宗川(山南川)に依拠する水系集落として展開していたと考えられている。

7. 稗地遺跡(22)

香我美町上分稗地に所在し、山南川左岸の氾濫源性の低地から低位段丘に続く標高約22m前後を測る平坦面に立地している。中世における本遺跡の位置付けは不明であるが、遺構から12世紀後半～13世紀前半の貿易陶磁器(龍泉窯系青磁碗)を出土している。

8. 徳王子前島遺跡(23)

香我美町徳王子に所在し、丘陵西麓の小規模扇状地と大留川の谷底低地に立地している。2条の自然流路跡を中心に遺物が出土し、古代(8世紀後半～9世紀代/10世紀後半)の流路跡からは、祭祀遺物(木製品)や墨書土器など律令期の遺物が出土している。12世紀代の遺物を終見とし、13世紀初頭には流路としての機能を失ったとみられている。中世(13～14世紀後半)の流路跡からは楠葉型瓦器椀や貿易陶磁器などの広域流通品の出土がみられる。また瓦当を含む瓦片を出土しており、本遺跡周辺に瓦葺建物を含む集落が存在した可能性を示唆している。

9. クノ丸遺跡(24)

香我美町岸本に所在し、標高約5m前後を測る月見山西麓の浜堤に立地している。弥生時代(後期)から近世に亙る約39,500点に及ぶ遺物を出土しているが、主体となるのは中世前半から中葉(12世紀後半～14世紀)にかけての供膳具及び煮炊具を中心とした土師器(土師質土器)であり、手捏ね技法の皿が纏まって出土していることも留意される。全体における出土量の割合は僅少ながら瓦質土器(「土佐型鍋」)の出土がみられるなど、14世紀代を盛期とする。広域流通品と考えられる楠葉型瓦器椀(12世紀後半～13世紀前半)などの出土がみられ、大忍庄(権門)との関連が指摘されているが、遺跡からは集落の存在を示す遺構は検出されず、その縁辺部にあたる機能を有していた可能性が考えられる。多量の土錘を出土するなど、漁撈等の生業を含む海浜部の集落形成の一端を提示していると思われる。出土した貿易陶磁器(龍泉窯系青磁碗、白磁碗Ⅳ・Ⅴ類等)には東南アジアを所産とする可能性のある搬入品が含まれており、広域経済圏を視野に入れた検討が望まれる。遺跡を扼する月見山(標高約70m)には姫倉城跡(「大忍庄地検帳」)が遺存しており、物部川下流域を含む当該地域の重要性を示唆している。

10. 口槇ヶ谷遺跡(25)

夜須町出口に所在し、夜須川左岸の低位河成段丘を臨む山地斜面麓部に形成された開析谷の谷口部に立地している。弥生時代(中期)から近世(中～後期)に亙る複合遺跡であるが、中心となる時期は中世(13～15世紀)であり、山麓尾根上に当該期の集落が形成されていたと考えられている。標高約5m前後に立地している掘建柱建物跡に付帯するとされる溝跡から13世紀前半頃と考えられる瓦器椀が出土し、標高約9m前後に立地している掘建柱建物跡を構成する柱穴と同じ埋土を有する周辺の遺構から15世紀代と考えられる手捏ね成形の小皿等が出土するなど、標高による時期差の可能性が指摘されている。

【註】

(1)筒井三菜・下村　裕 他 『高知県埋蔵文化財センター年報第20号』 ㈶高知県埋蔵文化財センター 2011年

(2)中井淳史 『日本中世土師器の研究』 中央公論美術出版 2011年

(3)松村信博・宮地啓介 『母代寺土居屋敷遺跡』 香南市教育委員会 2010年 他

(4)池澤俊幸 「四国における古代後期から中世の土器様相」『中近世土器の基礎研究XⅧ』 日本中世土器研究会 2004年

(5)吉成承三 「四国の土製甕・羽釜・鍋」『中近世土器の基礎研究21』 日本中世土器研究会 2007年

(6)筒井三菜氏(高知県文化財団埋蔵文化財センター)・菊池直樹氏(同)の御教示による。

(7)池澤俊幸 「南四国に搬入された中世土器・陶磁器と海運」『中世土佐の世界と一条氏』 高志書院 2010年

(8)池澤俊幸 「土佐における広域分布品の様相」『中世西日本の流通と交通』 高志書院 2004年

(9)岩井宏實(監修)・工藤員功(編) 『民具の事典』 河出書房新社 2008年

(10)谷口　榮 「中世の環境と開発」『歴史考古学を知る事典』 東京堂出版 2006年

(11)宮地啓介・松村信博 『曽我遺跡』 香南市教育委員会 2011年

(12)山崎孝盛 「東野土居遺跡の調査成果 ― 中世館跡の発見 ―」 高知考古学研究会 2012年

(13)武吉眞裕・山本哲也・小嶋博満 『小籠北遺跡』 ㈶高知県埋蔵文化財センター 1999年 他

(14)菊池直樹氏(同)の御教示による。

(15)出原恵三 『林田遺跡Ⅰ』 ㈶高知県埋蔵文化財センター 2002年

(16)(7)に同じ

(17)坂本裕一 『田村城跡』 南国市教育委員会 2008年

(18)市村高男 「武家政権の盛衰と土佐国」『高知県の歴史』 山川出版社 2001年

(19)村上　勇 「パリア海退が中世地域社会に与えた影響について」『西国城館論集Ⅰ』 中国・四国地区城館調査検討会 2009年

(20)当該地域の浜堤(砂堆)に風成砂の累重は確認されておらず、海退の影響については検討を要する。

(21)菊池直樹氏(同)の御教示による。

(22)松田知彦 『稗地遺跡』 ㈶高知県埋蔵文化財センター 1993年

(23)島内洋二 他 『徳王子前島遺跡』 ㈶高知県埋蔵文化財センター 2011年

(24)松本安紀彦・舛田龍也 他 『クノ丸遺跡』 ㈶高知県埋蔵文化財センター 2010年

(25)下村　裕・廣田佳久 他 『口槇ヶ谷遺跡』 ㈶高知県埋蔵文化財センター 2008年

【参考文献】

『野市町史 上巻』 野市町史編纂委員会 1992年 他

写 真 図 版

図版 1

三宝山より香宗我部郷を望む（東野土居遺跡包蔵地範囲は概況）

南区 調査前風景

南区 遺構検出状態（南端）

南区 完掘状態（南端）

南区 完掘状態（北端）

調査対象地（南区）と立山神社

SD5 遺構完掘状態

北区（南側）遺構検出状態

北区（北側）検出状態

北区（南側）完掘状態

図版 3

土師質土器・須恵器・土錘

33

34

35

36

37

38

40

41

42

43

土師質土器

図版 5

44

45

46

49

50

51

55

56

57

58

土師質土器

59

60

62

65

64

65

66

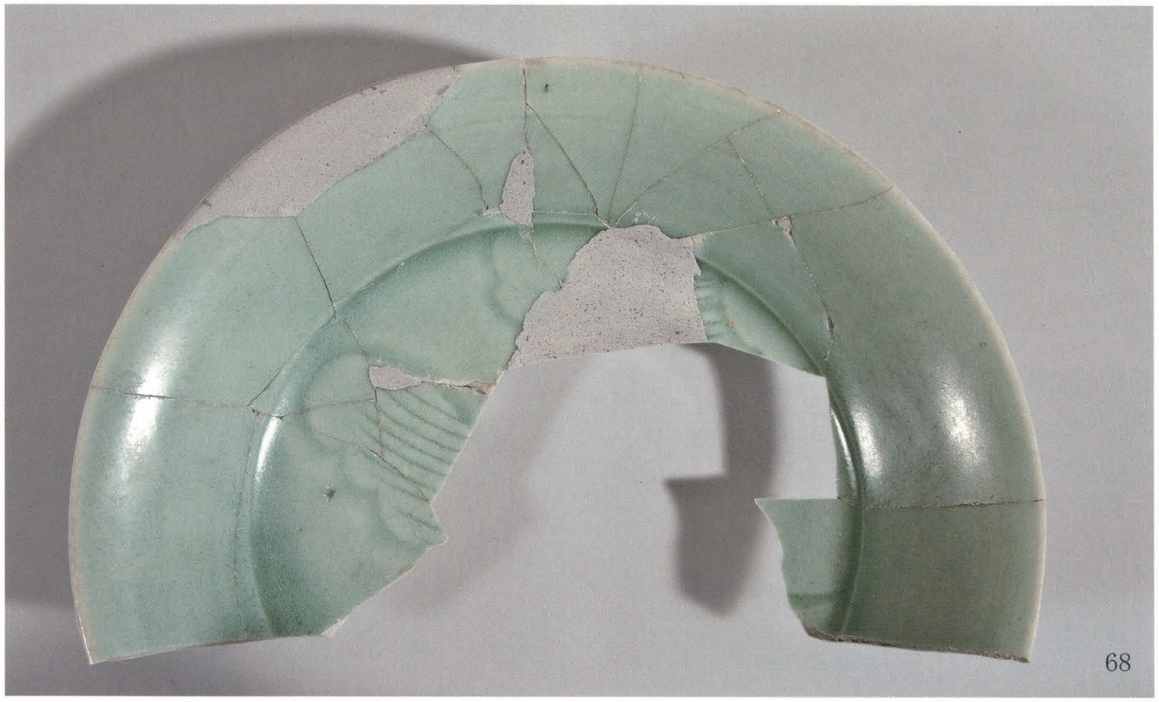
65

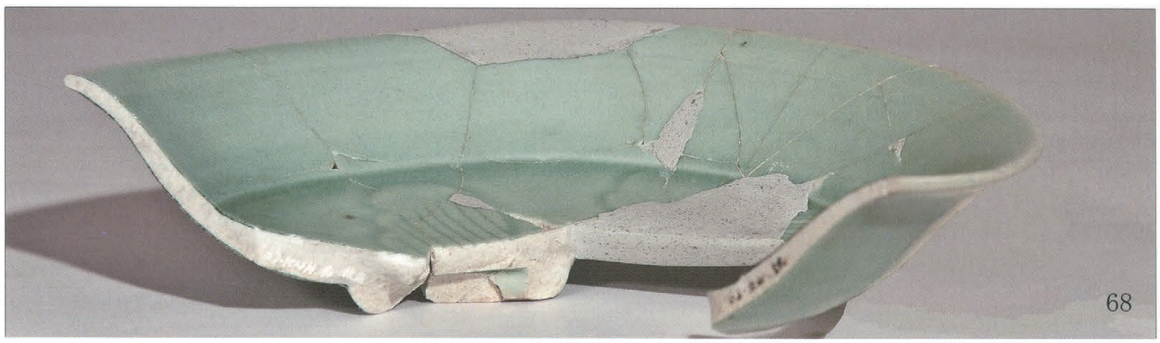
78

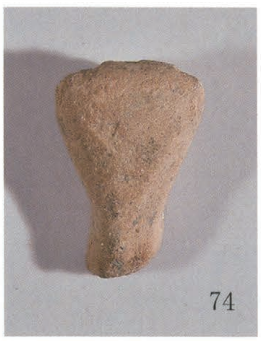
土師質土器

図版 7

近世陶器・陶磁器・備前焼







近世陶磁器・土師質土製品

図版 9

石製品

報告書抄録

ふりがな	ひがしのどいいせき
書名	東野土居遺跡
副書名	立山神社南北線農道整備工事に伴う緊急発掘調査
巻次	
シリーズ名	高知県香南市発掘調査報告書
シリーズ番号	第9集
編著者名	宮地啓介
編集機関	高知県香南市文化財センター
所在地	〒781-5453 高知県香南市香我美町山北 1553-1　TEL 0887-54-2296
発行年月日	2013年3月29日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ひがしのどいいせき 東野土居遺跡	こうちけんこうなんし 高知県香南市 のいちちょうひがしの 野市町東野	39211	200039	33° 33′ 21″	133° 43′ 10″	平成19年 1月15日 ～ 2月23日	400㎡	農道整備 事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
東野土居遺跡	集落跡	中世・近世	溝状遺構 土坑状遺構 ピット状遺構	須恵器 土師質土器 瓦質土器 備前焼（擂鉢） 近世陶磁器 近世陶器 土製品・石製品	11～14世紀代（中世） 17～18世紀代（近世）

高知県香南市発掘調査報告書第９集

東野土居遺跡

立山神社南北線農道整備工事に伴う発掘調査報告書

2013年3月

発行　高知県香南市教育委員会
香南市文化財センター
〒781-5453　高知県香南市香我美町山北1553-1
TEL　0887-54-2296

印刷　香南市野市町西野45
半田印刷